

續國譯漢文大成

文學部 八十一

309
65

快
入



始



續國譯漢文大成



文學部第八十一冊（第二十一帙の二）
高青詩集三の一

吉田行風氏
寄贈本



高青邱集 第三卷 目次

卷十

七言古詩

題美人對鏡圖	一
送曹生歸新安山中	三
曉出城東門聞鶻聲	七
詠苑中秦吉了	九
夏珪風雪歸莊圖	二
始歸江上夜聞吳生歌因憶前歲別時	五
題董元臥沙龍圖	六
松隱居爲戴叔能賦	八
蕭山尹明府吳越兩山亭	二二
目次	一
思夫山	十七

送陶生兼寄周記室	九	姚烈姪	二
倒掛	一〇	立秋前三日過周南飲	一〇六
苦寒書江上主人壁間	一一	送張倅之雲間	一〇八
菜蓮爲余唐卿賦	一二	送王孝廉游京歸錢塘	一一三
送張貢士祥會試京師	一三	賦錢散人江村二題	一一四
明月舟	一四	釣雪灘	一一七
聽南康陳協律彈楚歌	一五	望月臺	一六
京師苦寒	一六	愛竹軒爲陳惟寅賦	一九
約諸君游范園看杏花	一七	幻住精舍尋梅	二三
南州野人爲吳邑曾令賦	一八	北郭秋夜喜徐幼文遠來兼送南游	二六
欲訪李孝廉至婁江遇風而回	一九	次韻答朱冠軍游城西之作	二九
寒夜泛湖至東舍	二〇	贈步鍊師禱雨	三三
京師午日有懷彥正幼文	二一	題朱澤民荆南舊業圖	三六
鷗捕魚	二二	月支王頭飲器歌	三九
泉南兩義士歌	二三	海石爲張記室賦	四三

張中丞廟	一四	雪海爲楊孟載題	一五五
靈巖琴臺	一四八	送王邑長彥強	一五九
送劉將軍	一四九	范魏公手書伯夷頌爲其裔孫天章題	一六〇
和杜彥正徐幼文過甫里	一五〇	送劉冠軍	一六四
送董軍咨赴邊	一五二	奉橘圖	一六五
夜坐有感	一五四		

卷十一

長短句體

青邱子歌	一六九	白雲泉	一八九
登陽山絕頂	一七九	戎王追彘圖	一九三
張節婦詞	一八四	茅山陳道士臥雲所	一九四
與客飲西園花下	一八六	贈醉樵	一九五
吳中逢王才隨朝京使赴燕南歸	一八七	雷雨護嬰圖爲包山徐庭蘭賦	一九九

南園	二〇〇	嬌雌子歌	二三三
滄浪亭	二〇五	贈劉生歌	二五三
石射壩	二〇八	登金陵雨花臺望大江	二七一
走狗塘	二一〇	春日客園無花偶感	二六一
清冷閣爲陳協律題	二一三	白下送錢判官岳	二六三
烏夜村	二一四	聽錢文則琴呈良夫	二六四
醉贈宋卿	二一六	雪齋爲述上人賦	二六九
潘隱君月樓歌	二一八	燕覆巢	二七三
約諸君看范園杏花不果後偶獨游	二二〇	五禽言和張水部	二七四
番人移帳圖	二二二	約王孝廉看梅	二七六
夜聞謝太史誦李杜詩	二二三	題滕用衡所藏山水圖	二八〇
贈金華隱者	二二六	雪海道人以張仙畫像見贈	二八七
春初來	二二九	釣臺歌送嚴陵徐尊生太史	二九一
題黃大癡天池石壁圖	二三一		
書夢中	二四二		

卷十二

五言律詩

草堂夜集	二九五	扇	三〇八
過胡博士郊居	二九六	新荷	三一〇
送茅侯	二九七	鶯	三一一
孤雁	二九八	馬	三一二
曉步園池	二九九	梧桐	三一三
次韻過建平縣	三〇一	圓葵	三一四
鵲軒	三〇二	池上晚酌	三一五
寄杜二進士	三〇四	簾	三一六
雨篷	三〇五	射柳	三一七
聽秋軒爲僧賦	三〇六	流螢	三一八
杏花飛燕圖	三〇七	水殿圖	三一九

新蟬	三一	謝賜衣	三九
林間避暑	三二	西清對雨	三九〇
送劉省郎出佐邊郡	三三	夜宿太廟齋宮	三九一
溢浦琵琶圖	三四	送秦主客遷侍儀使	三九二
金人馬圖	三五	春日退直呈禁署諸公	三九三
夜訪芑蟾二釋子因宿西洞聽琴	三六	送張司勳赴寶慶同知	三九四
錢塘送馬使君之吳中	三七	寓天界寺	三九五
與劉將軍杜文學晚登西城	三八	送前進士夏尙之歸宜春	三九六
和周山人見寄寒夜客懷之作	三九	早出鍾山門未開立候久之	三九七
哭臨川公	三一	雪夜宿翰林院呈危宋二院長	三九八
一窓秋影	三二	至日夜坐客館	三九九
早春侍皇太子游東苑池上呈青坊諸公	三三	自天界寺移寓鍾山里	三一〇
題谿山小隱	三四	夜逢故郡賀冬至使胡浦二博士同宿	三一〇
城西客舍送周著作砥	三五	送鮑翰林遷官陝右	三一〇
兵後出郭	三六	送姚架閣	三一〇
兵後出郭	三八		

送曾主簿之平樂	三五七	無題	三七五
桓簡公廟	三五八	京師寓廨三首	三七六
送陳則	三六〇	送舒徵士考禮畢歸四明	三七七
暮春送陳郎中出守檇李	三六一	陪客登陶丘	三七八
送楊從事從軍	三六二	王公子宅五月菊	三八〇
送王員外遷崇敬	三六三	送周復秀才賦行李中一物得紈扇	三八一
吳中送顧生歸海陵	三六四	送流人	三八二
園中	三六五	贈張省郎	三八三
送前國子王助敎歸臨川	三六六	送瀚公住靈巖	三八四
送潘巡檢之閩中	三六七	送宿衛將出守鄧州	三八五
送思上人	三六八	甘露寺	三八六
宴王將軍第	三六九	送張羽後夜坐西齋	三八七
送朱從事之吳興	三七一	徐山人別墅	三八八
和友人過采石	三七二	客館秋懷	三八九
詠柳	三七三		
秋夜宿周記室草堂送王才	三九四		

江上雨	三九五	題醫師王隱君墓表後	四二
送賈二進士歸省	三九六	贈朱山人	四三
贈衍師	三九七	霧上	四四
送錢氏兩甥度嶺	三九八	次韻楊儀曹雨中	四五
送客歸閩省覲	三九九	寄錢塘諸故人	四六
圓明佛舍訪呂山人	四〇〇	送烏程馮明府	四七
答宗人廉夜飲王氏池亭見懷	四〇一	喜了上人見過	四九
賦得蟬送別	四〇二	病目	四〇
何隱君小墅	四〇三	病目不飲	四一
贈張明府	四〇四	賦得蟹送人之官	四二
送唐博士肅移家檇李	四〇五	江上早發	四三
贈妓	四〇六	客舍喜姪庸至	四四
送顧倅之錢塘	四〇七	哭周記室	四五
答高廉同飲後見寄	四〇八	過永定廢寺	四六
沈徵士鉉野亭	四〇九	楓橋送丁鳳	四七
	四一〇		四八
	四一一		四九
盜發漢侍中許穀墓	四二九	屏居	四六
過海昌贈李侯	四三〇	立秋日	四七
送易從事祖飲南渚	四三一	效唐人贈邊將	四八
題張靜居畫	四三二	送董湖州	四九
夜懷王校書	四三三	晚次西陵館	四五
答陳則見寄	四三四	送僧恬歸之邊郡	四五
煮藥	四三五	江上寄王校書行	四五
夜投西寺	四三六	送越將罷鎮	五六
送石明府之崑山	四三七	送王穎赴大都	五六
過城西廢塲	四三八	送孫主簿之德清	五九
送范架閣赴嘉禾兼簡李使君	四三九	留別李侯	五六
喜呂山人見過江館	四四〇	送王穎赴大都	五六
贈鄰友	四四一	送孫主簿之德清	五六
雨中就陳卿飲酒醉歸賦此寄慰	四四二	留別李侯	五六
送醫士宋君之江上	四四三	送王才歸錢塘	五六
	四四四	送長洲周丞陞吳縣令	五六
	四四五		五六

冬至夜喜逢徐七	四六四
送史丞之海門	四六五
夜雨宿東齋	四六七
師山周君客濠上畫舊隱圖求予賦詩	四六八
微恙江館夜作	四六九
逢李止水道人	四七〇
冬至夜雨感懷	四七一
過戴居士宅	四七二
歸鴉	四七三
晚坐南齋寫懷二首	四七四
臘月廿四日雨中夜坐二首	四七五
書曹谷才世訓詩後爲其子季常作	四七六
題山居圖爲僧賦	四七七
題華氏墨芝檜圖	四七八
賦得銅人贈醫士	四七九
送胡鉉游會稽	四八二
夏景園廬	四八三
寄題崇明學宮天水面軒	四八四
送柔上人得船字	四八六
中秋琵琶洲宴集得紅字	四八七
悼女	四八八
亂後經婁江舊館	四八九
悼故顧宜人	四九〇
過劉山人園	四九一
次韻楊禮曹移疾之作	四九二
送周履道入郭	四九三
雨齋獨坐寫寄友	四九四
次韻酬西園公	四九五
聞鄰家琵琶有感	四九六
書王生扇	四九七
送胡鉉游會稽	四九八
送胡鉉游會稽	四九九

送陳少府赴嘉定	五〇一
報恩寺逢蔣主簿就送還如臯	五〇二
贈姚東曹	五〇三
鍾山雪霽圖	五〇五
周興裔墓	五〇六
酬余左司	五〇八
宿道王蘭若	五〇九
與詩客七人會飲余司馬園亭	五一〇
登西洞小閣	五一二
江上答徐卿見贈	五二三
除夕客中與家兄守歲	五二四
南溪晚歸	五二五
丁孝廉惠冠巾	五二六

五言律詩

送吳縣令遷松陵	五〇九
寄沈校達卿理	五〇九
贈呂醫	五一
次韻陳留公見貽湖上行屯之作	五一
雨後飲西園偶然亭	五一
鄰家桃花	五一
和王止仲校理夜坐	五六
答陳校書客懷	五七

目次	一一
----	----

西園閒興二首	五二七	送金判官之吳江	五七一
送謝恭	五二八	漁樵	五七三
步至東阜	五二九	耕	五七四
郊墅雜賦十六首	五三〇	牧	五七六
采香徑	五三五	夜起觀月	五八〇
響屢廊	五三六	贈劉醫師	五八一
臨頓里十首	五三七	舟中早行	五八三
春申君廟	五三〇	曉晴東阜步眺	五八六
吳女墳	五三一	江上見逃民家	五八五
真娘墓	五三四	賦得戟門送陳博士	五八七
鱸鄉亭	五三五	晚晴東阜步眺	五八六
堯峰院	五三六	櫻桃	五八八
慧聚寺次張祐韻	五三七	金進士葵軒	五九〇
石屋	五三八	次倪雲林韻	五九一
贈竹里子	五三九		

登南樓看雨有懷	五九二	洪武二年十月甘露降後庭柏樹	六一五
晚霽獨酌南樓	五九三	冬至車駕南郊	六一七
追挽恭孝先生二首	五九四	禁中雪	六一九
題宋迪晚煙歸舍圖	五九七	封建親王賜百官宴	六二〇
贈東菴道者	五九九	送安南使者杜舜卿還國應制并序	六二三
樂圃三首	六〇一	送高麗賀正旦使張子溫還國	六二六
送人戍梁谿	六〇三	送鮑修撰出官關中	六二八
月夜游太湖	六〇三	送恩公還江心寺	六三〇
詠夏水	六〇五	喜楊榮陽赴召至京過宿寓館	六三二
題黃鶴山人畫	六〇七	戲嬰圖	六三四
賦得履送衍上人	六〇九	翫花池	六三八
聞蛙	六一〇	送高麗貢使還國	六三九
聖壽節早朝	六一三	韓蘄王墓	六四一

五言排律

焚香	六四九	石井泉	六四八
目 次	一三		

詠夢.....六五
答胡博士留別二十韻.....六六

送高郎中.....六六
送周檢校使高麗.....六六

舞劍聯句.....六七
與會稽張憲夜飲觀銅臺李壯士舞劍而作.....六八

送高郎中.....六四
送周檢校使高麗.....六四

劍池聯句.....六九
與張憲金起王隅同賦.....七〇

送高郎中.....六五
送周檢校使高麗.....六五

病柏聯句.....七一
與青城杜寅鄭郡徐貢游白蓮寺見病柏而作.....七二

送高郎中.....六六
送周檢校使高麗.....六六

風雨聯句.....七三
與會稽張憲在報恩佛寺遇風雨而作.....七四

送高郎中.....六七
送周檢校使高麗.....六七

虎邱聯句.....七五
與金華宋璣張孟兼作.....七六

送高郎中.....六八
送周檢校使高麗.....六八

與潯陽張羽太原王行鄉郡徐貢游虎阜.....七七
蓮房聯句.....七八

送高郎中.....六九
送周檢校使高麗.....六九

瓊姬墓.....七九
甫里卽事四首.....八〇

送高郎中.....七〇
送周檢校使高麗.....七〇

大駕親祀方邱選射齋宮奉次御製韻.....七一
奉迎車駕享太廟還宮.....七二

送鄭都司赴大將軍行營.....七一
送朱謝二博士還吳.....七二

晚登南岡望都邑宮闈二首.....七三
奉天殿進元史.....七四

送丕上人還四明育王寺.....七三
送吳生赴汴省其父指揮.....七四

九日陪諸閣老食賜糕次謝授經韻.....七五
送沈左司從汪參政分省陝西.....七六

送吳僧日章講師東歸送別二首.....七五
送吳僧日章講師東歸送別二首.....七六

清明呈館中諸公.....七七
金陵喜逢董卿併送還武昌.....七八

送賈文學以郡薦赴禮部試畢歸吳.....七七
休沐日期衍公游北山不果獨臥齋中.....七八

送易左司分省廣西.....七九
送王檢校錡赴北平.....八〇

春來.....七九
送賈文學以郡薦赴禮部試畢歸吳.....七九

京師秋興次謝太史韻.....八一
送祠江瀆使者.....八二

送趙使君致仕歸別業.....八一
游南峰寺有支遁放鶴亭.....八二

送葉判官赴高唐時使安南還.....八三
衍師見訪鍾山里第.....八四

送鄰僧淡雲歸笠澤.....八三

目次

高青邱集第三卷

一六

次韻楊孟載署令雨中臥疾	七四
送呂志學秀才入道	七六
送胡簿之陽朔	七八
謁甫里祠	七九
送恩禪師弟子勤歸開元寺	七一
送何記室游湖州	七三
江上寄丁校理昆季	七五
送顧軍咨歸梁溪	七七
白蓮寺次韻杜進士喜予見過話舊之作	七九
期徐七游雲巖	七九
賦得寒山寺送別	八一
聞朱將軍戰歿	八四
送何明府之秦郵	八六
過野寺次韻徐廉使琰舊題	七八
送榮陽公行邊	七八
登涵空閣	九〇
婁江寓舍喜王七隅見過却送還郭	九三
送葉卿還隨西公幕兼簡周軍咨	九五
范文正公祠	九六
丁令威宅	九八
辭戶曹後東還出都門有作	一〇〇
寄余左司	一〇二
聞家兄謫壽州	一〇四
吳城感舊	一〇六
喜幼文北歸	一〇八
送宋孝廉南康葬親	一〇九
送王孝廉游京回錢塘	一一〇
感懷次蔡參軍韻	一一二
寄錢塘方員外	一一三
秋日江館詠懷	一一五

得亡友周履道記室在繫所詩次韻	八六
答呂志學山人見寄	八七
送殷孝章赴咸陽教諭	八九
送基上人希載赴天界	八三
寄永寧丁明府彙簡達君先生	八三
江山晚眺圖	八四
江上春日遣懷	八五
別江上故居	八六
永樂禪寺	八六

高青邱集卷十

文學博士 久保天隨 譯解

七言古詩
題美人對鏡圖

美人鏡に對する圖に題す

曉院鹿盧鳴露井。
玉人夢斷梨雲冷。
起開妝閣笑窺奩。
月裏分明見娥影。
自對猶憐況主家。
春風一面斷腸花。
何由鑄入青銅內。

【字解】
〔一〕 晓院 院は一構の
建物。〔二〕 鹿盧 車井戸。〔三〕 露 井 上に屋根の掩ひが無くて剥き出
しになつて居る井戸。〔四〕 梨雲 梨の花の白く咲き満ちて、さながら
雲の如きを云ふ、王建の夢梨花と題
せらる詩に、落落漠漠路不分、夢中喚
作梨花雪とある。〔五〕 妆閣 化粧
部屋。〔六〕 窩奩 箱は鏡の箱。〔七〕
娥影 娥は嫦娥、即ち月中の女仙。

不使秋霜換蛾翠。 秋霜をして蛾翠に換へしめざらむ。

【八】自對猶憐況主家。自家は主婦。

いとほしと思ふ位であるから、主婦に於ては、猶更の事であるといふ意。妒記に「晉の桓溫、李勢の女を以て妾となす。南郡主、刀を抜き、婢を率ゐて、李の所に往いて、これを研らむと欲す。李の頭を梳くを見る。髪、垂れて地に委し、姿貌超麗、乃ち徐に地下り、髪を結び、手を致め、主に向つて曰く、國破れ、家亡び、心なくして、以て今日に至る。若し能く殺されば、猶ほ生の年のことくならむ」と。神色閒正、辭旨悽愴。主、乃ち刀を擱ち、これを抱いて曰く、我見て猶ほ憐む、何ぞ況んや老奴をや」とあつて、その語を轉用したのであらう。【九】断腸花。秋海棠の別名、那瓈記に「むかし、婦人あり、所歎を思つて見えず、輒泣涕泣し、涙に涙を北牆の下に灑ぐ、後、灑ぐ處に草を生す、その花、甚だ媚色、婦面の如し、その葉、正絛反紅、秋開く、名づけて断腸花といひ、又八月春と名づく、即ち今の秋海棠なり」とある。【一〇】青銅。鏡の地金をいふ。【一一】蛾翠。翠色の蛾眉。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】曉早く、小院の邊なる露井では、水を汲む轆轤の音がして、院中の美人も、それに驚かされて夢が醒め、白く立ちこめたる梨花の雲は、冷かに見える。美人は、すでに起き出でし後、先づ化妝部屋の戸を開いて、その中に入り、そして、鏡の箱を取り出し、蓋を開けて、笑ひつつ、鏡に映る其姿を眺めると、たとへば、圓となる月の中に嬌娘の影がありありと見える様な工合。その顔色のあでやかに媚かしき、自分で見てさへ、いとほしと思ふ位であるから、主婦に於ては、猶更の事で、妬みも何も忘れて仕舞ふであらう。たとへば、春風の吹き度る中に、一面には、愁を含みて、秋海棠の露を帶びて懶げなる其風情が、いかにも人の心を惱殺するのである。そこで、成るべくは、その姿を青銅

の此鏡の中に鑄り込んで、長しへに變せず、秋の霜をして、蛾眉の翠色を換へしめることの無い様にしたいものである。

【餘論】前半四句は、美人の動作を寫し、後半四句は、その姿貌の艷にして風情に富めるを刻劃し、相俟つて、題意を全うしたのである。殊に、兩解ともに後の二句が極めて面白い爲に、餘韻の盡きざるを覺えしめる。

送曹生歸新安山中

曹生の新安山中に歸るを送る

黃山西來九華連。
黃山西より來つて九華に連る、

巖洞翕忽通雲煙。
巖洞、翕忽として雲煙を通す。

白鷺嶺下煉丹處。
白鷺嶺下、丹を煉るの處。

瑤草獨秀今千年。
瑤草獨秀、今、千年。

三十二峰在青天。
三十二峰、青天に在り、

仰面歷數舉馬鞭。
面を仰いで、歷數、馬鞭を舉ぐ。

高林雜樹多未識。
高林雜樹、多くは未だ識らず、

【字解】

【一】黃山。徽州府志に

「府城の西北一百二十里に在り、峰三十二、水潭三十六、溪二十八、洞十八、巖八あり。第四峰に泉あり、湧いて湯の如く、常に丹砂を湧かし、これに浴すれば、能く風疾を愈やす。世傳ふ、黃帝、かつて、容成子・浮邱公と丹を此に合す」とある。

【二】九華。山の名、一統志に「九

風雨一過俱葱芊。

風雨一過、俱に葱芊。

山深何物尤可憐。

山深く、何物か尤も憐むべき、

秋禽幽鳴巧如絃。

秋禽幽鳴、巧、絃の如し。

路廻澗阻似無地。

路は廻り、澗は阻つて、地なきに似たり、

中有蒔藥千家田。

中に薬を蒔く千家の田あり。

雲間雞犬隔流水。

雲間の雞犬、流水を隔て、

居人彷彿皆神仙。

居人、彷彿として皆神仙。

我欲窮游久無緣。

われ窮游せむと欲して、久しう縁なし、

羨君忽去尋歸船。

羨む、君が忽ち去つて歸船を尋ねるを。

猿聲兩岸谿幾曲。

猿聲兩岸、谿幾曲、

白沙明月相洄沿。

白沙明月、相洄沿。

到時西峰草堂前。

到る時、西峰草堂の前、

應有攜酒來華顛。

應に酒を携へて華顛を來すあるべし。

山人不喜說朝市。山人は、朝市を説くを喜ばず、
但話久別情依然。但だ久別を話して、情、依然。

塵埃舊褐便可脫。塵埃舊褐、便ち脱すべし、

灌費十斛山中泉。灌ふに費す、十斛山中の泉。

爲予淨掃石上葉。予の爲に淨く掃へ石上の葉、

早晚有意來高眠。早晚、來つて高眠するに意あり。

【題義】 説明に及ばぬ。曹生は、名字閱歷、ともに不詳。新安は、一統志に「徽州府、晉には新安といふ」とあつて、山中は即ち黄山を指したのである。

【詩意】 黄山は、音に聞こえた名山、山勢西より來つて徽州府城の西北に聳え、その餘脈は、遠く九華山に連つて居る。兩山ともに巖洞多く、雲煙が翕忽として相通じて居る。黄山の中なる白鷺嶺は、むかし、唐の溫伯雪が其下に隠れて丹を煉つたことがあるので、まことに、物外の仙境と稱すべく、千年後の今日、瑞草が獨り其地にのみ叢生して居る。黄山には、三十二峰があつて、高く青天の上に聳え、面を仰いで、一一これを數へむとすれば、馬鞭を擧げて、指點せねばならぬ。山谷の間なる高林の雜樹は、まだ見知らぬものが多く、風雨が一たび過ぐれば、こんもりとして、綠の色が一し

子山と名づく、唐の李白、その名の據なきを廢とし、山の九峰蓮華の如きを以て、乃ち名を九華と更ふ」とあり、なほ李白の詩に、妙有分三二氣、靈山削三九華」とある。

【三】 倉惣 文選吳都賦に神化倉惣とあつて、その注に「倉惣は疾き貌」とある。

【四】 白鷺嶺 黃山志に「白鷺嶺は、唐の溫伯雪、ここに隱る、李青蓮詩あり、これに贈る」とある。

【五】 瑞草 珍らしき草。

【六】 葱芊 二字、ともに茂る。

【七】 洄沿 岸に沿うて流を訴る。

【八】 華顛 白髮頭の老人、東坡の詩に、華前多書録、迎拜或華顛とある。

は鮮かに見える。深山の中で、何が第一にしをらしく愛すべきものかといへば、秋の小鳥が即ちそれで、その静に鳴き囁くを聞けば、自然の音律をなして、さながら、絃を彈するが如くである。行き行きて其山に分け入ると、路は屈曲し、澗谷は之を遮り、殆んど平地も無い様に思はれるが、一境豁開して畠があり、そこには、多くの住民が薬草を培養して居る。眺めやれば、雞犬は、雲間に鳴き、そこには、村らしいものがあるが、遠く流水を隔てて、九で桃源の様な處。その居民は、彷彿として、皆神仙の様に見える。われは、是非一度、ここを尋ねたいと思つて居るが、久しい間縁なくして、未だ其志を達せず、聞けば、君は、歸船を用意し、忽ち此地を去つて、其山中に向はれるさうで、まことに、羨ましい。おもへば、兩岸に猿の聲が聞こえ、谿水は幾たびとなく曲りくねり、明月高く天に冲して、白沙を照らす夜、その岸に沿うて流を泝つて行くことであらう。やがて、愈よ到着すると、西峰なる草堂の前には、村人が寄り集まつて歓迎し、中には、酒を攜へて來る白髮頭の老人も居ることであらう。元來、山中の人は、名利の巷と稱すべき朝市の事を説くを喜ばず、唯だ久しい間別れて居た相思の情を話して、むかしながらの情誼は、極めて厚く、まことに、嬉しく感するごとであらう。ここに至れば、浮世の塵に染みたる古い褐衣などは、脱ぎ棄てて仕舞ふが善いので、これを洗濯するには、山中十斛の泉を費さねばならぬ。願はくは、君よ、予の爲に、石上の落葉を奇麗に掃除して置いて呉れ、予も、亦た早晚、この山中に入つて、高眠したいと思つて居る。

【餘論】起首より居人彷彿皆神仙に至る十四句は、黃山の風景を敍し、我欲窮游の二句を以て、一轉して本題に入り、猿聲兩岸谿幾曲の八句は、曹生歸郷の日の實況を想像し、結二句は、おのれも亦た他日、その地に棲隱したいといふ意を述べて、更に一步を拓開したのである。全篇を通じて、聊か平淺に失せむとする嫌もあるが、路廻渾阻似無地の四句は、流石に、清新警絕を推すべきである。

曉出城東門聞鶯聲

城門朝開路臨水。城門朝に開いて、路、水に臨み、

人語煙中近魚市。人語、煙中、魚市に近し。

誰搖飛觴入蒼茫。誰か飛觴を搖かして、蒼茫に入る、

帶夢驚鳴柳邊起。夢を帶ぶるの驚鳴、柳邊に起つ。

過處寒波動拍沙。過ぐる處、寒波動いて沙を拍ち、

遠聞嘔軋復呻啞。遠く聞く、嘔軋、復た呻啞。

征夫車轉山頭阪。征夫の車は轉す、山頭の阪、

【字解】

〔一〕 魚市、魚市場。

〔二〕 飛觴、急いで漕ぐ船。

〔三〕 嘔軋、船の聲、薛遂の詩に鶯聲

嘔軋中流波とある。

〔四〕 呻啞、又鶯の聲、韓偓の詩に兩

樂伊壁過三花塲」とある。

〔五〕 征夫車、王荳の詩に蘋深嘔軋

車聲等とある。

工女機鳴竹外家。 工女の機は鳴る、竹外の家。

我身本是江湖客。 わが身、本とはれ江湖の客。

偶墮黃塵曉行役。 偶ま黃塵に墮ちて曉に行役。

此聲空憶舊曾聽。 この聲、空しく憶ふ、舊と曾て聽く、

舟中酒醒東方白。 舟中、酒醒めて東方白きを。

【題義】 説明に及ばぬ。城東門は、蓋し蘇州の東門であらう。

【詩意】 蘇州城の東門は、朝に開き、一條の路は、水に臨んで通じて居る。まだ晴れやらぬ煙の中に、人の聲がして、魚市場に近い。その時、誰とも知らぬが、急いで船を押して、蒼茫の間に漕ぎ入つたが、その聲に驚いて、剛は夢を帶びたまま、柳邊より飛び上つた。その舟の過ぐる處、寒波湧き出で、それが岸に打ち寄せて、沙を淘つて居るが、やがて、喧軒嘔啞たる其聲は、次第に遠く聞こえ、たとへば、旅客の車が山頭の坂に登つて響くが如く、工女の機が竹外の小家に鳴るやうである。われは、元と江湖の客、處定めず流浪して居るものであるが、料らずも、浮世の黃塵の中に落ちた故に、曉早く、公事の爲に、出かけねばならぬ。おもへば、むかし、舟中に横臥し、夜來の酒醒めて、東方初めて白みかかりし時、この聲を聞いたこともあつたが、まことに、低徊して銷魂するばかりである。

【餘論】 青邱が蘇州に居た時は、純然たる無官の布衣であつたので、勿論、どこにも行役したことは無い。然るに、ここに偶墮黃塵曉行役とある處を見ると、南京に召し出された時であらう。この詩は、先づ穩當には出來て居るが、中間の一解が、たるみ勝ちで、殊に觸聲を以て車聲機聲に聞きまがふといつた處で、前後の關係が薄弱である様に思はれる。

詠苑中秦吉了

苑中の秦吉了を詠す

不獨能言異凡鳥。 ひとり能言の凡鳥に異なるのみならず、

最愛佳名呼吉了。 最も愛す、佳名、吉了と呼ぶを。

雕籠幾度學雞鳴。 雕籠、幾たびか雞鳴を學び、

驚起煙花六宮曉。 驚起す、煙花六宮の曉。

鶯來別院未知迎。 鶯、別院に來つて、未だ迎ふるを知らず、

先聽遙呼萬歲聲。 先づ聞く、遙に萬歳を呼ぶの聲。

願把春風一杯酒。 願はくは、春風一杯の酒を把り、

從今莫聽上林鶯。 今より上林の鶯を聽くなからむ。

【字解】 **〔一〕** 能言。能く人語を爲す。**〔二〕** 吉了。秦吉了の略。**〔三〕** 雕籠。見事に雕飾したる鳥籠。**〔四〕** 煙花。煙とまがふ花。**〔五〕** 六宮。宮中の奥向、周禮の内宰に「陰禮を以て六宮に教ふるなり」とあつて、その鄭注に「皇后正寢」、燕寢五、これを六宮と爲す。夫人以下分居す」とあり、なほ白居易の長恨歌にも六宮粉黛無顏色」とある。**〔六〕** 鶯來。鶯は車鶯、即ち天子の御車。**〔七〕** 別院。六宮以外、別に造られたる一構。

【六】萬歳 天子を頌賀する辭。【五】頤把春風一杯酒 高隈外傳に「戴顎、春日、雙柑斗酒を擱へ、往いて黃鸝の聲を聽く」とある。【四】上林鶯 上林は禁苑、子立の詩に風光多屬上林鶯とある。

【題義】苑中の苑は御苑、この詩は、御苑に飼養してある秦吉了を詠じたのである。秦吉了は、唐會要に「林邑國に結達鳥あり、能く言ふこと、鸚鵡に勝れり。黒色にして兩眉、獨り黃なり、一に云ふ、形、鸚鵡に似て色白し、頂微黃、頂毛に縫あり、人の髪を分つが如し、耳聰、心慧、舌巧、人言通せざるなし、又これを丁鳴といふ、杜鎔州に出づ」とある。白居易の新樂府に、秦吉了、出南中、彩毛青黒花頭紅、耳聰心慧舌端巧、鳥語人言無不通とあるを見れば、矢張、黒色といふ方が正しい様であるが、時に白色の者もあるといふことで、本草綱目に「秦吉了は、大さ鸚鵡の如く、紺黑色、腦を夾んで黃肉冠あり、人の耳の如し、丹味黃距、人舌人目、目下連頭に深黃文あり、頂尾に分縫あり、能く人言に效ひ、音頗る雄重、熟雞子を用ひ、飯に和して之を飼ふ、亦た白色の者あり」と記してある。なほ和漢三才圖會に「按するに、丁哥は中華より来る、長崎の士人、これを九官と稱し、又佐留加と稱す」とある。

【詩意】この鳥は、唯だ人言を眞似ることが、凡鳥に異なつて居るばかりでなく、秦吉了といふ佳名を負はせられたのが、頗る氣に入つた。この鳥は、見事なる鳥籠の中に飼はれ、雞の鳴聲を眞似て、煙とまがふばかりに花咲き匂へる六宮の曉に驚起して、聲高に啼き叫んで居る。かくて、天子の御

車が別院を音づれ給ふとき、これを迎ふることを知らざれども、遙に萬歳を呼んで、君を壽ぐ聲が、第一に聞こえる。古しへの人は、斗酒を擲へて、鶯の聲を聽いたといふが、君王が此鳥の聲を聞かれた時、春風の中に、一杯の酒を薦めたいと思ふので、今後、上林の鶯は聞かずもがなと思はれる。

【餘論】起首二句は、唯だ秦吉了を詠じたのであるが、以下六句は、苑中の二字に重きを置き、形容刻劃を極めたもので、無論、作者が在京中の作である。

夏珪風雪歸莊圖 夏珪、風雪歸莊の圖

江雲黏波晚模糊。江雲、波に黏して晩に模糊たり、
青山忽失如亡逋。青山、忽ち失うて、亡逋の如し。
乾坤瑩淨冰作壺。乾坤瑩淨、氷を壺となし、
春意散入千林枯。春意、散じて入る千林の枯れたるに。
野橋古渡行人無。野橋古渡、行人なし、
清響瑟索鳴殘蘆。清響瑟索、殘蘆を鳴らす。
江天萬里一老夫。江天万里、一老夫、

【字解】〔一〕黏波 黏は粘著、ればりつく。〔二〕亡逋 逃亡の人。
〔三〕永作壺 姚崇の氷臺賦序に「氷臺は清潔の至なり、君子、之に對す、清を忘れるを示すなり」とある。
〔四〕春意 春の氣分。〔五〕瑟索 ざわざわする。〔六〕短蓑如蓑舟 如舟の前苦寒行に漢長安雪丈、牛馬毛寒縮如蝟とあり、劉子に「海濱の居者、鳥を望む舟の如く、舟

短蓑如娟舟如亮。

短蓑は娟の如く、舟は亮の如し。

魚寒入泥不上眾。

魚は寒く、泥に入つて、眾に上らす。

歸來遠識漁村孤。

歸り來つて遠く識る、漁村の孤なるを。

柴門夜叩聞犬呼。

柴門、夜、叩いて、犬の呼ぶを聞き、

徑竹壓折誰相扶。

徑竹壓折、誰か相扶けむ。

山妻自炊稚子沽。

山妻、自ら炊いで、稚子は沽ふ、

不羨炙肉圍紅爐。

羨まず、肉を炙つて紅爐を圍むを。

嗟予客游歲屢徂。

嗟す、予が客游歲屢ば徂き、

詩囊隨驢走鬚奴。

詩囊、驢に隨つて鬚奴を走らすを。

長安何處覓酒徒。

長安何の處か、酒徒を覓めむ、

飛花撲頭帽不鳥。

飛花、頭を撲つて、帽、鳥ならず。

旅舍無夢還江湖。

旅舍、夢の江湖に還るなく、

慙對風雪歸莊圖。

慙づらくは對す、風雪歸莊の圖。

投じ、暮に歸るに及びて、足して之を成す」とあり、陳師道の詩に願求佳句「遇鬚奴」とある。【二】長安 帝都の義に用ひ、ここでは南京を指す。【三】酒徒 酒飲み仲間。【六】相不鳥 破つて居るものは鳥相でない。鳥相は、普通、儀式めいた時に用ひるのである。【七】江湖 廟堂と對して云ふ。

【題義】圖繪寶鑑に「夏珪、字は禹玉、錢塘の人、寧宗の朝、待詔たり、金帶を賜はる。善く人物を畫き、雪景は全く范寬を學ぶ。院人中、山水を畫く、李唐より以下、その右に出づるものなし」とある。風雪歸莊の莊は、田舎の亭舎。即ち風雪の日に田舎の我が家に歸るといふので、雪景は、夏珪の得意とするところである。

【詩意】江上の晦雲は、波に粘著して、日暮には模糊して居るし、青山は、忽ち見えなくなつて、迷亡した人の様である。やがて雪が頻りに降つた爲に、乾坤は瑩然淨徹、さながら、冰壺の如くなり、春の氣分は散じて、冬がれの千林に入り、枯木は、看る間に花を綴つた。野橋古渡には、行人の過ぐるものなく、雪片は、殘れる蘆を打つて、ざわざわと清響を發して居る。この時、萬里の江天に一人の老漁夫があつて、短蓑は風に吹かれて、蝦毛の逆立つが如く、舟は小にして亮の如く、折角、獵に出たものの、魚は寒氣を恐れ、いづれも泥に潜ぐり込んで、網に上らぬ處から、愈よ思ひ詠めて、家に歸らむとし、流石に、平生慣れたこととて、この吹雪の間にも、おのが住む漁村の孤なるを遠くから識別して、あやまたず遣つて來た。やがて、たどり著いて、夜、柴の戸ぼそをほとほと叩くと、

を望む亮の如し」とある。【七】不上。風は魚唇、即ち網。【八】壓折。おされて折れる。【九】山妻。おのが妻の謙稱、杜甫の詩に理生那免俗、方法報ニ山妻とある。【十】稚。子沽。沽は買ふ、ここでは酒を買ふ。能く銷金帳底、漫斟低唱、羊羹の美酒を飲むのみ」とある。【十一】歲屢徂。賀傳に「旦日ことに、出でて弱馬に騎し、小奚奴を從へ、古錦囊を背にし、得るところに遇へば、書して囊中に

第一に犬が嬉しげに吠えて返辭をする。門内の小徑には、竹が雪の爲に壓し折られて居て、誰も扶け起しもしない。それから、家に這入ると、妻は爲に飯を炊き、稚子は酒を沽つて來て、それで、やつと温まり、富貴の家に於て、肉を炙りつつ、紅爐を圍むといふ贅澤沙汰を羨ましいとも思はぬ。顧みれば、予は客游して數年を経、平生、牘に跨つて外出し、詩囊を鬚の長い老僕に負はせて、後から走つて隨はせて居るが、この廣き帝都の中に於てだに、酒飲仲間とてはなく、落花片片として頭を撲つも、戴くものは烏帽に非ずして、形ばかりの頭巾、相變らず、心の儘に放浪して居る。されば、旅中の漁夫にも若かざるを慙ぶるばかりである。

【餘論】起首、江雲黏波晚模糊以下十四句は、取りも直さず、圖中に見るところを詠出したのであるが、靜的にせずして動的、空間的にせずして時間的にしたのは、畫との重複を避けむが爲にしたので、流石に、詩畫の別を認知したものらしい。以下六句は、圖を見た時の感慨で、専ら之を自己の身上に繋げた爲に、痛切緊健、愈よ加はるを覺えた。なほ雪景を敍しつつ、雪といふ字を一つも用ひぬ處は、特に細心の工夫を凝らしたものである。

始歸江上、夜聞吳生歌、因憶前歲別時

始めて江上に歸り、夜、吳生の歌を聞き、因つて、前歲の別時を憶ふ

前年月夜聞君唱。前年、月夜、君の唱ふるを聞く、
秋滿蘆花此江上。秋は蘆花に満つ、この江上。
一聲離思水茫然。一聲の離思、水茫然、
雲逐孤帆共搖颶。雲は孤帆を逐うて共に搖颶。
驚魚噴浪棲鶴飛。驚魚、浪を噴いて、棲鶴飛び、
木葉散落風吹衣。木葉散落して、風、衣を吹く。
蓮歌盡歇松陵浦。蓮歌、盡く歇む松陵の浦、
漁笛還沈笠澤磯。漁笛、還た沈む笠澤の磯。
停杯數到臨終拍。杯を停め、數へて到る臨終の拍、
露下無聲斜漢白。露下つて聲なく、斜漢白し。
滿船相送盡悽然。滿船相送つて盡く悽然、

【字解】〔一〕離思。別離の愁。

〔二〕驚魚噴浪棲鶴飛。卷五、松江亭の詩注に引いた博異志の文に君山老父の笛の音の豊壯なるを形容して「湖上風動き、波濤汎濶、魚驚跳噴」とあるのを暗用したものと思はれる。

〔三〕蓮歌。采蓮の曲。

〔四〕松陵浦。姑蘇志に「松陵亭は、舊と吳江縣前に在り」と見ゆ。

〔五〕笠澤磯。笠澤は太湖の別名、磯は断岸。

〔六〕臨終拍。拍は調子、愈よ終りに成りがかつた調子、蔡琰の胡笳十八拍に十八拍兮曲雖終、響有餘兮思未窮とある。

〔七〕斜漢。西に斜になつた銀河。

況我當爲遠行客。
解紱今年別紫宸。

況んや、我當に遠行の客と爲るべきをや。
紱を解いて、今年、紫宸に別れ、

歸舟江上又逢君。

歸舟江上、又君に逢ふ。

一尊重聽當年曲。

一尊重ねて聽く當年の曲。

相對渾疑夢裏聞。

相對して、渾て疑ふ夢裏に聞くかと。

東方欲曙餘聲絕。

東方曙ならむと欲して、餘聲絶え、

悲喜盈襟竟誰說。

悲喜、襟に盈ちて竟に誰か説かむ。

願長把酒聽君歌。

願はくは、長く酒を把つて君の歌を聽き、

從此天涯少離別。

これより、天涯、離別少からむ。

【通義】 この詩は、作者が官を辭して、南京より歸郷し、はじめて江上の宅に到着した夜、吳生の歌を聞き、前年離別の時の事を憶ひ出して作つたのである。吳生は、いづれ、名高き歌者と見えるが、その名字等は、一切分からぬ。

【詩意】 去年、月夜に君が歌を唱へる聲を聞いたが、頃しも秋、蘆の花は、この江邊に、白く咲き満

ちて居た。その歌は、一聲ごとに、別離の愁を帶びて極めて物悲しく、江水は渺茫として、はてもなく、一片の雲は孤帆を逐うて、共にゆらゆらと搖いて居た。歌の聲の哀れ極まるにつけて、驚く魚は浪を噴き、時に宿る鶴も堪へられずして飛び立つばかり、やがて、木の葉は散り落ち、風は颶颶として、衣を吹いた。松陵の浦上に於ては、采蓮の歌も、いつしか止み、笠澤の磯頭に於ては、漁夫の笛も、沈み勝ちとなり、つまり、吳生の歌の絶妙なのに壓倒されて仕舞つたのである。それから、杯を停めて、愈よ終に近き調子に數へ到りし時、銀河は西に斜にして、白くほの見え、露は聲なくして降り注いだ。満船の人は、われを送る爲に來て居たので、これを聞いて、悽然たらざるはなく、まして、われは、送られる當人、遠行の客となるべきものであるから、猶更の事であつた。それから、今年は、印綬を解いて、紫宸に拜辭し、歸舟、はじめて江上に著した時、よくよく、つきの縁があつたものと見えて、又ぞ君に逢ひ、一尊を傾けつつ、重ねて前年の歌曲を聽いたが、君に對して、すべて夢ではないかと思ふばかり。やがて、東方曙ならむとして、白みわたり、歌の餘韻が全く絶えると、悲喜の思ひ更る生じて胸襟の間に満ち、そして、容易に説き出づることも出来ない。ただ願はくは、長しへに、酒を把つて君の歌を聞き、今後、天涯相隔るといふ様な別離の無い様にしたいものである。

【餘論】 前段十二句は、前年の追憶に係り、起筆、すでに超妙、停レ杯數到臨終拍の四句も極めて面白

い。解絵以下の八句、即ち眼前の興會を述べたのであるが、稍や振はぬ處から、どうも均衡を缺いて居る様な氣がする。要するに、この詩の妙は、俯仰低徊往を思ひ舊を感じる一邊に在るので、作者の根觸も、亦た實際であつたに相違ないと思はれる。

題董元臥沙龍圖 董元、臥沙龍の圖に題す

人間滴罷天瓢水。人間、滴れ罷む天瓢の水。
 歸護玄珠臥沙裏。歸つて玄珠を護して沙裏に臥す。
 空潭白日不聞雷。空潭の白日、雷を聞かず。
 雲霧俄隨轉身起。雲霧、俄に隨ひ、身を轉じて起つ。
 誰言北苑筆意精。誰か言ふ、北苑、筆意精しと。
 頭角破屋將飛騰。頭角屋を破つて、將に飛騰せむとす。
 細看圖畫何須恐。細に看れば、圖畫何ぞ恐るるを須ひむ。
 曾謁眞龍游太清。かつて、眞龍に謁して太清に游ぶ。

【字解】
 〔一〕天瓢水。護玄怪蟲に「李靖、山中に射獵し、一朱門の家に宿す。夜半、門を叩くこと急、一婦人、靖に謂つて曰く、これ龍宮なり、天符、命じて雨を行らしむ、二子皆在らず、頃刻を煩はし奉ること如何と。遂に黃頭に勅し、青驥馬を請して來り、又命じて雨器を取らしむ、乃ち一小瓶子、被前に繫ぐ。戒めで曰く、郎、馬に乗せよ、衝勃を漏らさなく、その行くに信せよ、馬、地を踏みて嘶鳴すれば、即ち瓶中の

水一滴を取り、馬髪の上に滴らせよ、慎んで多くすること勿れ」とあり、東坡の時に馬上傾倒天瓢翻である。〔三〕玄珠。莊子に「黃帝、赤水に遊び、崑崙に登り、南に還つて、その玄珠を遺る」とある。〔四〕北苑。董源の號、畫史會要に「海嶽云ふ、平淡天真多し、唐に此品なし、畢宏の上に在り、近世神品格高きも、ともに比するなきなり」とある。〔五〕頭角破屋。名畫記に「金陵安樂寺僧歸、四龍を書き、眼睛を點ぜず。毎に云ふ、これを點すれば、即ち飛び去らむと。人以て妄誕と爲し、因つて、固く請うて之を點す。須臾にして、雷電、壁を破り、二龍、雲に乘じ、騰つて天に上る、未だ請を點ぜざるもの、見に在り」とある。〔六〕眞龍。天子を云ふ、明の太祖。〔七〕太清。三清の一、天を云ふ、ここでは宮城を指す。

【題義】董元の元は、一に源に作る。圖繪寶鑑に「鍾陵の人、字は叔達、又字は北苑、李煜に事へて後苑副使となる。善く秋風遠景を書き、多く奇峭の筆を以て、江南の諸山を寫す。水墨は王維に類し、著色は李思訓の如し。荆關の後、源を最も著はると爲す。釋巨然と並に稱せられて、董巨と謂ふ」とある。この詩は、董源の書いた沙上に臥して居る龍の圖に題したのである。

【詩意】天瓢の水を傾けると、それが雨となつて、人間に降り注ぐのであるが、今しも、その天瓢の水を滴れ盡し。雨も、やつと收まつた。龍は、雨を降らす手傳をして居たが、その住處に歸つて來て、貴い玄珠を守護しつつ、沙の中に横臥して居る。これまで居た深潭には、別に住む者もなく、從つて、白日に雷を聞くといふ神變不思議な事も絶えはてて仕舞つたが、雲霧俄に隨へば、スワ何事が起つたぞといふので、龍は忽ち身を轉じて、はね起きるであらう。畫中に見る龍の姿態は、丁度、こんなもので、流石に、北苑の手に成つただけに、筆意とともに精妙を極めたといはれて居るが、それどころか、

むかし僧繇の畫いたのと同じく、打見たる處、生氣凜凜、頭角は屋根を衝き破つて、天上に飛騰せむばかりの勢がある。しかし、いくら精細に看ても、もと圖畫に過ぎざるが故に、格別恐れるには及ばないので、われは、かつて、真龍と稱すべき聖天子に拜謁し、太清に比すべき宮城に朝參したことさへあつたので、それに較べれば、もとより、物の數でもない。

【餘論】前半は畫、後半は畫に對する感想、その布置は、每每見るところで、格別目新らしくもない。唯だ結末に真龍を擔ぎ出して、おのが身分を明かにしたのは、極めて、雰妙なる落想である。

松隱居爲戴叔能賦

松隱居戴叔能の爲に賦す

江邊柳樹溪邊花。
晉處士宅秦人家。
秋風忽來春雨過。
坐看衰落俱堪嗟。
山中相依歲年久。
羨君獨結蒼鬚叟。

江邊の柳樹、溪邊の花、
晉の處士の宅、秦人の家、
秋風忽ち來り、春雨過ぎ、
坐に衰落を見て、俱に嗟するに堪へたり。
山中相依つて、歲年久し、
羨む、君が獨り結ぶ蒼鬚叟。

【字解】

〔一〕江邊 江は鄱陽江。

〔二〕漢邊 漢は武陵漢。〔三〕處士
宅 晉書に「陶潛門に五柳を植ゑ、五柳先生傳を作り、以て自ら況す」とある。〔四〕秦人家 桃源の住民

を指す、前に卷四、贈三惠山鬱翁の詩中に詳述して置いた。〔五〕蒼鬚叟 松の異名、前に卷六、月林清影の詩中に詳述して置いた。〔六〕長錢 明朝もし同じく棲泊するを許さば、

短褐長錢不解耕。
茯苓作食花爲酒。
我今身似浮雲閒。
正合著在長林間。
明朝倘許同棲泊。
便擬飛隨白鶴還。
明朝もし同じく棲泊するを許さば、
便ち擬す、飛んで白鶴に隨つて還るを。

錢は廣韻に「吳人云ふ、革鐵」とあつて、杜甫の詩にも、長錢長錢白木柄、我生託予以爲命とある。長い鎧。

〔七〕茯苓 前にも見ゆ、松根に生する菌の一種で、補内の藥料に成る。

〔八〕花爲酒 松の花を交ぜて酒を醸造する、岑參の詩に、五粒松花酒とある。〔九〕同棲泊 一處に棲息する。

【釋義】松隱居は、戴叔能の隱宅の名。叔能の事は、列朝詩傳に「戴良、字は叔能、浦江の人、少に

して文を柳待制貫、黃侍講潛に學び、詩を余忠宣闕に學び、皆その師承を得たり。至正辛丑、薦を以て淮南江北等處儒學提舉を授けらる。しかも、湖東、すでに職方に入る、乃ち姓名を變じて、四明山海の間に隱る。洪武十五年、召されて京師に至り、これを官せむと欲す、老病を以て固辭す。世、金華の九靈山下に居る。九靈山人集あり」と見ゆ。この詩は、元末、叔能が姓名を變じて四明に隱居し

て居た時、作者が其依頼に因り、賦して、その居に題したのである。

【詩意】江邊の五柳は、以て晉の處士陶潛の宅たるを知るべく、溪上の桃花は、以て始皇の暴虐を避けた秦民の家たるを察することが出来る。しかし、柳樹は秋風に遇ひ、桃花は春雨を經ると、いづれ

も衰落して、見る影も無い様になり、ともに、人をして思はず嗟嘆せしめる。然るに、君は、獨り蒼鬱叟の綽名ある松に對して清縁を訂し、相依つて、ともに山中に住み、すでに、多くの歳月を経過したのは、まことに羨むべきことである。君は、短褐を著け、長鏡を手にし、野田に耕すことは知らないが、松根の茯苓を掘り取つて食餌となし、又松の花を交せて酒を釀し、全く仙人の様な生活をして居る。今や、わが身も、浮雲と同じく、極めて清閒であつて、長林の間に住むべき筈である。もし、明日にも、君が一處に棲息することを許されたならば、空中を飛行し、白鶴に隨つて、直に君の處に往きたいと思つて居る。

【餘論】 江邊の柳、溪邊の花を以て陪襯となし、徐に本題に引き入れた處は、稍や面白い。戴叔能に贈る本旨は、中間四句に盡きて居るので、結一解は、同じく棲泊したいといふ自己の希望を述べたのである。

蕭山尹明府吳越兩山亭

蕭山尹明府の吳越兩山亭

憶昔看山吳越游。憶昔山を看むとして吳越に遊び、
酒酣鼓棹江中流。酒酣に棹を鼓す江の中流。

左招舞鳳來百里。左に招く舞鳳の百里より来るを、

江中流 江は錢塘江。【三】舞鳳

右顧臥龍橫半州。右に顧る臥龍の半州に横ふを。
崢嶸兩勢不相下。崢嶸兩勢相下らす、
氣翳淨掃當高秋。氣翳、淨く掃うて高秋に當る。
文身鳥喙昔分處。文身鳥喙、むかし分處す、
有國本是名諸侯。國を有す、本とはれ名諸侯。
區區仁暴固無異。區區たる仁暴、もとより異なく、
朝吞暮并山應羞。朝吞暮并、山、應に羞づべし。
不知千載竟誰主。知らず、千載、竟に誰か主たるを、
伯氣候與飛煙收。伯氣、倏ち飛煙と收まる。
邇來此地有兵甲。邇來、この地、兵甲あり、
風景頗似當年愁。風景、頗る當年を愁ふるに似たり。
黃雲蔽天道路遠。黃雲天を蔽うて、道路遠く、「るべし。
我欲再尋應莫由。われ再び尋ねむと欲するも應に由なか」

鳳凰山をいふ、卷三に此山を題とし
た詩があつて、その處に詳述して置
いた。なほ貝瓊の吳越兩山亭記に
「天目よりして來り、その支別は岸
江の山たり。凡そ吳に屬するものは、
欄楯の外に飛舞す」とある。【四】
臥龍山名、一統志に「臥龍山は、紹
興府城の内に在り、盤繞廻抱、臥龍の
形の如し」とあり、東坡の詩に臥龍
山亭記に「秦望よりして來り、その支
別は岸海の山たり。凡そ越に屬する
ものは、窓戸の間に環繞す」とある。
【五】 氣翳 煙靄を云ふ。【六】 文身
吳の先祖の太伯仲雍は、弟季歷に國
を譲らむが爲に、遙に荆蠻の地に逃
れ來り、文身断髪、以て用ふべから
ざるを示したといふことで、なほ卷
二之荆蠻の詩中に詳述して置いた。

聞君作亭壓此境。聞く、君が亭を作つて此境を壓するを、坐獲衆勝非窮搜。坐して衆勝を獲て、窮搜に非す。江長不隔飛鳥度。江は長くして、飛鳥の度るを隔てず、峰多欲障斜陽留。峰は多くして、斜陽の留まるを障らむ。廢興自古屬造化。廢興、古しへより造化に屬す、「と欲す。」

登臨未須生百憂。登臨、未だ須らく百憂を生すべからず。但當矯首望東海。但だ當に、矯首して、東海を望み、一杯笑舉邀浮邱。一杯笑うて舉げて、浮邱を邀ふべし。

【題義】この詩は、蕭山なる尹太守の吳越兩山亭に寄題したのである。

明府は、太守の尊稱。亭は、

【詩意】前年、山を眺めむが爲めに、吳越に游んだことがあつて、錢塘江の中流に舟を放ち、酒酣なる時、棹を鼓して打興じた。左には、鳳凰山、さながら飛舞するが如く、その山脈の百里も續けるを招くべく、右には、臥龍山、その名の如く、蜿蜒として州の半を横絶するを顧るべく、この兩山は、

ともに峰巒として、そり立ち、相持して下らざる底の勢を爲し、折しも、煙靄名殘なく掃ひ盡され、澄んで高き秋の空に當つて見えた。吳は、文身の太伯が開創した國であるし、越は、烏喙と稱せられた勾践が一時その雄威を誇つた處であつて、むかしから、南北に分れて居たが、その土を奄有せらるものは、いづれにせよ、知名の大諸侯であつた。その政を爲す、或は仁を以てし、或は暴を以てしたが、今日から見れば、格別の相違もなく、その國は、朝に他を呑み、暮に他に呑されて、ともにここに主となりしものではなく、その氣は、倏忽の間に飛ぶ煙と共に收まり、今は、全く荒涼たる長くは續かず、常住不變を性とせる山は、これに對して、羞ぢ入るばかり。千載の久しきに亘つて、再び往つて見たいと思つても、全く縁由ない位。聞けば、君は、亭を造つて、この境地を踏まへ、坐ながら羣山の景色を收めて、格別、骨を折つて探す必要もなく、江天長くして飛鳥の度るを隔てず、峰亂立、入日の留まるを遮り、その間氣象萬千、朝夕の眺は、さこそと思はれる。元來、家國の興廢は、古しへより天意これを爲し、もとより仕方がないから、この亭に登つて臨眺する時、百憂を生じて、浮世の事を考へた處で何にもならぬ。それよりも、首を擧げて、はるかに東海を望み、笑つて一杯を擧げて、仙人の浮邱公を迎へ、世事を一切忘れることが至當である。

【五】鳥喙 越王勾踐を云ふ、吳越春秋に「越王は長頸鳥喙」ともに患難を共にすべし、ともに宴樂を共にすべからず」とある。**【六】**名諸侯 知名の諸侯。**【七】**伯氣 勢氣に同じ。

【二】此地有兵甲 元末長槍兵の殘亂を云つたので、卷三、聞三長槍兵至の詩中に詳述して置いた。**【二】**黃雲 煙塵を交へて、黃色に見ゆる雲。**【三】**窮搜 骨を折つて探し出す。**【四】**浮邱 詳しくは浮邱詩中に詳述して置いた。

公、仙人の名、なほ卷四、孤鶴篇の詩中に詳述して置いた。

【餘論】 起首より我欲再尋應莫由に至る十六句は、昔游を追憶して、その地の數ば戰亂を経たるを言ひ、聞君作亭壓此境に至りて、はじめて、本題に入り、結局は、人事を遺却して、神を虛無標的の間に馳すべしといつたので、疑もなく、元末多難の時の作に係るものである。

贈賣墨陶叟

賣墨の陶叟に贈る

龍井老人稱墨仙。
有家近在荆溪邊。家あり、近く荆溪の邊に在り。
鐵白秋鳴竹屋雨。鐵白、秋は鳴る竹屋の雨。
瓦筈春掃桐窓煙。瓦筈、春は掃ふ桐窓の煙。
玄玉初成敢輕用。玄玉、初めて成つて敢て輕しく用ひむや、
萬里豹囊曾入貢。万里、豹囊、かつて入貢。
日長小殿試烏絲。日は長く、小殿、烏絲を試む、
光迸驪珠欲浮動。光は驪珠を迸つて、浮動せむと欲す。

【字解】

〔一〕龍井 地名、徽州

府志に「婺源縣治の西に在り」と見ゆ。

〔二〕荆溪 一統志に「宜興縣

荆南山の北に在り」と見ゆ。

〔三〕瓦筈 素燒の器で松材を燃やして油

煙を取る。前に卷八、謝廬山宋隱君

寄三惠所製墨の詩中にも見えて居

た。〔四〕玄玉 墨の異名。〔五〕

豹囊 袁肅公の詩に牛圭黑玉收三龍

劍、一笏烏金貯豹囊」とあり、文房寶

飾に「儀を養ふに豹皮囊を以てす、

涙に遠ざかるを貴ぶ」とある。〔六〕

鳥絲 駆紙をいふ、李華の國史補に

「宋帝の間、界道の素綱を織成する

あり、これを鳥絲闇といふ」とあり、

黃庭堅の詩に正圓紅袖寫鳥絲」とあ

る。〔七〕驪珠 黒色の珠。〔八〕

潘李 古しに著名なりし墨工、潘谷

と李廷珪父子。なほ卷七、贈磨翁沈

蒙泉の詩中に詳述してある。〔九〕

上林賦 司馬相如の作に係る。〔一〇〕

瀛洲圖 登瀛洲圖の略、唐の太宗が

開立本に命じて、十八學士の像を畫

世間潘李今已無。世間の潘李、今、すでに無し、
黃金滿篋爭來沽。黃金満篋、争つて來り沽ふ。
詞臣供寫上林賦。詞臣は、上林の賦を寫すに供し、
畫史藉作瀛洲圖。畫史は、藉つて瀛洲の圖を作る。
文物年來頗凋弊。文物、年來頗る凋弊、
喪亂誰言少知貴。喪亂、誰か言ふ、貴きを知る少しと。
便須從子乞雙螺。便ち須らく子に從つて、雙螺を乞ひ、
醉草檄書磨櫛鼻。醉うて、檄書を草して、櫛鼻を磨すべし。

香見寄の詩中に詳述してある。〔一一〕雙螺 螺の形に造つた墨二挺、北戶錄に「墨は蝶となし、景となし、丸となし、枚となす」とある。〔一二〕磨櫛鼻 櫛に畫いた鼻の上で墨を磨る、なほ卷八、謝廬山宋隱君寄三惠所製墨の詩中にも見えて居る。

〔題義〕 この詩は、墨工の陶某に贈つたので、賣墨とあるけれども、矢張、自分で造つて賣るものと見える。叟の名字等は、もとより不詳。

〔詩意〕 陶叟は、元と龍井の産、大分、年を取つて居るが、世に墨仙と稱せられ、近ごろは、荆溪の邊に居住して、一心に其業を務め、秋、竹の屋根に雨降り注ぐ時は、鐵の白で墨の原料を搗き碎いて

居るし、春、桐の葉の蔽ふ窓に煙の棚引く頃は、瓦籌で油煙を集めて居る。そこで、玄玉と稱する墨が、やつと出来ると、なかなか、軽しくは使用せず、豹の皮の囊に容れ、萬里の遠きを経て、朝廷に獻上する。小殿に日長き折しも、その墨を磨つて、野紙に書いて見ると、黒い珠かと見ゆる光が迸つて、浮き出づるばかり。潘李と稱せられた一時の名工も、今は世間に居らず、全く陶叟の獨占である處から、黄金を護に満たし、高價を厭はずして、買ひに来る。この墨を得て後、詞臣は、乙夜の覽に入れる上林の賦を淨寫し、畫史は、登瀛洲の圖を畫くといふ次第。今しも、文物は、年來餘程衰微し、全く喪亂の世であるが、それでも、陶叟の墨の貴いことを知つて居るものは決して少くなく、從つて、矢張珍重されて居る。されば、予も、亦た叟の處に往つて、蝶形の墨二挺を貰ひ受け、醉中、檄文を草する爲めに楣に畫いた鼻の上で、その墨を磨る様にしたいものである。

【餘論】前に宋隱君より墨を恵まれしを謝し、又墨工の沈蒙泉に贈つた詩があつて、墨の詩は、これで三度目、しかも、皆七古である。そこで、これを併看すると、用語といひ、構想といひ、自然、複数し出すものが多ないので、青邱の才を以てしても、かくの如き題目は、材料が乏しいから、何とも仕方が無かつたものと見える。この篇中では、鐵白瓦籌の一聯が、聊か精彩を添へたる外、取り出でて云ふべきものはない。

虎邱行、次朱賞靜見寄韻

虎邱行、朱賞靜の寄せらるる韻に次す

我謀我隱西郭西。われ謀り、われ隱る、西郭の西、

讀書坐覺長身低。讀書、坐に覺ゆ、長身の低きを。

出門到寺纔數里。門を出でて寺に到る、わづかに數里、

野水沙竹生秋輝。野水沙竹、秋輝を生ず。

恨無酒舫漾落日。恨むらくは、酒舫の落日を漾はすなく、

百錢行自懸青藜。

百錢、行く、自ら青藜に懸く。

時危未卜久安宅。

時危うして、未だ久安の宅を卜せず、

幸遇勝地須攀躋。

幸に勝地に遇へば、須らく攀躋すべし。

山中況逢暑雨過。

山中、況んや、暑雨の過ぐるに逢ひ、

枇杷樹高陰滿池。

枇杷の樹は高くして、陰、池に滿つ。

興來卽游興盡返。

興來れば即ち遊び、興盡くれば返る、

迎送豈要山僧知。

迎送、豈に山僧の知るを要せむや。

【字解】〔一〕西郭西。蘇州城の西邊。

〔二〕長身低。坐つて居るから、丈高い身體も低く見える。

〔三〕秋輝。秋の光輝。

〔四〕酒舫。游山船。

〔五〕懸青藜。青藜は藜の杖、百錢を杖の先にぶら下げる、晉書院修傳に

「焦、かつて歩行、百錢を以て杖頭に掛け、酒店に至れば、便ち獨り酣暢す、家に唐石なきも晏如たり」とある。

〔六〕久安宅。永久に落ち付く住居。

〔七〕暑雨。夏の驟雨。

〔八〕枇杷。本草綱目に「木の高さ丈餘、陰は密に、婆娑として愛すべし」とあり、杜甫の詩に枇杷樹樹香とある。

兩崖石根下挿水。緣藤倒拂風生漪。空堂朝鼓起龍蟄。高塔夜鈴驚鵠棲。
人生在世本爲客。隨意且留何必歸。邱陵莫歎今日異。城郭更恐他年非。
蒼茫萬事孰可問。孤鳥已沒空煙霏。念君不游何所爲。作字寄我如張芝。
眞娘有靈應大笑。眞娘、靈あらば、應に大笑すべし。

兩崖の石根、下、水に挿み、
綠藤の倒、拂うて、風、漪を生す。
空堂の朝鼓、龍の蟄せるを起し、
高塔の夜鈴、鶴の棲むを驚かす。
人生、世に在つて、本と客たり、
隨意に且く留まる、何ぞ必ずしも歸らむ。
邱陵歎する莫れ、今日異なり、
城郭更に恐る、他年非なるを。
蒼茫萬事、孰れか問ふべけむ、
孤鳥、すでに没して煙霏空し。
念ふ君が游ばずして、何の爲すところ、
字を作つて我に寄せて、張芝の如し。

【二】張芝 王の文情志に「芝、草書を好み、崔杜の法を學ぶ、章仲裕、これを草聖といふ」とある。

把酒豈不延題詩。秋風今朝動江浦。掛席正是當年期。與君一弔興廢跡。
荒臺古樹聞鳥啼。荒臺古樹、鳥の啼くを聞く。

【題義】説明に及ばぬ、但し、朱賞靜の本名閱歷等は分からぬ。

【詩意】われは、色色考へた揚句に、愈よ蘇州城西に歸隱することになり、終日讀書しつつ、坐つてばかり居た處から、丈高い身體も、どうやら低くなつた様な氣がした。門を出でて、虎邱の寺に至るまで、わづかに數里、その間、野水潺湲として流れ、叢竹沙に生じ、相映じて、秋の光彩を放つて居る。酒を載せた游山船を夕日影の中に漾はすといふ豪興の無いのは、殘念であるが、手にせる青藜杖の先端には、飲代として、百錢を掛けたあるから、どこに行つても、先づ氣やすい。今しも、騒亂甚しく、時の方に危きに際し、永久に安居する住宅を卜することは出来ないが、幸に風景に富める勝地に逢つたならば、躋攀するが宜しく、まして、山中、驟雨一しきり過ぎて、枇杷の木は丈高く、その葉かけは池に満つる位。わが平生の主義として、興來れば遊び、興盡くれば、いつでも引き返すと

いふので、何も、山僧が之を知つて送迎することを要せぬ。路の盡くる處、左右兩邊ともに斷崖屹立し、その脚部は、水中に挿み、そして、崖上には、綠色の藤の蔓が垂れて、山風一たび至れば、倒に拂せられ、そして、下なる水には、漣波を生ずる。山上には、寺があつて、空堂の中で敲く朝の鼓は、潭底に蟄せる龍を起たしむべく、高塔の上に鳴る夜の鈴は、樹上に棲む鶴を驚かせる。抑も人の此世に在るや、もと羣旅の客の如く、心に協へば、暫く留まるも差支なく、何も必ずしも、急いで立ち歸るにも及ばない。邱陵の有様も、今日は、昔と大分異なつて居るが、格別、歎息する必要はない、城郭の中では、他年來て見れば、似ても付かぬ様に成ることであらう。世間の萬事は、蒼茫として、一一問ひ質すことも出來ず、逝くものは、孤鳥が飛び去つて、あとに煙霧を残す様なものである。おもへば、君が、この虎邱に游ばざるは、如何なる故か、そして、詩を作つて、われに寄せられたが、その草書の見事なことは、丁度、むかしの張芝の様である。しかし、眞娘にして靈あらば、必ず君の無性なるを大笑すべく、やがて、酒を把つて勧むれば、どうして、君を招延して詩を題せしめすに置かうか。今しも、秋風は、江浦に吹き起り、その昔、約束した通り、帆を擧げた歸舟を寄せて善い頃になつた。君にして、この地に來られたならば、ともに打連れて、一たび興廢の跡を弔ひ、荒臺古樹の間、亂鳥の啼くのを聞くことであらうが、實境の淒涼は、君に取つて、豫想以上の事であらう。

【餘論】朱氏の寄せた虎邱行の原作は、まだ其地を経過せず、純ら想像を駆せたものと見える。そこで、青邱は、虎邱なら日夕游行する處で、自分こそ詳しく述べるといつて、虎邱の現況を敍し、今丁度善い時であるから、君も夙約を踏んで來游しては如何といつて、これに答へたのである。邱陵莫歎今日異の四句は、人事の定著せざるを道破し、隨分言ひ古されて居るが、なほ且つ讀者の心を根觸する。

鳳臺二逸圖

鳳臺二逸の圖

元集賢院待制馮海粟公自號瀛洲客嘗被斥游金陵鳳凰臺作詩弔李謫仙好事者爲作鳳凰臺游圖近有詩示求題賦此塞之。
【訓讀】元の集賢院待制馮海粟公、自ら瀛洲客と號す。かつて、斥けられて、金陵の鳳凰臺に遊び、詩を作つて李謫仙を弔ふ。好事者、爲に鳳凰臺游圖を作る。近ごろ、詩あり、示して題を求む、これを賦して之を塞ぐ。

謫仙昔作供奉臣。謫仙、むかし供奉の臣となり、
 詩語不合妃子嗔。詩語合はずして、妃子嗔る。

【字解】謫仙 唐書李白の本傳に、賀知章が初めて相見た時、子は謫仙人だといったと書いてある。

鑾坡無地容侍直。
鑾坡、地の侍直を容るるなく、

錦袍來醉金陵春。
錦袍、來り醉ふ金陵の春。

金陵臺高鳳凰去。
金陵、臺高くして鳳凰去る、

西望長安竟何處。
西、長安を望めば、竟に何の處ぞ。

江聲空打石城潮。
江聲、空しく打つ石城の潮、

山色猶橫歷陽樹。
山色、猶ほ横ふ歷陽の樹。

騎鯨一去五百秋。
騎鯨一去、五百秋、

花草滿徑埋春愁。
花草満徑、春愁を埋む。

瀛洲老客綠玉杖。
瀛洲の老客、綠玉杖、

笑領賓客還來游。
笑うて、賓客を領して、還た來り游ぶ。

才氣風流頗同調。
才氣風流、頗る同調、

曾入金門待明詔。
かつて、金門に入つて明詔を待つ。

當年流落不自悲。
當年流落、自ら悲まず、

却問前人欲相弔。
却つて、前人を問うて相弔はむと欲す。

可憐二子遭清時。
憐むべし、二子、清時に遭ひ、

放逐江海空題詩。
江海に放逐せられて、空しく詩を題す。

賴有高名足難朽。
賴に高名の朽ち難きに足るあり、

何用粉墨他年垂。
何ぞ用ひむ、粉墨、他年に垂る。

夕陽欄檻登臨後。
夕陽欄檻、登臨の後、

誰復來游醉杯酒。
誰か復た來り游んで、杯酒を酔せむ。

棲鳥啼滿臺前柳。
棲鳥、啼き滿つ臺前の柳、

名づく」とある。【二】駕籠 杜甫の送孔巢父の詩に南尋禹穴見李白道甫問訊今何如とあるが、一本には、南尋の七字を若逢李自駕鯨魚に作つてある。俗説に、李白は江上に舟遊を試み、水中の月を掬せむとし、誤つて、水に落ちて死んだと稱する處から、駕籠といつたのである。【三】花草満徑埋春愁 李白の鳳凰臺の詩に、吳宮花草埋幽徑」とある。【四】綠玉杖 緑玉の飾りを施した杖、陸游の詩に翠蓑綠玉杖とある。【五】領賓客 領は引き具す。【六】同調 同じ様な調子。【七】金門 金馬門の略、漢宮の門名。東方朔は、自ら世を金馬門に進むと稱した。【八】待明詔 待詔・待詔といふに同じ。元來、待詔とは、詔を待つて勤めて任官する、それまで假りに置くといふので、つまり候補の義である。

中、賀知章、これを言ふ、金鑾殿に召見し、當世の事を論じて、頃一篇を奏す」とある。【六】侍直 近侍を奏す臣。【七】錦袍來醉 李白の本傳に、「かつて、舟に乗じ、崔宗之と采石より金陵に至る、宮錦袍を著けて舟中に坐し、旁に人々が若しくて止む」とある。【八】鑾坡 鑾坡殿を云ふ、李白の本傳に「天寶入翰林供奉と號し、集賢院學士と制誥書勅を分掌す」とあり、李白の本傳に「詔あり、翰林に供奉す」とある。

志に「明皇、初めて翰林待詔を置く、すでにして又、四方の文學を選びて、翰林供奉と號し、集賢院學士と制誥書勅を分掌す」とあり、李白の本傳に「詔あり、翰林に供奉す」とある。【三】詩語不合 詩中の言葉が氣に入らぬ。【四】妃子嘆 嫦娥が怒った。李翰林別集の序に「高力士、脱靴を以て深恥となす、異日、太真重ねて清平調の詞を吟す。力士曰く、飛燕を以て妃子を指す、これを賤むこと甚しと。太真、頗る深く之を然りとす。上、かつて三たび李白に官を命ぜむと欲す、宮中の押ぐところとなりて止む」とある。【五】鑾坡 鑾坡殿を云ふ、李白の本傳に「天寶

【古】二子・李白と馮海粟とを指す。【三】粉墨・壁上の題詩を塗り飾ること。【三】屐痕・屐は足跡。

【題義】鳳臺二逸とは、唐の李白と元の馮海粟との二人を合稱したのである。鳳凰臺は、江寧府志に「府治の西南杏花村中に在り、宋の元嘉の時、鳳凰、この山に集まる、臺を山椒に築いて、以て瑞を表す」とある。その臺は、後世まで残つて居たので、唐の李白は、長安より放逐されし後、この臺に登つて、左の七律を作つた。

鳳凰臺上鳳凰游。鳳去臺空水自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠作古丘。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。

馮海粟の事は、元史陳孚傳に、「攸州の馮子振、經史に博洽、その文を爲るや、酒酣に耳熱するに當り、侍者二三人に命じ、筆を潤して以て俟たしめ、子振、案に據つて疾書し、紙の多少に隨つて、頃刻輒ち盡く。仕へて、承仕郎集賢待制となり、海粟と號す」とある。それから、圖の由來は、この詩序に見えて居て、大略、下の如くである。——元の集賢院待制たりし馮海粟公は、自ら瀛洲客と號して居た。かつて、朝廷から斥けられ、金陵に遊んだ序に、鳳凰臺に登り、詩を作つて李白を弔つた。すると、好事者が、その爲に、鳳凰臺游圖を作つた。近ごろ、公より詩を寄せて示され、圖に題せむことを求められたるに因り、この詩を賦して、聊か責を塞ぐことにした。

【詩意】謫仙と稱せられた李白は、その昔、玄宗に事へて翰林供奉と成つたが、沈香亭で作つた清平

調の詩が氣に入らぬといふので、楊貴妃は腹を立てて、その仕進を妨げた。金鑾殿は廣しと雖も、その近侍宿直を許さず、やがて、都から逐ひ出されたから、錦袍を著けた儘、南游して金陵の春に醉倒した。金陵には、鳳凰臺が高く聳えて居るが、名にしおふ鳳凰は、すでに去り、その跡、漸く荒廢し、臺頂に登つて、西、長安を望めども、何處とも分からず、大江の潮聲は、石頭城を打つて鳴り響き、對岸には、歷陽の樹色蒼茫、山色遠く連亘して見える。その李白は、鯨に騎し、一たび、この世を去つて天上に向ひし後、五百年を経、臺下の花草は、徑に滿ちて、春愁を埋めるばかりである。ここに、瀛洲老客と號する馮海粟公は、綠玉の杖を引き、賓客を引き具して、笑ひながら、ここに來游されたが、その才氣風流、兩つながら、李白と同調で、現に、これまで、金馬門に入つて待詔となつて居られたのである。馮公は、おのが流落などは少しも悲まず、却つて、古人の遺跡を尋ねて、なつて居られたのである。李白は、おのが流落などは少しも悲まず、却つて、古人の遺跡を尋ねて、にも及ばない。馮公が此に登臨し、入日うつらふ欄干に倚つて吟嘯せられし後、何人が復た此に来て、唯だ高名の容易に朽ち難きは、なほ以て幸とすべく、後世に傳へる爲に、その題詩を粉墨で塗澤する一杯酒を供へて、その當時をしのぶであらうか。末俗の世に、かういふ畸人は到底又と出て來さうもない。かくて、馮公の屐痕は、寂寞として、苔苔の上に残り、臺前の柳には、塘を求める鳥が啼き続

つて居ることであらう。

【餘論】 初の二解は純ら李白、次の二解は馮海粟の事を敍し、可憐の四句は、二人を合せて、その運命の屯塞を憐み、兼ねて題詩の不朽なるべきを云ひ、結一解は、馮公の後、更に其人なく、臺邊の風光愈よ寂寞たるべきを述べ、餘情盡きず、讀者をして、自ら感愴に堪へざらしめる。

送張員外從軍粵上

張員外の粵上に從軍するを送る

鶴雞啼霜海城白。鶴雞、霜に啼いて、海城白く。
誰掃行車出南陌。誰か、行車を掃うて、南陌を出づ。
刀頭裝得願酬恩。刀頭裝ひ得て、恩に酬いむことを願ふ。
知是狂游廣州客。知る是れ、狂游廣州の客。
擊筑悲歌斗酒前。擊筑悲歌、斗酒の前、
又從飛將去臨邊。また飛將に從つて、去つて邊に臨む。
幕中草檄風生筆。幕中、檄を草して、風、筆に生じ、
馬上吟詩月在轎。馬上、詩を吟すれば、月、轎に在り。

【字解】

【一】 鶴雞 倍にたうまるといふ、雞の種類で、形が一番大きい、楚辭の九辯に鶴雞明晰而悲鳴とある。【二】 海城 海邊の孤城。
【三】 行車 旅行の車。【四】 南陌 陌は大路。【五】 斗酒 一斗の酒、但し支那の一斗は日本の一升位。
【六】 飛將 何奴が李廣を稱して漢の飛將軍といつた。【七】 轎 古文に「馬の駕具」とある。した駕、鞍下の轎。【八】 南北長江竟誰限。魏志に「文帝、南征して江に臨み、波

秋聲萬里隨征雁。

秋聲萬里、征雁に隨ひ、

南北長江竟誰限。

南北長江、竟に誰か限る。

明朝若上越王臺。

明朝、若し越王臺に上らば、

應有中原陸沈嘆。

應に有るべし、中原陸沈の嘆。

【通義】 張員外の名字閱歷は不詳、粵上は、古しへの越國、即ち今の福州附近と思はれる。この詩は、張員外が從軍して其地に赴くを送つたのである。

【詩意】 鶴雞が晨の霜に叫べば、寒氣甚しく、海城一帯ほの白く見える。この時、君は、旅行用の車を掃除して、南方の大路より出で、愈よ越地に赴かれる。君は、新に佩刀の先端を裝飾し、その刀で、賊虜を斬り、以て君國の恩に酬いむことを期して居られるので、流石に、むかし狂游以て命となせる廣州の客たるに負かず、その意氣込みは、素晴らしいものである。君は、平生斗酒なほ辭せず、醉ふと、筑を擊つて悲歌慷慨して居たが、此度は、飛將軍に比すべき大將に從ひ、去つて、邊境に臨まれることのことで、その得意、まことに想ふべしである。かくて、幕中に在つて檄を草すれば、筆端に風を生すべく、馬上に在つて詩を吟すれば、月は下轎を照らし、朝夕心ゆくばかりの事が出來、隨分愉

快なことであらう。今しも、秋聲、万里を度つて、征雁に隨ひ、長江は天塹、天が自然南北を限つて居て、四海統一は、何時の事とも分からぬ。明朝もし越王臺に上つて願望したならば、誰か中原をして陸沈せしむといつて、騷亂の世、時事愈よ非なるを歎息せられるであらう。

【餘論】この詩は、篇幅長からざる丈に、よく纏つて居る。幕中草檄の一聯は、全篇の精彩であるし、結二句は、感愴盡きず、掉尾力あるを覺えしめる。

題陳節婦 有序

陳節婦に題す、序あり

節婦姓孫郡人陳已久之妻也。已久客死。節婦守志。其孫彥遜求題賦此。

【訓讀】節婦姓孫郡人陳已久之妻なり。已久客死し、節婦志を守る。その孫彦遜、題を求む。これを賦す。

嬌兒笑語羅幃暮。

嬌兒、笑語して羅幃は暮れ、

銀燭搖光夜香度。

銀燭光を搖かして、夜香度る。

狂風忽起海東頭。

狂風、忽ち起る海東頭、

吹斷蘭舟去時路。

吹き断つ、蘭舟去時の路。

去時豈惜千金軀。

去時、豈に惜まむや、千金の軀、

煙濤竟沒珊瑚樹。

煙濤、竟に没す珊瑚の樹。

精衛冤深水更深。

精衛、冤深くして、水、更に深し、

身小天高向誰訴。

身は小に天は高く、誰に向つてか訴へむ。

寂寞塵奩掩鏡光。

寂寞として、塵奩、鏡光を掩ひ、

可憐不復照晨妝。

憐むべし、復た晨妝を照らさず。

階前莫剪青青草。

階前、剪る莫れ青青の草、

生死終身不下堂。

生死、終身、堂を下らす。

堂中素幔空時祭。

堂中の素幔、空しく時祭、

賴有孤兒拜虛位。

賴に孤兒の虚位を拜するあり。

白日哀思眼不乾。

白日哀思、眼、乾かず、

夜枕還流夢中淚。

夜枕、還た流す夢中の涙。

【字解】〔一〕嬌兒 愛らしき幼兒。〔二〕蘭舟 木蘭の材で造った舟、張籍の詩に蘭舟桂櫓常渡江とある。〔三〕珊瑚樹 白居易の洞底松

行に君不見沈沈水底生珊瑚」とある。〔四〕精衛 山海經に「發鳩の山に鳥あり、その狀、鳥の如く、文首白喙赤足、名を精衛といふ。その鳴くこと、自ら銳たり。これ炎帝の少女、名を女娃といふ。東海に遊び、溺れて返らず、故に精衛となり、常に西山の木石を衔み、以て東海を埋む」とある。〔五〕塵奩 塵にまみれた鏡箱。〔六〕素幔 白い幔幕。〔七〕時祭 時折りの祭儀。〔八〕虛位 木主、即ち位牌。〔九〕一絃音 李商隱の錦瑟の詩に「一弦一柱思華年」とある。〔一〇〕鳳凰曲 雄雌の子飛するを歌うた曲。〔一一〕別鶴離聲 古今注に「高陵の牧子、妻を娶り、五年にして子なし、父母改めて娶らむと歎す、乃ち琴を撥つて別鶴操を爲す」とあり、西京雜記に「慶安世、

妾本孤桐斷作琴。妾は本と孤桐、断つて琴と作す。

一絃只作一絃音。一絃、只だ一絃の音を作す。

逢人不奏鳳凰曲。人に逢ふも奏せず鳳凰の曲

別鶴離鸞夜夜心。別鶴離鸞、夜夜の心。

年十五、成帝の侍郎たり、善く琴を鼓し、能く雙鳳離鸞の曲を爲す」とある。

【題義】陳節婦は、陳家の節婦、その事は、簡略ながら、序に見えて、大體、下の如くである。——

節婦、本姓は孫氏、吳郡の人、陳已久的妻である。已久は客死して歸らなかつたが、節婦は、志を守つて、家事を經營した。その孫の彥遜といふものが、題詩を求めたから、この詩を賦した。
【詩意】愛らしき幼兒が笑語しつつある間に、羅幃の間いつしか暮れ、やがて銀燭を點すれば、その光の搖ぐ中に、物とはなしに、夜の匂ひが吹き度つて居る。家室の樂かくの如く、この儘に過ごせば、まことに幸福の至であるが、思ひきや、狂風忽ち海東に吹き起り、わが夫の蘭舟を乗り出した其時の路を吹き断つて、再び返ることが出来なく成らうとは。わが夫が千金の貴き身を惜まずして出かけたのは、まことに無謀であつて、その死は、萬重の煙濤を珊瑚を海底に没し去つた様なものである。われは、精衛と同じ恨を抱き、西山の木石を衝んで、東海を填めむとあせつても、東海の水は、わが恨の深きよりも深く、到底、填め盡すことは出来ず、身は小に、天は高く、誰に向つて訴へやう

か。鏡の箱は、塵に塗れて、明鏡の光を掩ひ、再び朝化妝を照らし見ることなきいちらしさ。階前には、草が青青と伸びても、決して剪るに及ばぬ、なせかといへば、この身は生くるも、死ぬるも、終身堂を下らないからである。堂中には、白い幔幕が垂れて、そこで、伏臘の祭をするが、夫の魂魄、返り來らず、まことに、便りないことではある。ただ幸にも孤兒が位牌を拜し、れづきとした相續じんじん返り來らす、まことに、便りないことではある。節婦は、哀思長しへに盡きず、晝は泣き通しで、人があるから、いささか心を慰めることが出来る。節婦は、哀思長しへに盡きず、晝は泣き通しで、兩眼ともに乾かず、夜は、眠つても、夢中に涙を流して、枕の浮くを疑ふばかり。妾の一身、たゞへば、孤桐を断つて造つた琴の如く、一絃ごとに、只だ一絃の音をなし、決して他と相和することは出来ない。されば、人に逢うたとても、鳳凰子飛の曲を奏するに堪へず、夜な夜な、わびしき思に堪への別鶴離鸞の哀調を彈するのみである。

【餘論】節婦といへば、まことに結構であるが、その事實は、普通世間に有りふれた儘で、格別目ざましく珍らしいこともないから、著筆が頗る六つかしい。そこで、主として、節婦その人の心中に立ち入り、これに代つて言を述べるといふ様な仕組にしたのである。この篇は、文字も洗練してあつて、一應無難に出來て居るが、いささか、わざとらしい處があつて、割合に人を感動させぬのは、まことに遺憾である。

晚步西郊見鶴鵝羣飛

晩に西郊を歩し、鶴鵝の羣飛するを見る。

平煙漠漠天蒼蒼。

平煙漠漠として天蒼蒼、

牛羊不牧野草黃。

牛羊牧せず野草黃なり。

鶴鵝東來高作行。

鶴鵝東より來つて、高く行を作し、

晴空忽墮數點霜。

晴空、忽ち墮つ數點の霜。

紫塞碧海遙相望。

紫塞碧海、遙に相望む。

下視鳧鴨愁陂塘。

下に見る鳧鴨の陂塘を愁ふるを。

書生見此心欲狂。

書生これを見て心狂せむと欲す、

便思呼鵠上馬馳。

便ち鵠を呼び、馬に上つて馳せむこと

鶴鵝之裘自倒披。

鶴鵝の裘、自ら倒披、

箭聲脫弦鳴餓鴟。

箭聲、弦を脱して、餓鴟を鳴らす。

遠翮正落雙參差。

遠翮正に落ち、雙びて參差、

仰空拍手誇絕奇。

空を仰ぎ、手を拍つて絶奇を誇る。

豪氣服殺并州兒。豪氣、服殺す并州兒、

也勝閉門坐詠詩。また勝る、門を閉ち坐して詩を詠するに。

人民は、游侠捷足を以て風として居る。

【通義】鶴鵝の鶴は、文選上林賦の注に「野鵝なり」とある。この詩は、日暮、蘇州城外の西郊を散

歩し、白鵝の羣を爲して飛べるを見て作ったのである。

【詩意】平かに地上に鋪ける夕煙は、漠漠として際涯なく、そして天は蒼蒼として見え、牛羊を牧養

せぬ爲に、野草は一面に茂り、折から黄ばんで居る。この時しも、鶴鵝の一羣、東より飛び來り、高

き處を度つて行列をなし、晴れた寒空から數點の霜が落ち来らむばかりに見えた。北は長城より、

南は大海に至るまで、遙に相望んで、寥廓無邊の間を自由に翱翔して居る處から、鶴鵝は、彼の巣の類

が隣の狭い處に窮屈さうに居るのを、傲然として眺め下して居る。われ偶ま之を見て、心將に狂せ

むとした。そこで、鷹を呼んで臂に据ゑ、そして、馬に乗つて馳せ出したいと思つた。すると、身に著

けた居る鶴鵝裘は、裏がへしなつて翻り、やがて、弓に箭を番へて放つと、弦を脱する箭の聲は、

餓ゑた鳶の叫ぶ様に聞こえ、あやまたず、遠空を飛んで居たのに命中すると、二羽の白鵝は、前後し

て地上に落ちて来る。その時、空を仰ぎつつ、手を拍つて、絶奇の豪興に誇るであらう。かくすれば、

堂堂たる豪氣は、音に聞く并州の俠兒輩をして敬服せしむるに足るべく、門を閉ぢて、詩を作つてゐ

【字解】
一、鶴鵝 詞義の條を
見よ。
二、紫塞 古今注に「秦、長城を築く、土色紫、漢塞亦然り。
三、愁陂塘 陂塘、二字ともに隣、隣の間の狭い處に居る。
四、呼鵠 鶴はくまだか、ここでは羣と同義に用ひて居る。
五、鶴闌 之裘 鶴鵝は鳥の名、その鳥の羽を織り合せて造つた裘で、餘程貴いものと見える。西京雜記に「司馬相如、はじめ、卓文君と成都に還り、貧にて愁憊し、著くるところの鶴闌裘を以て、市人陽昌に就いて酒を貰ふ」とある。
六、鳴餓鴟 鳴は鳴、矢の鳴り響く音ないふ。南史曹景宗傳に「弓は霹靂の鳴を作し、箭は鳴鳥の叫ぶが如し」とある。
七、遠翮 〔おも〕を思ふ。

るよりも、はるかにましである。

【餘論】全篇十四句、前半七句は、鶯鶯の羣飛するを寫し、後半七句は、これを射て豪興を縱にしたいといふ希望を述べ、もし、うまく射中てたならば、かうであらうといつて、すべて想像より之を出したのである。

次韻楊孟載早春見寄

楊孟載の早春寄せらるるに次韻す

雪後西園韭初剪。 雪後、西園、韭初めて剪る、
流澌晚動春塘淺。 流澌、晩に動いて春塘淺し。
閉門有客抱深愁。 開門を閉づる、客あり、深愁を抱き、
久不題詩硯生蘚。 久しう詩を題せず、硯に蘚を生す。
風塵健兒誇得意。 風塵健兒、得意を誇る、
獨坐寂寥誰所遣。 獨り寂寥に坐し、誰か遣しむるところ。
應緣少學與時違。 應に縁るべし、少學時と違ふに、
不習弓刀誦墳典。 弓刀を習はずして墳典を誦す。

【字解】

【一】流澌
流れる氷、
後漢書王霸傳に「光武、滹沱河に至る。候吏、還つて白す、河水流澌、船なし、濟るべからず」とあり、風俗通に「水流るるを澌といひ、冰解くるを泮といふ」とある。【二】少學
少時の學問。【三】墳典
左傳に楚の左史倚相が三墳五典を讀んだとする。三墳は三皇、五典は五帝の書。上古の書籍といふ義。【四】杯鬪
酒食・酒肉に同じ、晉書陸納傳に「納、吳興の太守となり、先づ姑孰に至りて、趙溫に辭し、問うて曰く、公、醉を致す、蕪酒を飲み、肉多少を食ふべき。温曰く、年來、三斗を飲めば便ち酔ふ、白肉は十骨に過ぎず」とある。【五】琴堂
琴堂、朝夕、清歡を共にする、
好事猶能具杯鬪。 好事、猶ほ能く杯鬪を具ふ。

琴堂朝夕共清歡。 琴堂、朝夕、清歡を共にする、
舉白頻浮不容免。 白を擧げて頻りに浮べ、免るるを容さず。
鈴鶯已游賓客醉。 鈴鶯、すでに游んで、賓客は醉ふ、
深夜垣扉罷局鍵。 深夜、垣扉、局鍵を罷む。
一燈留照對牀談。 一燈、留めて照らす對牀の談、
沸鼎松聲烹綠薌。 鼎に沸くの松聲、綠薌を烹る。
五更上馬子先去。 五更、馬に上り、子先づ去る、
擁被獨眠窓日暝。 被を擁して獨り眠り、窓日暝たり。
起聞啼鳥忽興發。 起つて啼鳥を聞いて忽ち興發す、
欲往江邊雲隔巘。 江邊に往かむと欲すれば、雲、巘を隔つ。
人家舊燕盡巢林。 人家の舊燕、盡く林に巣ひ、

草滿長洲絕游輦。

草は長洲に満ちて、游輦を絶つ。

春耕咫尺阻歸計。

春耕、咫尺、歸計を阻て、

野水自流閒滄吠。

野水自ら流れて滄吠閒たり。

吾鄉繁華天下稀。

吾が郷の繁華、天下に稀に、

花柳村村隨步轉。

花柳村村、歩に隨つて轉す。

久聞離亂今始見。

久しく離亂を聞いて、今はじめて見る、

煙火高低變烽燹。

煙火高低、烽燹に變す。

登臨吹笛散羣羌。

登臨笛を吹けば羣羌を散じ、

此事空嗟千古鮮。

この事、空しく嗟す、千古に鮮きを。

朝來風雨況淒黯。

朝來風雨、況んや淒黯なるをや。

雨溼城頭旗不展。

雨は城頭を溼して旗展びず。

鄰里衝泥備役夫。

鄰里、泥を衝いて役夫を備へ、

縣官不肯憐疲喘。

縣官、肯て疲喘を憐ります。

安居且復俟時寧。

安居、且つ復た時の寧きを俟つ、

出豈無能非退卷。

出づるに豈に無能、退いて卷くに非す。

范莊紅杏幾株在。

范莊の紅杏、幾株か在る、

好待開時同折撫。

好し、開く時を待つて、同じく折撫。

對花憂患不須言。

花に對して、憂患言ふを須ひず、「せむ」。

剩喚一杯供脚軟。

剩して一杯を喚んで脚の軟かなるに供す。

【一】 滯狀。滯は田間の用水、畎はうね。【二】 烽燹。玉篇に「燹は野火なり」とある。【三】 吹笛散羣羌。羌は西夷の名、洛陽

伽藍記に「河間王琛、婢朝雲あり、善く篪を吹く。琛、秦州刺史となる。諸羌、外に叛き、屢々討てども降らず、琛、朝雲をして假りに
竇處たらしめ、篪を吹いて泣く。諸羌、これを聞いて流涕し、相率て歸降す。秦民語つて曰く、快馬の健兒は、老嫗の篪を吹くに如
かず」とあつて、青邱は、この故事を暗用したものと思はれる。【五】 備役夫。夫役に應じて仕事をする。【六】 疲喘。疲れて呼
吸の過ること。【七】 退卷。論語に「君子なるかな蘧伯玉、邦に道あれば仕へ、邦に道なれば、卷いて之を篋にすべし」とある。
【八】 范莊。范氏の義莊。樓鑰の記略に「吳門の范氏、杜國麗水府君より靈芝坊に居る、今は雍熙寺の後に在り。五世の孫文正公、
少にして此地に長す。皇祐中、杭に守たり、再び姑蘇に至つて宗族を訪求し、田千頃を買ひ、義莊を作り、以て之を贈はす。宅に二
松あり、堂に名づくるに歲寒を以てし、間を松風といふ。因つて、その居を廣めて以て義莊となし、族を其中に聚む。義莊の後、亦
在り」と見え、金壇の按に「姑蘇雜詠、范文正公祠の原注、義莊は天平山下に在り」としてある。【九】 脚軟。唐書楊國忠傳に
「郭子儀、同州より回る、帝、大臣に詔し、宅に就いて軟脚局を置き、人ごとに津れ三百錢、出でて賜ふあるを錢路といひ、入つて

勢するあるを秋脚といふとあつて、來着の歓迎である。なほ、東坡の詩に、還須更置秋脚酒、爲君擊鼓行、金樽とある。

【題義】楊孟載は即ち楊基、青邱の詩友。この詩は、楊基が早春に詩を寄せて來たから、その韻に次して之に答へたのである。

【詩意】雪後、氣候は稍や暖かに成つて、西園の韭も初めて摘める様になり、流れる氷は、晩に動き出して、川を下つて行くが、春塘の水は、まだ淺い。この時しも、われは、門を閉ぢて深き愁を抱き、疎懶の極、久しく詩も作らぬ處から、硯には微が生える位。刻下戰亂の世、健兒輩は、風塵の間に馳驅し、いかどの功名を立て、各々その得意を誇つて居るのに、われのみ獨り寂寥に坐して、何も爲さず、つくねんとして居るのは、一體誰がさうさせたのであるか。それは、少壯の時の學問が、時勢と大分異なつて居たからであつて、われは、弓刀を稽古せずして、三墳五典などいふ古書を専ら誦習した。そこで、世に容れられずして、獨り閑居するといふ始末。しかし、城中は物價高くして、住まふことが出来ず、市門は、町はづれで、聊か静かなる處であるから、居を其邊にトして、引ッ込んで居るが、それでも、好事者の時時酒肉を用意して、訪ぶものがあるので、君の如きは、即ち其一人である。そこで、琴堂の上に於て、君と對坐し、朝より夕に亘つて、清歡を共にし、頻りに酒を呷るが、君は、まことに勵め上手で、決して赦さない。やがて、君の御伴であつた騎馬の番卒どもは、どこぞへ遊びに出かけ、座上の賓客は醉ひつぶれて、大抵歸つて仕舞つたが、夜ふくるも、垣や扉を開して

錠を卸さぬ呑氣さ。一燈の下に、君と牀を對して、更に清談をして居ると、茶が煮えて来て、さながら、松風の鳴る様な音がした。五更の頃、君は馬に上つて歸り去り、予は、其儘夜具を擁して、ひとり眠つたが、うとうとして居る内に、窓前の朝日は、ぱんやりとして見えて來た。そこで、愈よ起きて、のどがなる鳥の鳴く音を聞くと、游興忽ち勃發したが、ここから江邊へは、なかなか遠く、山は雲に隔てられて見える位。城中は、曩に戦亂を経たこととて、むかし馴染の燕は、折角再び来て、游人の車は全く杜絶して居る。予も、城外の田園に往つて、躬耕を爲せば善いのであるが、咫尺の處でも、歸住の計畫が思ふ様に運ばず、野水は淙淙として、滄畎の間を流れて居るが、まだ田を耕す様にもならぬ。元來吾が郷たる蘇州の繁華は、天下稀に見る處で、城外の村村は、花柳を雜植し、好景歩に隨つて轉する位。むかし離亂の慘澹たる話は、久しい前から聞いて居たが、その實際は、今日はじめて之を目にし、城中に賑かなりし人煙は、その高低に従つて、烽となり、野火となり、到る處、すべて焼き拂はれて仕舞つた。古しへ、高い處に上つて、夜、笛を吹きすさび、その聲の悲愴なりし爲に、羣光を散じて歸降せしめたといふ話があるが、かういふ事は、千古に其例少く、なかなか眞似の出来る事でもない。殊に今日は、朝から風雨で、天色淒黯、城頭に押し立てた旗も、雨に濡れて展び廣がらずに居る。鄰里の老少は、夫役を命ぜられ、泥のぬかるみを衝いて、相

變らず出かけたが、縣官は、まことに冷酷で、その疲勞を憐まぬから、散々こき使はれて、まことに氣の毒である。われは、ここに安居して、しばらく時の安寧になるのを待つ外なく、苟くも、一たび世に出た上は、決して無能に非す、又退いて其才略を卷いて隠す譯でもないが、何分、時の廻り合せで、今更仕方がない。范氏の義莊の前には、赤い杏花が幾株もあつて、優に游賞を値するから、花さく時を待ち、君と一處に出かけて、折り取つて來やう。しかし、花に對して、平生の憂患を搔き口説くは、野暮の骨頂で、それよりも、一杯の酒を呼んで、足の疲を勞はる方が、はるかに氣が利いて居る。

【餘論】起首より好事僧能具「杯鬪」に至る十句は、城中の閒居を狀し、琴堂朝夕共「清歡」より擁被獨眠窓日覗に至る八句は、「楊基」の來訪を受けて、愉快に遊び暮らしたといふ逸興過飛の趣を敍し、起首に啼鳥忽興發より此事空嗟千古鮮に至る十一句は、田園に歸臥するに由なく、且つ劫後城中の極めて慘澹たるを描き出し、朝來風雨況淒黯より結末に至る十句は、眼前見るところを寫し、且つ他日更に聯游を試みやうといつて佳約を締したのである。段落の分明なるは、極めて宜しいが、通篇稍や平板に失し、敷張に過ぐる嫌があり、從つて格力の未だ高からざるは、作者に於て、勤もすれば見るところの弊處である。

詠雪禁體、次徐幼文韻

雪を詠す、禁體、徐幼文の韻に次す

邊城雪埋深沒簾。
邊城雪埋めて、深さ簾を没す。

風旋餘花吹酒盤。
風は餘花を旋らして酒盤を吹く。

幾人遮虜渡氷河。
幾人、虜を遮つて氷河を渡る、

直指彎弓不能滿。
直指、弓を彎かむとして満つる能はず。

我方高枕聽蕭瑟。
われ方に枕を高うして蕭瑟を聽く、

却喜今年瘴全浣。
却つて喜ぶ、今年瘴全く浣ふを。

寒添柳院覺春遲。
寒は柳院に添へて春の遲きに驚く。

明透竹窓驚夜短。
明は竹窓に透つて夜の短きに驚く。

未成豪飲固翠袖。
未だ豪飲を成して翠袖を圍ます、

且辨清吟呵象管。
且つ清吟を辨じて象管を呵す。

鋪庭擁路掃難開。
庭に鋪き、路を擁して掃へども開き難く、

三日不消知待伴。
三日消えず伴を待つを知る。

翻疑塞北雲正冷。
翻つて疑ふ、塞北、雲、方に冷かなるを、

【字解】〔一〕邊城、國境に在る
要塞。〔二〕漫辭、張衡の南都賦に
其竹則篠詩抜篠とあつて、注に「篠は
小竹なり」とある。小竹、しのの類。
〔三〕風旋、旋は吹きめぐらす。〔四〕
酒盤、杯をいふ。〔五〕遮虜、蘇頌
の薛納等に命ぜし詔令に「蠻姚、漢に
仕へて遮虜の勳あり」と見ゆ、胡人の
南下を防ぎ留める。〔六〕直指、
寒氣の爲に指が凍つて曲らぬこと。
〔七〕蕭瑟、雪の降り注ぐ聲。〔八〕
瘴、春熱の氣。〔九〕柳院、柳が繞
つて居る一構。〔一〇〕圍翠袖、事
文類聚に「党家の姫曰く、彼、粗人、
安んぞ此を得む、但だ能く銷金帳底、
漫斟低唱、羊羔の美酒を飲むのみと
あるを暗用したものらしく、その全文は、前に卷四、映雪圖の詩中に引い
て置いた。なほ黃庭堅の句に、醉園

可信江南地先暖。愁封小窟僵蟄蟲。
驚折危柯殞巢卵。林中樵絕暮無煙。

野外獵來晨有曠。趙女依稀舞態斜。
郢人寂寞歌聲斷。此時自歎少清歡。

月下閒門誰解款。山居老客雖苦病。
郢人寂寞として歌聲断ゆ。この時、自ら歎す清歡少きを、

放曠猶能類中散。山居の老客、病に苦むと雖も、
長鬚踏凍送詩筒。放曠猶は能く中散に類す。

白戰令嚴鳥敢緩。長鬚、凍を踏んで詩筒を送り、
白戰令嚴にして、鳥んぞ敢て緩うせむや。

紅袖寫烏絲」とあって、その文字を用ひたのであらう。【二】辨清吟管象牙で軸を作つた筆を振り題はす、王右軍の筆經に「昔人、瑞明、象牙を用ひて管となす」とあり、李翰林外集の序に「李白、便殿に召對して詔語を撰す、時に十月、大寒、筆凍る。帝、宮嬪十人に勅し、白の左右に待し、各、牙筆を執つて之を呵せしむ」とある。【三】待伴西清詩話に「王君玉曰く、雪、未だ消えざるもの、俗に待伴といふ、詩に曰く、待伴不_レ禁鶯瓦冷、蓋_レ明常法玉鈎斜」とある。【四】危柯雪に壓されて危げなる枝幹。【五】樵絶樵は伐木。【六】有端詩經に町端鹿場とあつて、その傳に「町端は鹿跡たり」とある。【七】趙

開簾尙恨不同賞。醉看帽敲仍褐袒。

祇期明日有晴暾。遠訪梅花須勿憇。

簾を開いて、尙ほ恨む同じく賞せざるを、醉うて見る、帽の敲つと褐袒するとを、

祇だ期す明日晴暾あるを、「かるべし。遠く梅花を訪うて、須らく憇きことな

【題義】徐幼文は即ち徐貢、禁體に就いては、陳傅良の詩に我嘗欲擬禁字體、無奈雪月冰瓊瑰とあ

り、東坡の聚星堂雪詩の序に「歐陽文忠公、守と作りし時、雪中、客と約して詩を賦し、體物の語を放噴、開放にして駿逸なること。【三】類中散 晉書荀康傳に「康、遠遁不羣、魏の宗室と婚す、中散大夫に拜せられしが就かず、常に琴を彈じ、詩を詠じ、以て自ら足りりとす」とある。【三】長鬚 家儀の義に用ふ、韓愈の詩に、一奴長鬚不_レ裹頭とある。【四】踏凍 跡詩筒 唐語林に「白居易、杭州刺史たり、時に吳興守錢徵、吳郡守李愬、悉く平生の舊交、日に詩を以て相寄贈す。後、元稹、會稽を領し、その酬唱に參し、多く竹筒を以て詩を盛つて往来す」とある。【五】帽敲仍褐袒 仍は與と同じに見るべく、就いて詩を應酬すること、東坡の詩に當時號令君記取、白戰不_レ許_レ持_ニ鐵_一とある。【六】帽敲仍褐袒 仍は與と同じに見るべく、帽子の傾けると襷拌を肌ぬぎにすると、ともに、だらしない醉態の形容。【七】晴暾 晴は朝日。

ひたのである。

【詩意】邊境の城塞は、雪に埋もれ、その深さは、小箇を没する位、風は花と見まがふ雪片を吹き繞らして、盃の中に落す。その時、城中では、幾人の者が、氷河を渡つて、胡人の南下を防ぎ留めるか、その人は、指の先が凍つて曲がらず、それで弓を挽かうとしても、なかなか十分に引きしばることが出来ず、邊城戍卒の苦は、この時が一番劇しいのである。しかし、予は、今しも、枕を高くして、雪のざわざわと降り注ぐ聲を聞き、今年殊に甚しかりし毒熱の氣の全く洗ひ去られたことを喜んで居る。柳の種ゑてある一構には、寒氣愈よ加はり、打見る限り、うらさびしくして、春の回ること遅く、竹の翳せる窓には、明りが透つて、夜の短くて明け易きに驚くばかり。もとより、翠袖の佳人どもに圍まれ、美酒佳肴を備へて豪飲する様なことは出来ないが、逸早く、詩を作つたから、象牙の筆管を振り立てて、これを疾書した。雪は、大分積つて、庭に鋪き、路を塞ぎ、なかなか掃いた位では開かず、おまけに、三日も消えずして、後から降り来るのを待つて居る様である。仰ぎ見れば、形雲なほ立ちこめて、丁度、塞北の様に寒冷であるが、流石、江南だけに、地上は、どうやら第一に暖かい感じがする。雪が餘り多いと、小さい穴を塞いで仕舞つて、その中に籠つて居る蟲の死ぬのが氣の毒であるし、危げな枝幹を折つて、巢の中に産んだ鳥の卵を碎いたのに驚いた。林中の伐木も當分休みで、従つて、夕になつても、その邊から立ち上る煙も見えず、野外では、獵を催さむとし、曉早く鹿の

足跡を見つけたといふので、大騒ぎである。富貴の家では、それらしく思はれる趙女の舞の手ぶりは、廻雪の如しとさへ稱せられ、郢人の唱へた名にしおふ白雪の曲は断えて、今様の無下に賤しげなるが、にぎやかに歌はれて居る。予は、この時、獨り兀坐して、清歡少きを喟ち、月下的閉門を誰も来て敵かうとしない。身は、宛然たる山ごもりの老人も同様に、病に苦んで居るが、閒放曠逸の本性は、古しへの嵇康に類して居る。そこへ、君は長鬚の家僕を遣し、凍れる路を踏んで、わざわざ詩筒を寄せられ、例の白戰とやら、雪の詩で唱和を致さうといひ、命令は嚴重で、一刻も猶豫されぬ處から、取り敢へず、この詩をひねり出した始末。唯だ君と共に會飲し、簾を開いて、同じく雪景を賞し、そして、醉つた揚句に、帽を傾け、襦袢を肌ぬぎにする狂態を見るに及ばぬのは、いかにも殘念である。ただ期するところは、明日は定めて天氣も晴れるだらうから、一處に梅花を尋ねべく、その時は、決して、平生の如く疎懶でなく、一番奮發して、是非お出かけを願ひたい。

【餘論】前首と同一の風格で、決して作者を重からしめるものではない。篇中、寒添ニ柳院の十四字は、巧警新婉、七律に入れても、翩翩として朗誦を値することと思ふ。

思夫山

江上曾看望夫石。江上かつて看る望夫石、

思夫山

湖中望見憶夫山。

湖中、望み見る憶夫山。

夫君好采山中藥。

夫君、好し采る山中の薬。

獨得長生竟不還。

ひとり長生を得て、竟に還らず。

不似蕭郎與秦女。

似ず蕭郎と秦女と、

乘鸞同去彩雲間。

鸞に乗じて同じく去る彩雲の間。

【題義】原注に「山は太湖の中に在り、舊說、秦に逸人あり、ここに居り、藥を探つて回らす、妻、

これを念うて死す。後人、これを哀み、以て名づく」とある。

【詩意】武昌の江上には、望夫石といふのがあるが、ここ太湖の中には、思夫山があつて、かなり遠くから見える。夫は、山中に藥を采り、ひとり、長生を得たものと見えて、とうとう歸つて來ぬ爲に、妻たりし人は、これを懸うて、遂に焦れ死にをして仕舞つた。同じく、秦の人であるが、かの蕭史弄玉の夫婦が鸞に跨り、彩雲の間に向つて仙去したのとは、似ても付かず、妻は、定めて、夫の無情を怨んで居たであらう。

【餘論】蕭郎秦女は、同じく秦人であるから、陪襯として、最も適切といふべく、流石に作者の慧敏を推すべきども、その他は、全然取るに足らぬものと思はれる。

送陶生兼寄周記室 陶生を送り、兼ねて周記室に寄す

馬頭交語臨長陌。馬頭、語を交へて長陌に臨み、
 我手持杯君揖策。われは手に杯を持し、君は策を揖す。
 官槐風起咽秋蟬。官槐、風起つて秋蟬咽び、
 日暮偏傷遠行客。日暮、偏に遠行の客を傷ましむ。
 故鄉故人離別多。故郷故人、離別多し、
 過江相見問如何。江を過ぎて相見て、問ふ如何。
 軍中莫笑書生怯。軍中笑ふなけれ、書生の怯、
 還有能當曳落河。還た能く曳落河に當るあり。

きなり」とある。

【題義】陶生は、名字閱歷、ともに不明。周記室は、前に卷九に獨游山中、憶周記室と題せる七古

七言古詩 送陶生兼寄周記室

五九

涇陵節建行の詩中にも引いて置いた
 が、歐明餘に「武昌北山の上、望夫石
 あり、狀、人の立つが若し。相傳ふ、
 むかし、真婦あり、その夫、役に從
 ひ、この山に餞送。立つて、夫を
 留み、化して石となる、因つて名づ
 く」とある。【三】憶夫山 郡ち思
 夫山、その由來は、題義の條に述べ
 て置く。

【三】蕭郎與秦女 蕭郎は即ち蕭史。秦女は秦の穆公の女、名は弄玉。二人、夫婦となり、やがて、鳳凰に乗じて仙去した

といふので、その事は、數ば前に見えて居た。

があつて、その名を砾といふことだけは分かつて居る。この詩は、陶生が江南の幕中に往くを送り、そして、兼ねてより其處に居る記室の周砾に併せて寄せたのである。

【詩意】君が今次の行を送る爲に、長い大路に臨み、馬前に於て立ち話をなし、我は手に杯を持して君に勧め、君は手にせる鞭を打振りつつ、挨拶をなし、やがて、愈よ出發して仕舞つた。頃しも秋、竝木の槐には蟬の聲咽び、日暮には、殊に遠行の人の心を傷ましめる。故郷に於ては、故人と別離を爲すことが多いが、君が江を渡つて、周記室に逢つたならば、近況は如何と問うて呉れ。書生は、口でこそ偉いことを言ふが、元來臆病で、軍中に居ることが相應しくない位。ただ周記室は之と異にして、優に健兒輩に當るに足るべく、まことに、一かどの人物であるから、その積りで、君も今後交際するが善からう。

【餘論】篇幅短くして、その瑕疵も、あまり目に立たぬが、もとより佳作ではない。曳落河を擔ぎ出しだ處は、一寸面白い様であるが、これとて、こけ脅しに過ぎぬものである。

倒掛

倒掛

綠衣小鳳啼愁罷。綠衣の小鳳、愁に啼いて罷み、

——【字解】〔一〕綠衣 羽毛の綠色

瘦影翻懸桂枝下。瘦影、翻つて懸る桂枝の下。
芙蓉帳裏篆消時。芙蓉の帳裏、篆消ゆる時。
解斂餘香散中夜。餘香を斂めて、中夜に散するを解す。
鐘鼓迢迢鎖禁門。鐘鼓迢迢、鎖門を鎖し、
宵衣未得奉明恩。宵衣、未だ明恩を奉するを得ず。
五更香冷羅浮月。五更香は冷かに、羅浮の月、
相憶梅花應斷魂。梅花を相憶うて、應に断魂するなるべし。

なるないふ。〔二〕小鳳 即ち倒掛。
〔三〕翻。この鳥は、名を倒掛といふ位で、身な側にして禁止するものと見える。〔四〕芙蓉帳。〔五〕篆消。篆は香爐の煙。この鳥は一名を收香倒掛といふ位で、香氣を好むものと見える。
〔六〕禁門。宮中の門。〔七〕宵衣。衣を著かへる。〔八〕明恩。主恩に同じ。〔九〕羅浮。南方廣州に在る梅の名所。

【題義】倒掛は鳥の名、東坡の詩に蓬萊宮中花鳥使、綠衣倒掛扶桑歌とあつて、その注に「嶺南の珍禽に倒掛あり、綠毛紅喙、鸚鵡に似て小」とあり、劉績の霏雪錄に「李德裕賦するところの桐花鳳は、即ち東坡の謂はゆる綠毛玄鳳、是れなり」とあり、又李之儀倒掛詞の自注に「この鳥、十二月を以て来る。一名は收香倒掛、一名探花使、性極めて馴れ、好んで美人の釵上に集まる」とある。この詩は、即ち倒掛鳥を詠じたのである。

【詩意】綠衣の小鳳ともいふべき倒掛鳥は、終日、愁に啼き、やがて、瘦せ細りたる體を倒にして、

桂枝にぶら下つて睡つて居る。芙蓉帳中に焼きこめたる香の煙の消えた時は、一たび餘香を自分で聚め、そして、夜中に之を吐き散らすことが出来る。かくの如き靈鳥ではあるが、鐘鼓の聲遠くして、宮門盡く鎖された時分、夜、衣を著かへて主恩を奉することも出来ず、鳥にして人に非ざる身の、今更致方もないことである。そこで、五更の月が、生まれ故郷の羅浮の山を照らし、香氣冷かに地を罩むるに當つては、はるかに、その地の梅花を思つて、ひとり、心魂を懨ますことであらう。

【餘論】措辭は、洗鍊を経て、綺麗に出來て居るが、倒掛といふ鳥が、元來あまり人に知られて居らぬ處から、折角、形容刻劃しても、讀者には、少しも痛切でない。

苦寒書江上主人壁間

苦寒江上主人の壁間に書す

慘節欲盡郊原空。

惨節盡きむと欲して、郊原空しく、

北風五日吹沙蓬。

北風五日、沙蓬を吹く。

客子東游骨肉遠。

客子、東游して骨肉遠く、

主人賴有江邊翁。

主人、賴に江邊の翁あり。

青燈白酒同傾瀉。

青燈白酒、同じく傾瀉、

【字解】 〔一〕慘節 風光惨澹たる季節、即ち冬を云ふ。

〔二〕郊原空 野原に一物もなきをいふ。

〔三〕沙蓬 沙や蓬の草。

〔四〕白酒 濁り酒。

醉擁布衾茅屋下。醉うて、布衾を擁す茅屋の下、

中宵不敢愁苦寒。中宵、敢て苦寒を愁へず、

猶有窮年遠行者。猶は窮年遠行の者あり。

〔五〕窮年 押し詰まつた年。

【題義】江上主人は、江邊なる旅館の主人。この詩は、冬の旅中、寒に苦しんだことを敍して、旅館の壁に題したのである。

【詩意】冬も盡きかかるて、寒氣殊に劇しく、郊野は掃蕩せられて、一物の存するなく、折から、北風は、五日も吹き續いて、河原の沙や、わづかに残れる蓬の穂を吹き飛ばした。予は、獨り東に游んで、骨肉の相迎ふるなく、隨分閉口したが、幸にも、江邊の旅館の主人が請じ入れて、懇に待遇して呉れたから、大に心を安んじた。青燈の下に於て、同じく濁酒を傾け、やがて、酔後、茅屋の下に、布衾を擁して眠に就き、夜中になつても、寒氣に苦しむ心配もなく、まことに安安と過ごしたが、おもへば、この年の暮に、遠地に旅する人もあるべく、その艱苦は、如何ばかりかと、人ごとならず案じられる。

【餘論】結二句は謫然たる仁人の言、措辭の上から見ても、頗る面白い。

菜蓮爲余唐卿賦

菜蓮、余唐卿の爲に賦す

桂桐里中君始歸。桂桐里中、君、はじめて歸る、
菜花滿園黃蝶飛。菜花園に満ちて、黃蝶飛ぶ。
桔槔倚樹長不用。桔槔、樹に倚つて長く用ひず、
江南雨多山土肥。江南、雨多くして山土肥えたり。
方畦獨繞看新綠。方畦、ひとり繞つて新綠を見る、
晚食何須尙思肉。晚食、何ぞ尙ほ肉を思ふを須ひむ。
翠縷登盤春薤香。翠縷、盤に登つて、春薤は香しく、
金釵出盞冬菹熟。金釵、盞を出でて、冬菹は熟す。
我家亦在蓴菰鄉。わが家、亦た蓴菰の郷に在り、
秋風便應歸共嘗。秋風、便ち歸つて共に嘗むべし。
潮州司馬成何事。潮州の司馬、何事をか成す、
回首空愁足萬羊。首を回らして、空しく萬羊に足るを愁ふ。

【字解】 〔一〕 桂桐里 越に在つて、余竟臣の居た處、なほ、その詳は、題義の條に述べる。〔二〕 桔槔 はれ釣瓶、頭會に「水を汲む機」とあり、王維の詩に林喧學桔槔」とある。〔三〕 方畦 四角形に區割した畑、鄭経の詩に被屋渾生ノ亂、方畦執插ノ秋とある。〔四〕 晚食 戰國策に「晚食以て肉に當つ」とある。〔五〕 翠 蕉はにら、耶律楚材の詩に春薤旋澆漁尾、臘糟微浸軟鷄跡とある。〔六〕 金釵 歲時記に「鹽菹、その和を得れば、並に金釵色を爲す、俗、これを金釵菹といふ」とある。つまり、漬菜の鹽加減が善いと、金釵の如く黃色となるといふ類。〔七〕 出盞 盞は鉢、或は瓶。〔八〕 冬菹 蕃は漬菜、

杜甫の詩に長安冬菹醤且綠とある。〔一〕 尊菜 尊菜と眞菰。〔二〕 秋風便應歸共嘗 前に卷四、感舊の詩中にも引いたが、晉書張翰傳に「齊王間、辟して大司馬東曹掾となす、間、時に權を執る。翰、秋風の起るを見て、吳中の菰菜尊羹鱸魚の膾を思つて曰く、人生、適志を貰ふ、何ぞ能く器官數千里、名爵を要せむやと。遂に駕を命じて歸る」とあるを暗用す。〔三〕 潮州司馬 李德裕を指す、通鑑に「大中元年冬十二月、李德裕を貶して潮州司馬となし、明年、郴州司馬參軍事に貶す」とある。〔四〕 足萬羊 补錄記傳に「李德裕、太子少傅となり、東都に分司たり、時に一僧善く人の禍福を知るを聞き、因つて、之を召す。僧曰く、公、當に南行萬里すべし、と。明日復た之を召して、南行遅るかを問ふ。曰く、公、羊萬口を食ふ、五百の未だ満たざるあり、必ず當に還べしと。德裕歎じて曰く、師は實に至人、われ曾て夢に行つて晉山に至る、盡目盡く羊、牧者數十あり、われに謂つて曰く、これ侍御の羊なり、と。かつて、この夢を詠して人に讃らさず、今、冥數、もとより誣ひざるを知る。後旬餘、靈武の帥、米を送り、豈び羊五百を餓る。大に驚き、僧を召して、その事を告げ、且つ之を還さむと欲す。僧曰く、羊、ここに到らば、すでに相國の有たり、これを還すも益なし、南行、それ返らざるか」とある。

【題義】 菜蓮は、余唐卿が其居に署した名である。唐卿、字は堯臣、前に卷三、春日懷二十友詩を始めとし、その新鄭丞に任せられた時に贈つた詩もあつて、青邱の熟友である。列朝詩集に「堯臣、字は唐卿、永嘉の人、早く文學を以て著はる。會稽に客居す。越の鎮帥院判邁善卿・參政呂珍、羅して幕下に致し、ともに保越の功あり、薦剡交も上る。仕進に意なく、越の桂桐里に於て、圃を治め、茅を結び、署して菜蓮といふ。すでにして、吳に入つて、北郭に居り、高啓、張羽諸人と北郭の十友たり」とある。菜蓮の蓮は、詩經に考槃在淵、碩人之蓮とあつて、もと優游自適といつた様な意味の字であるが、ここでは、隱宅の義に用ひた。そこで、菜蓮といへば、菜を植ゑてある隱宅といふこと。

この詩は、青邱が余堯臣の依囑に因つて、賦して贈つたので、これで見ると、堯臣が未だ吳に來らざりし時、互に名を聞き知つて、音信を通じて居たものと思はれる。

【詩意】君は、越の桂桐里に歸臥されたさうで、菜蓮の名に負かず、菜の花は園中に咲き満ち、そして、黃い胡蝶が飛んで居る。はね釣瓶は、木にもたせかけた儘、長く用ひず、元來江南は、雨多くして、山土肥沃、格別水を灌ぐ必要もないからである。君は四角形に區割された畑の周圍を歩き繞つて、綠色の新鮮なるを見、晩食に肉が欲しいとも思はぬ位。一口に菜といつても、種種あるが、春の薺の香ばしきを盤に登せると、翠の絲すぢの如く、冬の漬菜の能く漬かつたのを瓶から取り出すると、金鎖の如き色をして、とりどりに棄て難き味がある。わが家は、莧菜や眞菰を産する江鄉に在るので、秋風の吹き起る頃、君と一處に往つて、十分に之を喫したいと思ふ。むかし、潮州の司馬たりし李德裕は、生涯食つた羊の數が萬に満つたから、一たび貶謫されると、その地に歿して、都には還れないといつて心配したと云ふが、彼にして、菜のみを食つて居たらば、何事も無かつたであらうに、さてさて、氣の毒の事である。

【餘論】初の四句は、菜を種ゑた田園の光景。次の四句は菜の味の尋常ならざるを云ひ、春薺、冬薺を以て、すべて一概したのである。結四句は餘意、おのが郷里の尊菰の恰も之と對敵すべきを云ひ、そして、肉食の宜しくないことを斷言する爲に、李德裕の故事を運用したのは、極めて新らしい。

送張貢士祥會試京師

張貢士祥の京師に會試するを送る

國家文治今百年。國家文治、今百年、

多士孰賚皆知天。多士、孰れか賚ふ、皆天なるを知る。

南宮坐試二三策。

南宮、坐に試む二三策、

能使海內無遺賢。

能く海内をして遺賢なからしむ。

院門晨開官燭爛。

院門、晨に開いて、官燭爛たり、

白袍鵠立人三千。

白袍鵠立、人三千。

上談禮樂祖姬孔。

上は禮樂を談じて姬孔を祖とし、

下議制度輕讎玄。

下は制度を議して讎玄を輕んず。

臨軒曾看宰相賀。

軒に臨んで、かつて看る宰相の賀するを、

雲端盡見當臚傳。

雲端盡く見る、臚傳に當るを。

看花或騎太僕馬。

花を見て、或は騎す太僕の馬、

錫宴每給司農錢。

宴を錫うて、毎に給す司農の錢。

七言古詩 送張貢士祥會試京師

【字解】〔一〕今百年。原注に、

至正戊戌作とあつて、即ち元の順帝の十八年。四海を統一した元の世祖（即ち忽必烈）の即位、至元元年よりここに至るまで、九十五年、大數を取つて百年と云つたのであらう。〔二〕多士執賚。濟濟たる多士は、誰より賜はつたものか、皆、天の爲すことであるといふ義。〔三〕南宮。漢書に「尚書百官府を建てて南宮といふ」とある。ここでは尚書省を指す。

〔四〕白袍鵠立。尚書省に試験を受ける人の羣集するないふ。東坡の龍試官考較詩に、順君聞此添蠟燭、門外白袍立如鵠とある。〔五〕祖姬。孔姬は周公、孔は孔子、王禹偁の詩に篇草取李杜、講貫本姫孔とある。〔六〕輕讎玄。讎は漢の族解、

登朝出牧知幾輩。
冠佩劍鳥紛相聯。
邇來國運屬中圮。
爭慕死節羞生全。
潯陽老守血灑地。
甬東大將魂沈淵。
廻知儒術王政本。
至此尙賴扶傾顛。
南方上公境獨治。
鹿鳴更欲興賓筵。
諸生區區抱遺籍。
草萊竄亡亦可憐。
草萊竄亡、亦憐むべし。
ここに至つて、尙ほ頼つて傾顛を扶く。
廻ち知る、儒術は王政の本。
ここに至つて、尙ほ頼つて傾顛を扶く。
太史奏す、日下五色の見はるるあり
と。左右皆賀す」とある。【八】 腹傳。
賀宋史の韓琦傳に「方に第を唱ふ、
太史奏す、日下五色の見はるるあり
と。左右皆賀す」とある。【八】 腹傳。
前々卷八、宋賜進士狀解歌の中に詳
述して置いたが、文獻通考に「進士嚴
試、榜を挙げて名を唱ふるを號傳と
いふ」とあつて、即ち嚴試の及第を率
相より相傳へて發表すること。【九】
太僕馬齊職儀に「乘僕の長を太僕
といひ、與馬を掌る」とあつて、太
僕は、今でいへば主馬頭、從つて、太
僕馬は、主馬寮の馬。進士は、その馬
を拜借して、都を乗り廻はすので、
孟郊の詩に、春風得意馬蹄疾、一日
看遍長安花とある。【十】 錫宴。
朝廷より宴を賜はる、王光庭の詩に、

古檠空案親章編。古檠空案、章編に親む。
逢時頗欲見行事。時に逢うて、頗る行事を見むと欲す。
豈但持作求魚筌。豈に但だ持して魚を求むるの筌と作さ。
入場又手萬言就。入場、手を又して萬言就り。
衆目一葉驚先穿。衆目、一葉先づ穿つを驚く。
嚴裝又隨計吏發。嚴裝、又計吏に隨つて發し。
京城遙瞻北斗連。京城、遙に瞻る北斗に連るを。
秋風吹衣別酒冷。秋風、衣を吹いて、別酒冷かに。
枯楊淺水闔門邊。枯楊淺水、闔門の邊。
君行勿亟我有語。君が行、亟かなる勿れ、われに語あり。
落日尙在車衡懸。落日、なほ車衡に在つて懸る。
竊聞天子正側席。竊に聞く、天子、正に席を側つるを。
此去爲拜彤庭前。ここを去つて、爲に拜せよ彤庭の前。

瓊章九霄發、錫宴五衢通とある。

【一】 司農 文獻通考に「司農は官
名、秦には治粟内史といふ。漢の景
帝、名を大司農と改む」とある、即
ち農商大臣。【二】 登朝 中央
政府に出仕する。【三】 出牧 外
に出でて地方官となる、周禮に「天
官太宰九兩、一に曰く牧、地を以て
民を得たり」とあつて、その注に「牧
は州長なり」とあり、漢書成帝紀に
「部の刺史官を罷め、更めて州牧を
置く」とある。【四】 冠佩劍鳥
冠・腰下の佩玉・劍・足袋、合せて
禮装をいふ。【五】 中圮 坡はや
ぶれる。【六】 潇陽老守 一統志
に「九江府、晉に潁陽といふ」とあ
る。これは總管李諭の事で、元史紀
事に「至正十二年二月、徐壽輝、九
江を攻む、右丞李諭木兒、方に兵を

揮毫休奏豊 泉頌。毫を揮ふも、奏するを休めよ醴泉の頌。
 紿札莫賦凌雲篇。札を給せらるるも賦する莫れ、凌雲の篇。
 但當開口論世事。但だ當に口を開いて、世事を論すべし、
 號令次第宜何先。號令次第、宜しく何をか先にすべき。
 坐令王綱復大正。坐に王綱をして、大正に復せしむ、
 乾樞共仰天中旋。乾樞、ともに仰ぐ天中に旋るを。

我今有志未能往。われ、今、志あるも、未だ往くこと能はず、
 燭首萬里空茫然。首を燭げて、万里空しく茫然。

往往、城を棄てて遁る。ひとり、船、孤城を守り、中外援絶え、しかも、賊勢益す端に、兵を迫めて、城に薄る。分省平章禦堅不花、北門より出でて走る。船、兵を引いて埠に登る。賊、すでに西門を焚く。舟を張つて之を射れば、轉じて、東門を攻む。船、急に往いて救ふ。城、すでに破れ、賊、すでに入る。なほ之と悲戦し、力、敵する能はず。乃ち劍を揮ひ、これを叱して曰く、「我を殺せ、百姓を殺す無かれ」と。賊、これを刺し、馬より墜つ、兄、見の子、乘馬と俱に死す。州民、これを聞いて、哭聲地を震ふ。槍を具へて之を擲る。時に東に、是、頻に居り、亦た賊に死す。事聞こゆ。船に龍西公を贈り、文忠と諱す」とある。【七】 南東大將 一統志に「寧波府、越には南東といふ」とある。これは、寧波の守將泰不華を指したので、元史紀事に「至正十二年三月、方國珍、復た其黨を劫して、海に入る。吉州路の撫魯花赤泰不華、職士王大用を遣し、往いて國珍を除きしむ。拘留して遣らす。しかも、その黨陳仲達をして、往来降を謀ば

しむ。泰不華、舟を具へ、受降の旗を張り、潮に乗じて澄江を下る。沙に觸れて行かず、遂に國珍と遇ぶ。仲達を呼んで前議を申れしむ。仲達、目動き、氣索す。泰不華、その心の異なるを覺り、手づから之を斬り、即ち前んで、賊船を持ち、奮つて之を擊つ。賊羣至し、抱持して其船に入らむとす。泰不華、目ん眞らして之を叱し、刀を奮つて賊を殺す。賊、槊を攢めて之を刺す、頭に中つて死す、なほ植立して仆れず、その尾を海中に投す。事聞こゆ。鶴國公を追贈し、忠介と諱す」とあり、又同書に「十三年、張士誠、泰州を陥る。淮南行省、知府李齊を遣して、招降せしむ。士誠、齊を呼んで跪かしむ。齊、叱して曰く、「吾が膝は鐵の如し、豈に賊の爲に屈せむや」と。士誠、怒つて曳き倒さしめ、その膝を椎碎して、之を局す。時論、大科三魁、李鬱・泰不華、及び齊の若き、皆科名に負かすと云ふ」とある。【八】 南方上公 岳巒の詩に上公周太保、副相漢司空とある。ここでは、張士誠を指す。金燈の接に「元史」丁酉、至正十七年、明祖、徐達を遣して、常州に克ち、張士誠の弟士德を擒にす。士誠、使を遣して元に降る。詔して、士誠を以て太尉となす。この詩、戊戌に作る、實に至元十八年なり」とある。【九】 鹿鳴 詩經の篇名、その小序に「羣臣嘉賓を燕するなり」とあり、羅隱の詩に弱冠負三文輪、此中聽鹿鳴」とある。【十】 實錄 温庭筠の詩に實錄得三嘉賓、侯印有三光輝」とある。【十一】 章編 史記孔子世家に「晚にして易を讀み、韋編三たび紹つ」とあつて、竹簡を編んだ革の紐、ここでは古書の繩に用ひて居る。【十二】 求魚筌 築は魚を捕ふる竹器。莊子に「築は魚に在る所以、魚を得て筌を忘る。蹄は兎に在る所以、兎を得て蹄を忘る」とある。【十三】 入場 試験の席に入る。【十四】 又手を組む、北夢瑣言に「溫庭筠、才思麗麗、工に小賦を爲る、入試ごとに、官韻を押して賦を作り、凡そ八叉手にして八韻成る。時人號して溫八叉と爲す」とある。【十五】 一葉驚先穿 異國策に「羹由基、善く射る。楊柳の葉を去ること百歩にして射り、百發百中」とある。【十六】 計裝 かひがひしく支度する。【十七】 又隨計吏發 史記の儒林傳に「二千石、謹んで可なるものを察し、當に計と備にすべし」とあつて、その注に「計は計吏なり、備は俱なり、計吏と俱に太常に譲らしむるないふなり」とある。太常は宮中の儀式などを掌る官省、今までいへば宮内省式部寮。謂はゆる郷貢進士は、地方の會計官吏に從つて上京し、宮内省に至り、そして、天子が親ら臨んで、謂はゆる殿試を行ふといふのが、古しへの規定である。【十八】 間門 蘇州の西門。【十九】 車衡 衡は車の横木、即ち軸。【二十】 天子正側席 後漢書董卓の注に「側席とは、正坐せざるを謂ふ、賢良を待つ所以なり」とある。【二十一】 形庭 宮中正殿の前、赤色の天子正側席

江に駐む、風を聞いて背に運る。纏管李翰、鄉落に檄し、木石を險處に聚め、その歸路を過む。黃梅の主簿也孫帖木兒、出でて賊を撃たむことを願ふ。諭、これと出でて賊を撃ひ、大に賊兵を敗り、二萬餘人を殺獲す。又長木數千を以て鐵椎を杪に冒らしめ、暗に沿岸の水中に置く。賊舟數千艘、流に順ひ、鼓譟して至りしが、木橋に遇つて動くなれず。船、火箭を發して之を射り、燒溺算なし。時に東は淮甸に際し、西は荆湖より、守臣として之を射り、燒溺算なし。時に東は淮甸に際し、西は荆湖より、守臣として之を射り、燒溺算なし。時に東は淮甸に際し、西は荆湖より、守臣

數瓦を鋪き連ねたるが故に云ふ。【三】體泉頌 留羅に「甘雨時に降り、萬物以て喜し、これを體泉といふ」とあり、漢書王褒傳に「太子、褒の爲るところの甘泉及び洞簾の頃を喜び、後宮をして皆これを詠せしむ」とある。【三】給札 紙を與へる。史記の司馬相如傳に「上、尚書をして筆札を給せしむ」とある。【三】凌雲篇 同傳に「すでに、大人の賦を奏す、天子、大に悦び、觀覽して凌雲の氣あり」と見ゆ。【三】王廟 王室の廟紀。【三】復大正 至大中正の道に復歸する。【三】載樞 乾は天子の德、樞は樞機、皇圖といふに同じ、梁の周翰の五鳳樓賦に結三坤之德、振乾之樞とある。【三】天中旋 中天に在つて遷旋する。

【題義】この詩は、張祥といふ人が郷貢進士となり、更に殿試に應する爲に、上京するのを送つて作つたのである。祥の字竝に閱歷等は分からぬが、格別、出世をしなかつた人と思はれる。

【詩意】わが大元に於ては、文治を布くこと、今で丁度百年になり、濟濟たる多士は、誰が賛ふかといへば、皇天意あつて、特に下し給へるものである。その多士を尚書省に於て試験し、時務二三策を作らせれば、その才能は、大抵分かるので、海内をして遺賢ながらしめることが出来る。試場の光景はといへば、宮中の一構が巍然として峙ち、門は早曉より開かれ、中には官燭が爛爛として照り輝いて居て、受験の爲に集ひ来る人は、三千の多きに及び、いづれも白袍を著て、鵠の如く立ち竝んで居る。これ等の人々は、もとより相當に學問があつて、上、禮樂を談すれば、周公孔子を祖述し、下、國家の制度を討議すれば、施讎・鄭玄も物の數とも思はぬ位。やがて、試験が済むと、宰相は、軒に臨んで、昭代人材の盛なることを賀し、次いで殿上、即ち雲の上から傳呼して、及第者の姓名が発表される。及第者は、寮の御馬を拜借して、花見に出かけ、又毎毎司農から費用を支出して、宴を賜はるこ

とになつて居る。それから、愈よ任用されることになり、或者は朝廷に出仕し、或者は地方官を拜命し、冠佩劍鳥、各いかめしき禮裝を爲し、紛糾として引きも切らぬ位。しかも、近ごろ、國運が聊か衰頽しかかつた處から、これ等の進士輩は、争うて節義に死することを慕ひ、無爲にして、生きながらふるを恥として居る。中にも、九江の老總管李黼の如きは、鮮血を地に灑いで大節に殉し、寧波の守將秦不華の如きは、屍を海中に投せられ、英魂、深淵に沈みて、少しも悔やまず、天晴な美名を千載に留めた。して見ると、儒術は、王政の根本であつて、衰世に際しても、これに依つて、道義の傾頽を扶けることが出来る。刻下、諸生輩が、區區として聖賢の遺籍を抱き、騷亂を避けて、草萊の間に逃げ匿れて居るのは、まことに氣の毒な事である。ここに、太尉張士誠は、南方の吳地を領し、その境内は、ひとり安寧である處から、進士の試験をなし、その及第者を招いて宴を張り、鹿鳴の古詩を歌ふ様にしたいといふので、それを計畫をして、やがて實現された。わが張君は、久しう間客舎の夜雨を聞きつつ、燈下、几案に對して古書に親み、隨分、勉強を爲し、時に逢へば、これを實地に施して、一かどの事業を仕出來さうと考へて居たので、研學は、立身の準備、魚を求める筌に過ぎぬといふ様な淺薄な了見は、決して無かつた。そこで、曩に試場に入つた時など、一たび手を組み合はす間に至りては、衆目を驚かしめた。その試験は、無論通過したから、今度は、計吏に随つて、出發す

ることで、目ざす帝都は、北斗に連つて、遠くの方に見える。今しも、秋風衣を吹いて、別筵の酒も冷かに、闇門の邊、柳枯れて水淺く、風光蕭條たる時しも、君よ、さう急がすに、一寸待つて呉れろ、われに一言申し述べたいこともあるし、夕日は、なほ車前の横木に懸つて居る。ひそかに承はれば、天子は、賢良の士を優待し、これを引見する時には、その席を避けられるといふことで、君にして、ここを去らば、形庭の前に至りて拜を爲し、聖恩の辱きを第一に感謝するが善からう。それから、筆を揮ふにしても、役にも立たぬ醴泉の頌などは捧呈せず、紙を賜はつたとて、天子をして徒に凌雲の氣を生せしめた彼の大人賦などは作らぬが宜しい。それよりも、口を開けば、眼前の急務として、専ら時事を論じ、諸侯に號令する次第は、それを第一とすべきかといふことに就いて、第一次に討議するが善い。かくて、王室の綱紀を再び振肅して、大中至正の道に復歸せしめ、四海の羣生をして、聖主親ら洪圖を天中に於て運用されるといふ事實を仰ぎ知らす様にして貰ひたい。われは、現に濟世の志あれども、色々の都合で、郷里を離れることが出来ず、ここに、君の行を送るにつけ、首を擧げて、萬里の遠きを望み、唯だ茫然として自失するばかりである。

【餘論】 この詩の前半、即ち起首より鹿鳴更欲興賓筵に至る二十四句は、元代に於ける科舉の大概を述べ、殊に、李黼・秦不華の諸士が、科名に負かず、節義を全うし、後世に彪炳することを擧げて、本旨にも協つて居るし、この四句は、全篇精神の注ぐところで、措辭緊健、音節亦た昂るを覺える。最後に、我今有志未能往の二句は、到底、蛇足たるを免れず、むしろ、勇割に従つた方が善さうに思はれる。

明月舟并引

明月舟并引

秦郵呂彥行題所寓室曰明月舟蓋取璧社湖中有明月之句也。

【訓讀】 秦郵の呂彥行、寓するところの室に題して明月舟といふ、蓋し、璧社湖中有明月の句に取るなり。

明月非月舟非舟。明月、月に非ず、舟、舟に非ず、

問君乘之何所游。君に問ふ、これに乗じて何の游ぶところ。

風多浪高徧處有。風は多く、浪は高くして、徧處に有り、

日暮欲渡令人愁。日暮渡らむと欲して、人をして愁へしむ。

【字解】 〔一〕徧處有、徧はあまれし。隨處に有りといふに同じ。

〔二〕偶似淮南注、璧社湖中有三明月の次句、淮南草木篇ニ光輝とあるに本づく。〔三〕白苧、即ち白鈍詞、

前に卷一に此題があつて、その處に

此鄉偶似淮南住。

この郷偶ま淮南に住するに似たり、
醉客毎來歌白苧。

醉客毎に來つて白苧を歌ふ。

夜深天黑夢神光。

夜は深く、天黒くして、神光を夢む、
幾箇驚鳥落高樹。

幾箇の驚鳥か、高樹より落つ。

君才照國不照車。

君の才、國を照らして車を照らさず、
何用高隱江湖居。

何ぞ高隱江湖に居るを用ひむ。

嗟予未識青藜杖。

嗟す、予が未だ識らず青藜杖、一まむ。

願借舟中臥讀書。

願はくは、舟中を借つて、臥して書を讀む。

て千里を照らさむとす、豈に特だ十二乘のみならむや」とある。【六】青藜杖、劉向別傳に「向、書を天祿閣に投す、夜暗く獨坐して書を讀す。老人あり、黃衣、青藜杖を植て、聞を叩いて入り、杖端を吹けば燐然ゆ。向と開闢以前を説く。向、因つて五行洪範の文を受け、署に至つて去る。曰く、われは太乙の精、天帝、卯金の子に博學の者あるを聞き、下つて刺せしむ、と。乃ち竹牘天文地の書を出し、悉く以て之を授く」とある。

【題義】秦郵は、一統志に「高郵州、吳の邗溝の地、秦の秦郵、漢の高郵」とある。次に、甓社湖は、同じく一統志に「甓社湖は高郵に在り、宋の孫莘老、湖陰に家す。夜、坐して、窓明かに晝の如きを

覺え、湖に循つて之を求むれば、一大珠を見る。その光、天を燭す。この年、莘老登第。黃庭堅の上、外舅孫莘老の詩、甓社湖中有明月、淮南草木借光輝」とある。それから、引の意味は——秦郵の人、呂彥行は、この蘇州に於ける寓室を明月舟と號して居るが、それは黃山谷の甓社湖中有明月の句に取つたのであるといふので、仍つて、この詩を作つて寄題するといふことは、言はずとも分かつて居るから、わざと省略したのである。

【詩意】君の寓齋を明月舟といふが、明月といつても月あるに非ず、舟といつても實は舟でもない。君は、その明月舟に乗じて、何處へ遊びに出かける積りであるか。刻下の世は、到る處、風浪險惡、日暮、これを渡らうと思つても、心を愁へしむるばかり。君の寓せらるる處は、さながら、その故郷、たる淮南の高郵に似て居て、城中でも格別賑はしく、毎毎、醉客が集ひ來つて、白絹の新曲を歌つて居る。しかるに、君は、夜深く天黒き時に當りて、夢に神光天を燭らし、幾羽の鳥が驚いて、宿つて居る高樹の上から落ちたのを見たとのことで、丁度、その郷賢たる孫莘老が登第の前兆として、一大明珠を得したと同じである。して見れば、寓居を明月舟と號したのも、まんざら來歴の無いことではない。元來、君の才は、優に一國を照らすに足るべく、決して、車、十二乘を照らす位のものではないから、天晴、廟堂の上に翔飛すべく、決して、高隱と稱して、江湖に引ッ込んで居るにも及ばない。予の如きは、もとより淺學で、まだ青藜に杖つく太乙の精に出遇つたこともないから、願はくは、

【餘論】寓齋に名づけた意味が、いやに、ひねくれて居るが、それが、却つて、構想の端緒を得ることになつたので、淮南といひ、神光といひ、極めて切實で、呂彦行その人を祭り上げて、さながら、孫莘老の後身の如くして仕舞つた。それから、結末二句は、言行を以て暗に劉向に比し、その博聞を讀歎する意を併せて影寫したのである。

聽南康陳協律彈楚歌

南康の陳協律が楚歌を弾するを聞く

我聞楚客彈楚聲。われ聞く、楚客の楚聲を弾するを、
初絃一揮邊馬驚。初絃一揮して、邊馬驚く。
嗚咽哀音動寒月。嗚咽、哀音、寒月を動かし、
正如歌發漢軍營。正如歌の漢軍の營に發するが如し。
營中一曲還漸理。營中の一曲、還た漸く理め、
想見彷徨帳中起。想ひ見る、彷徨、帳中に起つを。

【字解】〔一〕初絃一揮はじめて琵琶の絃を撥き拂ふ。

〔二〕彷徨うろつく、さまよふ。

美人掩泣壯士悲。美人、泣を掩うて、壯士悲み、
寶劍無光黯秋水。寶劍光なく、秋水黯し。
淒涼疊弄悄欲終。淒涼疊弄、悄として終らむと欲す、
應憐歸騎阻江東。應に憐むべし、歸騎の江東に阻まるるを。
蓋世英雄竟如此。蓋世の英雄、竟に此の如し。
遺調空留感入耳。遺調空しく留まつて、入耳を感じ、
四座相逢今夜聽。四座相逢うて今夜聽く。
霜風忽來庭樹零。霜風忽ち來つて、庭樹零つ、
無言有愁俱酒醒。言なく、愁あり、ともに酒醒む。

【語義】一統志に「南康府は、戰國、楚に屬す」とある。協律は官名、詳しく述べては協律郎といひ、宮廷に召し抱へられたる伶人。その人、姓は陳、名字は不詳。この詩は、南康の生まれなる協律郎陳某が楚歌に合せて琵琶を弾するのを聞いて作つたのである。

【詩意】陳協律が項王垓下の一曲を弾じたが、もと楚客が楚聲に合すのであるから、まことに、お手

の物で、他に比類なく、その初めて絃を撥き拂つた時は、邊塞の馬の驚いて嘶く様であつた。やがて、咽び入る哀音は、寒月を動かし、さながら、垓下を圍んだ漢軍の營中に於て、楚歌の聲が起つた様であつた。その營中で唱ふる一曲が次第に調子づいて來ると、彷徨として、項王が夜起つて帳中に飲んだことを想像させる。その時、虞美人は涙を掩ひ、項羽は悲歌慷慨し、寶劍は其精を失ひ、秋水の光も黯然たるばかりであつた。淒涼たる幾曲をつづけて奏し、悄然として將に終らむとすれば、項羽の殘騎、折角、江東に落ち延びむとしたのが、路を断れて、愈よ討死といふことに成つて、特に聽者の同情を惹いたことである。おもへば、蓋世の英雄たる項羽も、末路は此の如く、その遺調は、空しく千載の後に存して、人耳を感せしめる。四座の人々、今夜ここに集うて、陳協律の妙曲を拜聴したが、霜を帶びたる夜の風は、颶として吹き度り、庭上には落葉繁く、誰も、彼も、愁餘あつて言葉なく、ともに、酒の自然に醒むるを嘆き侘ぶるばかりである。

【餘論】ひとしく琵琶を聽いたのであるが、前に卷八、夜飲二丁二侃宅「聽琵琶」の一首に比すれば、眞然として相及ばない。項王垓下の事實は、千歳の下、なほ人の耳目に新にして、必ずしも陳套ではないから、今少し工夫したらば善かつたらうと思はれる。要するに、作者は、興會屬せざるに、強ひて作り上げたのもあらう、篇中生氣に乏しく、到底、讀者の視聽を動盪することが出來ずにつたのは、まことに遺憾である。

京師苦寒

京師寒に苦む

北風怒發浮雲昏。北風怒り發して浮雲昏く、
積陰慘慘愁乾坤。積陰慘慘として乾坤を愁へしむ。
龍蛇蟄泥獸入穴。龍蛇は泥に蟄し、獸は穴に入り、
怪石凍裂生皴痕。怪石凍裂して皴痕を生す。
臨滄觀下飛雪滿。臨滄觀下、飛雪滿ち、
橫江渡口驚濤奔。横江渡口、驚濤奔る。
空山萬木盡立死。空山の萬木、盡く立ちながら死し、
未覺陽氣回深根。未だ覺えず、陽氣の深根に回るを。
茅檐老父坐無褐。茅檐の老父、坐して褐なく、
舉首但望開朝暾。首を擧げて、但だ朝暾を開くを望む。
苦寒如此豈宜客。苦寒かくの如く、豈に客に宜しからむや、
嗟我歲晚飄羈魂。嗟す、我が歲晚羈魂を飄すを。

【字解】〔一〕積陰、陰寒の氣が積る。〔二〕皴痕、普通、實學上の用語であるが、梁書武帝紀に「筆を執つて寒に觸るれば、手、爲に皴裂す」とあつて、割り裂けた痕を云ふ。

〔三〕臨滄觀、一統志に「勞勞亭は、應天府治の西南に在り、吳の時建つ、一名臨滄觀」とある。〔四〕横江渡、南京の近傍に在る揚子江の渡し場、李白の横江詞に、横江館前津吏迎、向余東指薄雲生とある。〔五〕回深根、木の深い根元に陽氣が入つて、生氣の勃發すること。〔六〕無褐、褐は短い衣。〔七〕開朝暾、朝日が出て時候の暖くなること。〔八〕飄、旅の心魂が飄飄として落ちつかぬこと。〔九〕尋常、普通、人みなに。〔一〇〕松櫟、樊磯の傳奇

尋常在舍信可樂。

尋常舍に在る、信に樂むべし。

牀頭每有松醪存。

牀頭毎に松醪の存するあり。

山中炭賤地爐暖。

山中炭は賤しく地爐暖く、

兒女環坐忘卑尊。

兒女環坐して、卑尊を忘る。

鳥飛亦斷況來友。

鳥の飛ぶも亦た断り、況んや來友をや、
十日不敢開衡門。

十日敢て衡門を開かず。

竭來京師每晨出。

竭來京師、毎晨出で、
強逐車馬朝天闈。

強ひて車馬を逐うて天闈に朝す。

歸時顏色黯如土。

歸る時、顏色黯きこと土の如く、
破屋暝作飢鳶蹲。

破屋暝に作す飢鳶の蹲するを。

陌頭酒價雖苦貴。

陌頭の酒價、貴きに苦むと雖も、
一斗三百誰能論。

一斗三百、誰か能く論せむ。

急呼取醉徑高臥。

急に呼んで酔を取り、徑に高臥す、
布被絮薄終難溫。

布被絮薄くして、終に温かなり難し。

却思健兒成西北。

却つて思ふ、健兒の西北に成するを、
千里積雪連崑崙。

千里の積雪、崑崙に連る。

河水踏碎馬蹄熱。

河水踏碎して、馬蹄熱し、
夜研堅壘收羌渾。

夜、堅壘を研つて羌渾を收む。

書生只解弄口頬。

書生、只だ口頬を弄するを解し、
無力可報朝廷恩。

力の朝廷の恩に報ゆべきなし。

不如早上乞身疏。

如かず、早く身を乞ふの疏を上り、
一蓑歸釣江南村。

一蓑、歸つて江南の村に釣らむには。

羌渾の衆を難ふ」とあつて、羌人と
吐谷渾の民とを合稱す、ともに西戎
の種類。【三】弄口頬 口の先ば
かり動かす、金史王庭筠傳に「上、
宰執に謂つて曰く、聞く、文士、庭筠
を妬むもの多く、その文を論せず、顧
みるに行止を以て替となす。大抵、
讀書の人は口頬多く、或は相黨すと、
遂に庭筠を遷して翰林修撰となす」
とある。【四】乞身疏 身の暇を
乞ふ上書。

【通鑑】説明に及ばぬ。但し、題下の原注に洪武己酉とあるから、その二年、即ち青邱が都に入つた
年で、その冬に作つたものであらう。

【詩意】北風怒つて吹きすさび、浮雲天を蔽うて昏く、陰寒の氣は、慘惨として積り、乾坤爲に愁ふ
るばかり、もとより、冬であるから、龍蛇は皆泥中に蟄し、野獸は穴に潜み、怪石も凍つて裂けた爲

に、皴痕を生ずる位。金陵で客を送る臨滄觀の邊には、飛雪地に満ち、橫江渡口には、驚濤奔るが如く、頃ろは、旅客も全く絶えて仕舞つた。空山の萬木は、皆立ち枯れとなり、陽氣が深根に入つて、生意を發生する氣色は、なかなか見えない。茅檐の貧居に燭つて居る老父は、坐するに短褐だに行く、朝日が上つて天氣の暖かならむことを希望して止まない。寒氣の甚しいこと此の如くで、到底、羈客に宜しくなく、歲晚に際して、心魂の飄動するを禁じ得ぬは、まことに歎かしいことである。これが、人並に、わが家に居たならば、まことに樂むべく、牀頭には、いつでも松の花を交せて釀した潤酒がある。山中では、もとより炭が廉價であつて、惜し氣も無くべるから、圍爐裏も、極めて暖かであつて、兒女輩は、その周圍に坐つて、尊卑の別をも忘れ、至極のんきに打興じて居る。鳥の飛ぶことだに、断えて居る位だから、友人の來訪などは、極めて稀であつて、十日の間も、かや葺の門を開くことはなかつた。然るに、今、自分は、京都に居て、毎日朝早く出かけ、強ひて車馬を逐ひかけて、宮城に入朝し、終日仕事をしてから、家に歸ると、顏色黯然として土の如く、夕ぐれ、壊れかかつた屋根の先端は、飢ゑた鳶の跡まつて居る様に見える。市中の酒價は、隨分高いが、一升三百錢であつた處で、誰しも、文句をいふものではなく、自分は大急ぎで買ひ取らせ、一飲して醉を成し、直に高臥するが、何分にも、布の夜具は、中に入れた縫が薄くして、どうしても暖かにならない。おもへば、兵士どもは、遙に西北の邊境を成つて居るが、積雪は、千里の廣きに亘つて、崑崙山に連る位。鐵馬を躍

らして、河水を踏み碎けば、踏が自然あつくなり、夜に乘じて、堅壘に斬り込んで、光渾の蠻族どもを取り押へるに至りては、一通りの苦勞ではない。予の如きは、一介の書生、唯だ口先を弄することが出来るだけで、朝廷の洪恩に報ゆる力もなく、まことに慙愧に堪へず、早く身の暇を乞ふ上書を差出し、やがて、江南の村に歸り、一蓑を著けて釣を垂れ、のどかに、餘生を送るのが至當であらう。

【餘論】起首十二句は、歲晚の苦寒を狀し、尋常在舍信可樂の六句は、故山の冬の氣分の暢氣なるを寫して、波瀾横生の妙がある。次に、竭來京師毎晨出の八句は、都の侘住居の足らぬ勝で、この折しも、愈よ堪へ難きを言ひ、却思健兒戍西北の四句は、遠征の戍客を思ひ、用筆精警、そして、一轉して、自己の身分の上に纏到し、早く歸隱したいといふことを以て收束したのである。

約諸君游范園、看杏花

諸君に約して、范園に遊び、杏花を見る。

去年春色近清明。去年春色清明に近し、
萬匝煙花夾曉城。萬匝の煙花、曉城を夾む。
西苑相逢車馬問。西苑相逢うて、車馬問ふ、
何人不是踏春行。何人か是れ春を踏んで行かざらむ。

【字解】〔二〕清明 陰曆三月の節、陽曆では、大抵、四月の初五初六に當る。
〔三〕萬匝 幾重にも繞る。
〔三〕西苑 城西の庭園。

今年人迷去年道。今年、人は迷ふ去年の道、

風雨不來花自掃。風雨來らずして、花自ら掃ふ。

僧寺庭空半紫苔。僧寺庭空しく、半ば紫苔、

侯家宅廢皆青草。侯家の宅廢して、皆青草。

縱然無主一株存。たとひ主なくして、一株存するも、

憔悴塵沙不可論。塵沙に憔悴して論すべからず。

野外日斜啼鳥散。野外、日、斜にして、啼鳥散じ、

消愁無處却消魂。愁を消すに處なくして、却つて消魂。

魏公園林芳塢下。魏公の園林、芳塢の下、

聞有柔枝正堪把。聞く柔枝の正に把るに堪へたるありと、

休言亂後少花看。言ふを休めよ、亂後花を見る少し、

得到花前人亦寡。花前に到るを得る、人亦た寡し。

明日尋君君莫違。明日君を尋ね、君、違ふ莫れ、

【】嚴然。たとひと劃すべし。

【五】魏公。前に卷九、偃松行の詩中にも見えたが、宋史范仲淹傳に「祖興の初、詔して魏國公に追封す」とある。

共隨游蝶弄晴暉。共に、游蝶に隨つて、晴暉を弄せむ。

閉門夢斷江南晚。門を閉ぢて、夢は断ゆ江南の晩、

忍見迢迢春自歸。見るに忍びむや迢迢として春自ら歸る。

【】晴暉。晴れた日。

【題義】約三諸君は、一に約三王止仲に作つてある。范園は、蘇州府志に「雍熙寺の後に在り」と記し、前に次韻楊孟載早春見寄の詩中に引いた樓鑰の記略に「吳門の范氏、柱國麗水府君より、靈芝坊に居る、今、雍熙寺の後に在り、五世の孫文正公、この地に生長す」とあるから、范仲淹が立身せし後、その舊居を記念する爲に、花園をしつらへたものと見える。この詩は、范園に杏花を見むことを友人に約するが爲に作つたのである。

【詩意】去年、清明の節に近き頃、春色正に闌にして、幾重にも繞る煙花は、曉に城を夾むが如く、西苑の路で逢つた車馬を問へば、いづれも、春を踏んで、詔光を尋ねるといふので、まことに、賑はしいことであつた。しかし、今年は、戦亂の後の事とて、去年春を尋ねた道も、何處とも分からず、人を迷はしめ、風雨來らざるに、花は自ら掃ひ去つて、殘つて居るものもなく、僧寺の庭には、何物も存せずして、半ば紫苔に埋もれ、侯家の宅は、荒れはてて、青草のみが生ひ茂つて居る。たまたま主なきに喚き出でた一株があつても、滿目沙塵の中に憔悴して、お話にも成らぬ位。野外、日斜

なる時、啼鳥早く散じ、到る處、蕭寂の極、愁を消さうとしても、その處なく、却つて、消魂する位。ここに范文正公のしつらへた園林は、隣の下に在つて、相變らず、紅杏が見ごろであつて、その花の枝を把つて眺めるに堪へたるばかりだといふ話。されば、亂後花を見るべき處が少いとも云へないが、今日花前に至つて、春を賞するを得る人が少いのである。そこで、明日は君を尋ねて、一處に花を見に往かうと思ふが、願はくは、君よ、約束を違へぬ様にして呉れろ、さうすれば、ともに游蝶の跡を追うて、熙熙たる晴日を弄することも出来やう。門を閉ぢて蟄居し、江南の日暮、おもひ寝の夢の醒めた時、迢迢としてしづ心なく春の歸り去るは、まことに見るに忍びず、それよりも、折角かういふ處があるのだから、是非出かけたいと思ふのである。

【餘論】起首、去年と今年とを兩解に分説し、戰後の慘澹たるを云うて、徐に范園を引き出し、悠悠追らざる筆致は、極めて面白く、野外日斜の二句、休言亂後の二句は、ともに、讀者の心魂を動盪せしめる。

南州野人、爲吳邑曾令賦

南州野人、吳邑曾令の爲に賦す

南州沃壤惟泥塗。南州の沃壤、惟れ泥塗、

清泉流渠歲不枯。清泉は渠に流れて歲ごとに枯れず。

州、沃壤惟泥塗」とある。【二】流渠、溝渠の中を流れる。【三】若人、かくの如き人、即ち斯人の號。

【四】抱耒、耒は鋤。【五】斬水、人を指す。【六】沃壤、肥沃なる土。

【七】泥塗、書經の禹貢に「荆

若人抱耒斬水上。若人耒を抱く斬水の上、

始志自比躬耕徒。はじめ志して、自ら比す躬耕の徒。

幸逢堯舜可在野。幸に堯舜に逢うて、野に在るべけむや、

起紹墨綬來東吳。起つて墨綬を継して、東吳に來る。

一鞭不驅雨後犢。一鞭、驅らず雨後の犢、

兩鳥已化空中鳧。兩鳥、すでに化す空中の鳧。

郭西春朝布穀語。郭西の春朝、布穀語り、

柔桑綠雲連太湖。柔桑綠雲、太湖に連る。

下車殷勤告父老。車を下つて、殷勤、父老に告ぐ、

勸耕爲汝犁先扶。耕を勧めて、汝の爲に、犁、先づ扶く。

我本野人偶叨祿。われ本と野人、偶ま祿を叨りにす、

向汝未忍施蒲鞭。汝に向つて、未だ蒲鞭を施すに忍びず。

五風十雨和氣應。五風十雨、和氣應す、

勿遣寸土生蒿蕪。寸土をして蒿蕪を生ぜしむる勿れ。

太平村落雞犬靜。太平の村落、雞犬靜に、

社飲自足歡妻孥。社飲、自ら妻孥を歡ばすに足れり。

但當相率了官務。但だ當に相率ゐて、官務を了すべく、

莫勞縣吏來催租。縣吏を勞して、來つて租を催さしむる、

民言此令善教我。民は言ふ、この令、善く我に教ふと、

斗酒相壽歌嗚嗚。斗酒相壽して、歌嗚嗚たり。

共問野人竟誰是。ともに問ふ、野人竟に誰か是れる、

堂中鳴琴賢大夫。堂中琴を鳴らす賢大夫。

【一】五風十雨。王充の論衡に「太平の世、五日に一風、十日に一雨」とある。

【二】蒿蕪。雜草をいふ。【三】社飲。社は土地の神で、村の鎮守に成つて居る。春秋に祭を爲し、その時、老少相集まつて會飲する。

【四】催租。租税の催促をする。【五】堂中鳴琴。前に次に鶴鳴孟早春見寄の詩中、琴堂の項に引いたが、孔子の弟子の宓子賤が單父の宰となり、琴を鳴らして堂を下らす、そ

れで、單父が善く治まつたといふことを用ひたのである。

【題義】姑蘇志に「曾勦は、斬州の人、洪武五年任す」とある。曾勦は南州野人と號せしに因り、青

邱は、その依頼に應じて、この詩を作つたのである。

【詩意】南州たる我が東吳は、地味肥沃、もと泥塗で出來て居て、溝渠の中を流れる清泉は、年を経ても、枯れざるに因り、灌溉が善く行き届いて、何を作つても善く出来る。ここに曾君は、斬水の邊に居り、鋤を抱いて、躬から耕して衣食する積りであつたが、幸にも、堯舜に比すべき聖天子の御世に逢ひ、引々込んで野に居るのは、本意でないといふので、起つて、邑宰に任せられ、墨綬を束ねて、この東吳に著任された。そこで、鞭を振つて、雨後に小牛を驅り立てることもなく、兩方の履が鳧に化して、空中を飛行したといふ古しへの王喬と同じ身分になられた。郭西の春の朝、布穀は、頻りに鳴り、桑の若芽は、綠雲の如く、遠く太湖に連つて居る。この時しも、車を下り、丁寧に古老輩に挨拶して、農耕を獎勵し、汝等の爲には、犁を手にするをも厭はぬ、われは、元と野人、偶然にも、俸祿を頂戴したものであつて、汝に向つては、蒲鞭をだに施すに忍びない、どうか、その積りで、いづれも業務を怠らぬ様にして呉れろといはれた。刻下太平の世に際し、五日に一風、十日に一雨といふ様長閑にして、雞犬の聲、静に聞こえ、社日の會飲は、殊に賑はしく、妻子眷屬まで、歎んで居る。期に、陰陽相調ひ、和氣これに應じて居るから、寸土にも雜草を生じさせてはならぬ。隨處の村落は、
さてはならぬ。管内の人民は、曾君の徳を稱讃し、この縣令は、まことに善く自分達に教へて呉れた

して之を何はしむ。雙魚あり、東南より飛び来る、網を擧げて、これを張り、鳧を得れば、乃ち鳧ふところの曾布穀鳥の名。春、この鳥が鳴けば、初めて穀の種を下すといふ處から名づけた。鳴鳩、和名ふとり。【三】書官屬の履なり」とある。【四】布穀、鳥の名。春、この鳥が鳴けば、新に芽を出した桑の樹。【五】革先扶、第一に、革を手にする。【六】施蒲鞭、後漢書劉寔傳に「三郡に典歷す、溫仁多恕、吏人過あるも、但だ蒲鞭を用ひて、辱を示すのみ」とある。蒲の鞭を聚めて造つた鞭で、敲かれても痛くない。

より飛び来る、網を擧げて、これを張り、鳧を得れば、乃ち鳧ふところの曾

魚あり。【七】施蒲鞭、後漢書劉寔傳に「三郡に典歷す、溫仁多恕、吏人過あるも、但だ蒲鞭を用ひて、辱を示すのみ」とある。蒲の鞭を聚めて造つた鞭で、敲かれても痛くない。

より飛び来る、網を擧げて、これを張り、鳧を得れば、乃ち鳧ふところの曾

魚あり。【七】施蒲鞭、後漢書劉寔傳に「三郡に典歷す、溫仁多恕、吏人過あるも、但だ蒲鞭を用ひて、辱を示すのみ」とある。蒲の鞭を聚めて造つた鞭で、敲かれても痛くない。

といひ、斗酒を傾けて、その多幸ならむことを祝し、はては、嗚鳴として、濁聲に歌を唱へて居る。して見れば、野人と名乗るは誰か、堂中に琴を鳴らして、かの宓子賤の如く、その領内を善く治めた賢大夫で、即ち我が曾君である。

【餘論】 曾令の出身より、東吳に邑宰となり、殊に農を勧めた事蹟を敍し、措辭は平正ではあるが、遺憾なく、その衷情に立ち入つて、詳しく述べて居る。郭西春朝の二句は、村舍の光景を観るが如く、太平村落雞犬靜の四句は、宛然たる模範村の實況で、一誦、その快を覺えしめる。

欲訪李孝廉至婁江遇風而回

李孝廉を訪はむと欲して婁江に至り、風に遇ひて回る

船頭曉日浮江面。 船頭の曉日、江面に浮び、

東望青山是婁縣。 東、青山を望む、是れ婁縣。

尋君此去愛潮平。 君を尋ねむとし、此を去つて潮の平かなるを愛す。

出浦那知風色變。 浦を出でて、那ぞ知らむ風色の變するを。

煙雲翕忽波浪湧。 煙雲翕忽として波浪湧き、

【字解】 〔一〕風色 風模様。

〔二〕翕忽 急なる貌。

咫尺漁村已難見。 咫尺漁村、すでに見難し。

高樹巢傾鶴鵠愁。 高樹巢傾いて鶴鵠愁へ、

深潭窟陟鼉龍戰。 深潭窟陟つて、鼉龍戰ふ。

舟師捩柁苦無力。 舟師柁を捩つて力なきに苦む、

帆勢如蓬幾飄轉。 帆勢蓬の如く、幾たびか飄轉。

中流不進却歸來。 中流進まず、却つて歸り来る、

握手何由遂初願。 手を握つて、何に由つて初願を遂げむ。

人生會合應有時。 人生の會合、應に時あるべし、

天意茫茫吾敢怨。 天意茫茫、吾、敢て怨まむや。

【題義】 説明を要せぬ。但し李孝廉の名字閱歷は不詳。

【詩意】 船頭にさし上つた朝日の影は、江面に浮び、東望すれば、婁縣の青山が見える。この時、予は、君を尋ねむが爲に、潮の平かなるに乗り出し、先づ善い安排だと思つて居た處が、入江を離れると、風模様の變じたのは、全く豫想外であつた。かくて、雲煙は急に飛び移り、波浪は水心に湧き、咫

尺の處に在る漁村だに最早見え難くなり、高い木の頂なる巣は傾いて、落ちさうなので、鶴鶴頻りに愁へ叫び、深潭の底なる穴から這ひ出して、大龜と龍とは、戰を爲すを疑ふばかり。そこで、舟人は、あわてて、舵をひねつて方向を轉せびとしたが、何分、力が足らないので、思ふ様に成らず、帆は蓬の穂の如く軽く、幾たびも飄轉した。止むなく、中流にも達せずして、空しく引きかへし、君と手を握るといふ初志を遂げなかつたのは、まことに殘念至極。但し、人生の會合は、自然その時があるから、天意茫茫、料り知り難しとも、吾は、決して怨むことはない。

【餘論】 實際の出来事を詠出したのであるが、平淺凡近に失して、あんまり面白いとも思はない。

寒夜泛湖至東舍

寒夜、湖に泛んで東舍に至る

漁村港頭初月上。
漁村港頭、初月上り。
驚鴻不收菰荻響。
驚鴻收めずして、菰荻響く。
隔湖煙寺遠鐘來。
湖を隔つる煙寺、遠鐘來り、
居人盡歸吾獨往。
居人盡く歸つて、吾、ひとり往く。
寒風蕭蕭寒浪生。
寒風蕭蕭として寒浪生じ、

【字解】 一 港頭 港は入江。
二 初月 三日月の如き類き月。

舟中欠載酒壺行。
舟中、酒壺を載せて行くことを欠く。
東家未宿如相待。
東家未だ宿せず、相待つが如し、
黃葉青燈機杼鳴。
黃葉青燈、機杼鳴る。

【題義】

説明を要せぬ。但し、東舍は湖東に在る別宅であらう。

【詩意】 漁村の入江には、細い三日月が上り、家鴨などは、その儘、取り收めず、眞菰や荻の葉は、菰菰として、響いて居る。湖水の對岸には、煙の中に寺があつて、鐘聲は遙遠として聞こえ、居人は、盡く其家に歸つて仕舞つたが、われのみは、この時しも、獨りで出かけたのである。湖上には、寒風蕭蕭として寒浪を生じ、船中に酒壺を載せて來なかつたのは、まことに手ぬかりで、後悔しても追付かない。わが東家の者は、この時、まだ睡らず、さながら、われを待つて居ると見えて、黄葉深き處、燈火一穗青く、機織る杼の音が、ありありと聞こえる。

【餘論】 この詩は、敍景の小品として、聊か面白いが、未宿の二字は穩妥を缺いて居るし、夜だのに黄葉といふ様な色部の字を點出したのは、どうも、ふさはしくない。

京師午日、有懷彥正幼文

京師午日、彥正・幼文を懷ふあり

去年歸鄉過重午。去年、鄉に歸つて重午を過ぐ、

柳雨莎風滿南浦。柳雨莎風、南浦に満つ。

白蓮閣上與君吟。白蓮閣上、君と吟じ、

遙憶徐君隔淮楚。遙に憶ふ、徐君の淮楚を隔つるを。

今年風雨又端陽。今年風雨、又端陽、

却在秦淮憶故鄉。却つて、秦淮に在つて、故郷を憶ふ。

徐君已歸若相見。徐君、すでに歸つて、もし相見なば、

應言前事一淒涼。應に前事を言うて、一に淒涼たるべし。

客愁欲斷翻長笑。客愁、断えむと欲して、翻つて長笑。

人事推遷古難料。人事の推遷、古しへ料り難し。

明年未省又何之。明年、未だ省みず、又何にかく、

一杯且聽江南調。一杯且らく聽かむ、江南の調。

【字解】
〔一〕重午 午は五と音通。重五と同じく、即ち五月五日。

〔二〕莎風 莎は溼地に生する草。

〔三〕白蓮閣 金糧注には之を缺いて居るが、白蓮寺の高閣で、蘇州に在り、前にも見えて居た。

〔四〕淮楚 即淮は淮水附近の地。〔五〕端陽 即端午。〔六〕秦淮 菊陽秋に「秦淮の始皇、東游す。望氣の者云ふ、五百年後、金陵に天子の氣あらむ」と。

ここに於て、始皇、方山に於て流を掘り、西江に入る、俗、號して秦淮といふ」とある。この時、青邱は、南京に居た故に云ふ。〔七〕未省 未だ知らずといふ義。

【題註】この詩は、洪武二年五月五日、南京に居て、彥正・幼文の二友を寄懷したのである。彥正是、姓は杜、名は分からぬ。そして、幼文は、徐貞の字である。
 【詩意】去年は、郷里に歸つて居て、端午に遇ひ、南浦の風雨、柳を吹き、莎草を満す時しも、彥正、君と共に、白蓮閣に上つて高吟し、はるかに、徐君が淮楚を隔てて遠地に客たるを憶うて、情に勝へられなかつた。今年の端午も、又ぞろ風雨、われは、南京の片ほとりなる秦淮に居て、故郷を憶つて居る。もし、徐君が旅から歸つて来て、彥正君に遇つたらば、彥正君は、去年の今日の事を言ひ出して、淒涼の想に堪へぬことであらう。われは、わづかに客愁を拂ひのけて、翻つて長笑するので、人事の推遷は、古しへより料り知られぬものとしてある。明日の今日は、又しても何處に往つて居るか、もとより豫察することが出来ず、何は兎もあれ、一杯を傾けて、しばらく、江南の調子の歌でも聞く外はない。

【餘論】今昔を低徊して、聊か情緒の纏綿たるを覺えるが、落想も陳套であるし、措辭も淺近であつて、これでは、小家數の作に過ぎぬといはれても仕方がない。

鷗捕魚

鷗い魚を捕る

秋江水冷無人渡。秋江、水冷かにして人の渡るなく、

〔八〕【字解】
〔九〕街得 口にくはへ

羣鷗忍飢愁日暮。

羣鷗、飢を忍んで日暮を愁ふ。

白頭來往似漁翁。

白頭來往して、漁翁に似たり。

心思捕魚江水中。

心に思ふ、魚を江水の中に捕へむことを。

眼明見魚深出水。

眼明かに、魚の深く水を出づるを見、

復恐魚驚隱蘆葦。

復た恐る、魚の驚いて蘆葦に隠るるを。

須臾銜得上平沙。

須臾にして銜み得て、平沙に上り、

鱗蠶半呑猶見尾。

鱗蠶半ば呑んで、猶ほ尾を見る。

江魚食盡身不肥。

江魚食ひ盡すも、身肥えず、

平生求飽苦多饑。

平生飽くことを求めて、饑多きに苦む。

却猜人少忘機者。

却つて、人に忘機の者少きを猜み、

海上相逢不飛下。

海上相逢うて飛び下らざるを。

【釋義】 説明に及ばぬ。

【詩意】

秋江の水冷かに満ち溝へて、人の渡るものなく、羣る鷗どもは、飢を忍んで、日暮になりか

かり、白頭にして往来する様は、漁翁の如く、心中では、どうかして、魚を江水の中に捕へたいと思つて居る。魚が深い水底から出て来ると、鷗は、目敏くも、直に之を認めるが、魚が驚いて、蘆間に隠れることを氣遣つて、あくまで、落ち附いて、覗つて居る。しばらくして、愈よ魚を口にくはへると、岸邊の平沙に上り、鱗や鰐のある胴體を半ば呑み込んだが、尾だけは、まだ口の外にはみ出して居る。鷗にして、江中の魚を食ひ盡すとも、決して、その身は、肥えないので、その性、あくまで貪慾、飽くことを求めて、その爲に飢ゑ通しである。その癖、人に忘機の者少きを忌み嫌うて、海上で逢つても、故らに高く飛んで、なかなか下りて來ないのは、如何したものか。

【餘論】 結二句は、全篇趣旨の在るところで、畫龍點睛の妙があるが、その前の十句は、相變らず平常である。

泉州兩義士歌

泉州兩義士の歌

泉州兩士陳與孫。泉州の兩士、陳と孫と、

少小相約爲弟昆。少小相約して弟昆となる。

合疏成戚契誼重。

疏を合して戚と成し、契誼重く、

【字解】 〔一〕 泉南 泉州の南。
〔二〕 陳與孫 陳寶生と孫天富、その
詳は題義の條を見よ。〔三〕 弟昆
弟兄に同じ。〔四〕 合疏成戚 疏遠

異木縛結如同根。

異木縛結して、同根の如し。

升堂握手出肺腑。

堂に升り、手を握つて、肺腑を出し、

交拜二母開轡樽。

交も二母を拜して、轡樽を開く。

具舟期賈海外域。

舟を具へ、賈を期す、海外の域、

欲度夷僰窮崑崙。

夷僰を度つて崑崙を窮めむと欲す。

滄溟東望浸天爛。

滄溟、東に望めば、天を浸して爛たり、

颶風怒攬波濤渾。

颶風、怒つて波濤を攬して渾る。

天吳恍惚出怖客。

天吳恍惚、出でて客を怖れしめ、

掀舞鮫鰐飛鵬鷗。

鮫鰐を掀舞して、鵬鷗を飛ばす。

孫言陳宗惟子在。

孫は言ふ、陳宗、惟子のみあり、

遠涉巨險吾宜奔。

遠く巨險を涉るは、吾、宜しく奔るべし。

汝親頭白倚門切。

汝の親、頭白く、門に倚ること切、

慎勿輕去違晨昏。

慎んで軽しく去つて晨昏に違ふ勿れと。

相讓不得乃更往。

相讓つて得ず、乃ち更る柱く、

挂席遙指扶桑暾。

席をかけて、遙に指す扶桑の暾。

望山行覓島中國。

山を望んで行く、覓む、島中の國、

卉服通譯侏離言。

卉服通譯す侏離の言。

尋煙暮投薜荔屋。

煙を尋ねて暮に投す薜荔の屋、

趁墟晝集桄榔村。

墟を趁うて晝は集まる桄榔の村。

踰年還家喜得寶。

年を踰えて家に還り、寶を得たるを喜ぶ、

木難火齊卉瑞琨。

木難火齊、并せて瑞琨。

探囊用取兩不較。

囊を探つて用取し、兩つながら較べず、

屑屑彼我誰復論。

屑屑として、彼我、誰か復た論せむ。

急難相援誓終始。

急難相援けて終始を誓ひ、

歲時燕慶烹羔豚。

歲時、燕慶、羔豚を烹る。

義風久已動殊俗。

義風久しく、すでに、殊俗を動かす、

歌は朝日、日は扶桑より出てて成池に没する。【二】 卉服 書經に、「鳥夷卉服」とあり、拾遺記に「庶扶國、草を給んで衣と爲す、これを卉服といふ」とある。【三】 侏離 片ことで言語が分からぬ、後漢書南蠻傳に「衣裳疎陋、語言侏離」とある。【四】 薜荔屋 風原の難穀に貢三薜荔之薜荔」とあつて、その注に「香草なり」とあるが、ここでは、薜は蘿、葛は葛絃、柳宗元の詩に薜雨斜侵薜荔牆とあるに同じ。【五】 越縛 南部新書に「端州以南、三日一市、これを越縛といふ」とある。【六】 桄榔 くるつけ、皮に毛があつて棕櫚に似たる一種の木。材質甚だ柔、皮中に鷄の如き層末があつて食べられる。後漢書夜郎傳に「匂町に桄榔木あり、鷄と爲すべし、百姓

椎髻相見知欽尊。

椎髻相見て欽尊を知る。

我聞同氣有爭利。

われ聞く、同氣も利を争ふあり、

閨牆往往墮家門。

牆に聞いて、往往、家門を隳ると。

又看結交許歲晚。

又看る、結交、歲晚を許し、

盟盤未撤渝情恩。

盟盤未だ撤せずして、情恩を渝ふ。

管鮑居貧乃共濟。

管鮑貧に居て、乃ち共に濟ひ、

餘耳得勢終相呑。

餘耳、勢を得て、終に相呑む。

若茲二子古亦少。

この二子の若きは、古しへ亦た少く、

簡牘可使他年存。

簡牘、他年に存せしむべし。

作歌爲繼王子傳。

歌を作つて爲に繼ぐ王子の傳、

薄俗視此應堪敦。

薄俗、これを視て、應に敦ぐするに堪

「ふるなるべし。」

地の異なりたる風俗。

【三】椎髻。

椎は鐵椎の椎、即ちさい鉗。髻を束ねて椎の形にする。さいづちまげ。王充論衡に「趙王趙佗、

南夷の俗に化し、椎髻算坐、これを好むこと、性の若し、陸賈の說を聞くに及びて、椎髻算坐、これを惡むこと、性の若し、亦た教に在

とある。【三】同氣。

兄弟情に關ぐ、内輪喧譁をする。【三】閨家門。

趨はやぶる。【三】許歲晚。

しまひまで墮らぬ。【三】盟盤未撤。

盟を爲す時に散る血を盛った盤を取り退けざる間、周禮天官玉府に「もし、諸侯を

合すれば、珠槃玉敦を共にする」とある。【三】管鮑。

史記管晏列傳に「管仲曰く、晉、はじめ困む時、かつて鮑叔と賣し、財利を分

ち、多く自ら與ふ、鮑叔、我を以て貪れりと爲さず、我が貧を知ればなり」とある。【三】餘耳。

陳餘と張耳。史記張良陳餘列傳に「餘、年少にして耳に父事し、兩人相與に刎頸の交を爲す。後相怨む。陳餘及び齊王田榮、楚に畔いて常山を襲ふ、張耳、敗れて

漢に走る。漢の二年、東、楚を擊たむとし、使をして趙に告げしめ、與に俱にせむと欲す。陳餘曰く、張耳を殺さば、乃ち從はむ、

と。ここに于て、漢王、人の張耳に頗するものを求めて之を斬り、その頭を持て陳餘に遺る。餘、乃ち兵を遣して漢を助く。漢の

彭城の西に敗るるや、陳餘、亦張耳の死せざるを覺り、即ち漢に背く。漢の三年、張耳を遣し、韓信と趙の井陘を擊破し、陳餘を活

水の上に斬る」とある。【三】簡牘。

文書の義。【三】王子傳。

王彝の作つた泉州兩義士傳、その全文は、題義の項に引抄する。

【三】薄俗。

情誼に薄き末世の風俗。

るなり」とある。【三】同氣。

兄弟情に關ぐ、内輪喧譁をする。【三】閨家門。

趨はやぶる。【三】許歲晚。

しまひまで墮らぬ。【三】盟盤未撤。

盟を爲す時に散る血を盛った盤を取り退けざる間、周禮天官玉府に「もし、諸侯を

合すれば、珠槃玉敦を共にする」とある。【三】管鮑。

史記管晏列傳に「管仲曰く、晉、はじめ困む時、かつて鮑叔と賣し、財利を分

ち、多く自ら與ふ、鮑叔、我を以て貪れりと爲さず、我が貧を知ればなり」とある。【三】餘耳。

陳餘と張耳。史記張良陳餘列傳に「餘、年少にして耳に父事し、兩人相與に刎頸の交を爲す。後相怨む。陳餘及び齊王田榮、楚に畔いて常山を襲ふ、張耳、敗れて

漢に走る。漢の二年、東、楚を擊たむとし、使をして趙に告げしめ、與に俱にせむと欲す。陳餘曰く、張耳を殺さば、乃ち從はむ、

と。ここに于て、漢王、人の張耳に頗するものを求めて之を斬り、その頭を持て陳餘に遺る。餘、乃ち兵を遣して漢を助く。漢の

三年、張耳を遣し、韓信と趙の井陘を擊破し、陳餘を活

水の上に斬る」とある。【三】簡牘。

文書の義。【三】王子傳。

王彝の作つた泉州兩義士傳、その全文は、題義の項に引抄する。

七言古詩

泉州兩義士傳

一〇三

の異國、高句驃より外、閩婆・羅斛と夫の東南諸夷の若き、中國を去る、無慮數十萬里。この兩人は皆異姓なり、長は兄たり、少は弟たり、同氣の如く然り。異國人、皆見て之を信じて曰く、かの兄もししくは弟、同胞の者に非す、吾が同胞、宜しく如何にすべき、と。異國、因つて、この兩人を號するものあり、これを譯せば泉州兩義士といふなり。中國の賢士大夫、これを聞くもの、亦た皆以て然りと爲すと云ふ。天富、字は惟義。寶生、字は彥謙。今吳の太倉に居り、方に窮を周ねくし難を援くるを以て務となす」とあつて、その本末は詳にされて居るので、青邱の詩は、純ら材を此文に取つたのである。なほ閩婆は、即ち今の瓜哇であることは、言ふまでもない。

【詩意】泉州の南に陳寶生・孫天富といふ二人があつて、少小の時より、相約して兄弟となつた。もと疏遠なるものを合せて姻戚同様にしたので、その心契交誼の重きことは、言ふにも及ばず、異木も互に纏ひ付いて結合すれば、さながら、同根より生じた様である。そこで、堂に上り、親しげに手を握り合ひ、肺肝をさらけ出して、堅く誓ひ、かはるがはる、兩家の母を拜し、その前に酒樽を開いて宴を爲した。やがて、相談した結果、舟を用意し、海外に往つて貿易を爲し、東夷南夷を度つて、崑崙と稱する南洋を窮めたいと思つて居た。ここに、東溟を望めば、積水天を浸して、爛然と見え、颶風は不時に至り、波濤を撓き亂して濁らしめ、海神の天吳は、彷彿出現して客を怖れしめ、蛟鰐も巻き上げられ、鷗鷺も吹き飛ばされる。すると、孫天富が云ふには、陳家の一族では、唯だ汝が居る

だけで、まことに大事な人である。遠く海中の險難を涉ることは、吾こそ走り行くべきである。汝の母親は、髪も白く、門に倚つて、切に汝の歸るを待つことに成らうから、注意して、軽しく去つて、晨夕定省の禮に違はぬ様にするが善からうといひ、互に譲り合つて、はてしが付かず、止むを得ず、かはるがはる出かけることになり、帆を擧げて、朝日の出るといふ扶桑の方を遙に指して拔錨した。行ききて、海上に山を望み、とある島に往つて見ると、草を纏うて居る謂はる卉服の民ばかり、言葉は侏離で分からず、通譯を借りて、やつと用を辨する位。立ちこむる煙中に尋ね入つて、暮には、蘿や荔枝の絡み付いて居る小屋に投宿し、市場が開けるといふので、晝は黒木楊の生ひ茂れる村に打集ひ、その見るところ、一として珍らしからぬものはない。航海年餘にして家に歸れば、その間に得た珍寶は、碧珠・雲母、并に美玉の類、なかなか數へ切れない。それを兩人が囊を探つて取り出し、勝手に使用して、碌碌勘定もせず、これは彼の物、我が物といつて、一一こせこせと所有權を争ふ様なことはしなかつた。急難の場合には相援けて、終始渝らず、然るべき折折には、高宴を催し、小羊や豚を烹て、大振舞をする。二人の義風は、すでに久しく殊俗の蠻夷を感動せしめ、さいづち鬚の者で、内輪喧譁をなし、往往にして、家門を敗るものもあるし、又交を結んで、しまひまでも變せぬといひつつ、盟の盤血を取り退けない内から、早くも交誼恩情を溢へて、仲違ひをするものも見

受けられる。むかし、管仲・鮑叔が貧賤の中に居つて、互に助け合つたのは、まことに頼母しいが、張耳・陳餘は、一朝勢を得ると、互に併呑せむとして敵視する様に成つて仕舞つた。それから見ると、孫陳二子の如きは、むかしでも、その例、極めて少く、宜しく、文書に載せて、後年に傳ふべきものである。そこで、予は、歌を作つて、王彝の作った本傳に繼いだので、刻下澆季の世の人が之を視たならば、少しは薄俗を教くすることも出来やうと思つたからである。

【餘論】 この詩は、専ら王彝の本傳を沿襲し、その兩兩相俟つべきは、長恨歌の歌傳に於けると一般、青邱は成るべく、事實を詩化せむと企てたが、唯だ局部に止まり、全然、異なる結構を試むるに及ばなかつた。我聞以下の十句は、論贊的に加へたものであるが、これとても、平正穩健といふだけで、到底、道學者流の口吻を免れぬ様である。

姚烈婦

姚烈婦

城頭黑雲如壞屋。城頭の黒雲、壞屋の如く、
車走爭門折千軸。車走つて、門を争ひ、千軸を折る。
姚家新婦亦東逃。姚家の新婦、亦た東に逃れ、

【字解】 〔一〕 黑雲如壞屋 文獻
通考の象徴に「雲氣或は雲、闕垣の如く、壞屋の如きは、皆敗軍の氣たり」とある。〔二〕 折千軸 史記田

舅姑驚惶兒女嘆。舅姑は驚惶して兒女は嘆ぶ。
自知數口難俱免。自ら知る、數口ともに免れ難きを、
欲渡前溪舟尙遠。前溪を渡らむと欲するも、舟尙ほ遠し。
囑夫棄妾當奉親。夫に囑す、妾を棄てて當に親を奉すべ
獨赴清流不愛身。獨り清流に赴いて身を愛ます。「しと、
此日誰能問南史。この日誰か能く南史に問はむ、
如婦曾書幾人死。婦の如き、かつて書して幾人か死す。

して曰く、崔杼その君を弑すと。崔子これを殺す。その弟、嗣いで書す。而して、死するもの二人。その弟又書す。乃ち之を舍るす、南史氏、太史の寧く死せしな聞き、簡を執つて往く。すでに書したり、乃ち還る」とある。

【題義】 姚烈婦、一に節婦吟に作り、元末騷亂の際の一事實を詠出したのである。
【詩意】 城頭の黒雲は、壞れた家屋の様な形をして、まさしく敗軍の兆である。果然、城陥り、城中の人民は、先を争つて逃げ出しが、轍の車は城門につかへ、軸を折つて、進退ここに谷より、やがて、虜に成つたものは、何千人といふ位。姚家の新婦も、亦た東の方に逃げ出しが、舅姑は驚き惶て、兒女は泣き叫び、それが足手まといに成つて、思ふ様に逃げられない。新婦は、數人の家族が打

捕つて難を免れるることは、到底六つかしいと思ひ、殊に溪水の邊に行くと、舟は遠く前岸に在つて、なかなか此方に寄つて來ない。そこで、夫に依囑し、妾を棄てて、無事に舅姑の御伴をしなさいといつて、ひとり清流に投じて死し、決して、その身を惜まなかつた。かうなると、丁度、賊が節婦を殺したのも同然、史官は、屹度さう書いたであらうが、その爲に、賊に殺された史官は、幾人あつたらう。誰か、その事を跡からかけつけた南史に問ふであらうか。何にせよ、賊は、隨分ひどい事をしたものである。

【餘論】敍事は簡明精到、流石に練熟したものである。結末、南史を引いたのは、一寸面白いが、迂闊にして事情に遠いといふ譏を免れぬことと思ふ。

立秋前三日過周南飲雷雨大作醉後走筆書壁間

立秋前三日、周南を過ぎて飲む、雷雨大に作る、醉後、筆を走らせて壁間に書す。
周郎乃是同鄉友。周郎、乃ち是れ同鄉の友、
亂後相逢驚老醜。亂後相逢うて老醜に驚く。
日斜邀我話舊游。日斜に、我を邀へて、舊游を話し、

【字解】

【一】周郎 即ち周南。
【二】老醜 ふけて醜くなつた。杜甫の詩に、豈惟長年兒童、自覺成老醜」とある。【三】白門 即ち白下、前に

爲喚金陵白門酒。爲に喚ぶ金陵白門の酒。

一杯乍解羈旅顏。一杯乍ち解く羈旅の顔、

兩杯漸沃黏吟口。兩杯漸く沃いで吟口に黏す。

三杯不覺已陶然。三杯覺えず、すでに陶然たるを、

此身竟到無何有。この身、竟に到る無何有。

青天俄忽震霹靂。青天俄忽、霹靂を震ひ、

白浪翻江怒蛟吼。白浪、江を翻して怒蛟吼ゆ。

急雨爭鳴池上荷。急雨、争つて鳴る池上の荷、

狂風已折門前柳。狂風、すでに折る門前の柳、

醉中相對正坐忘。醉中相對して正に坐忘、

匕箸何須驚落手。匕箸、何ぞ須ひむ、驚いて手より落すを。

家人喧呼水入戸。家人喧呼す、戸に入ると、

顛倒屋茅隨地走。顛倒屋茅、地に隨つて走る。

卷九、送三王季廉の詩中、白門酒香還可レ詮の條に解して置いた。【一】黏。

吟口。詩を吟する口に粘ばり付く。

【五】無何有。莊子に「今、子、大樹あり、何ぞ、之を無何有の鄉、廣莫の野に樹てざる」とある。【六】震。霹靂。雷が鳴り出す。【七】坐忘。莊子に「顛回曰く、罔、坐忘せり。

仲尼曰く、何をか坐忘と爲す。回曰く、身體を墮し、聰明を翳け、形を離れ、知を去り、大過に同す、これを坐忘といふ」とある。【八】匕箸。蜀志先主傳に「曹公、從容として先生に謂つて曰く、今、天下の英雄、惟だ使君と操とのみと。先生、方に食して匕箸を失ふ」とあり、華陽國志に「時に正に雷の震ふに當る、備因つて操に謂つて曰く、聖人云ふ、迅雷風烈必ず避す、と。良に以ある

牀牀避漏且莫歎。

牀牀漏を避けて、且つ歎する莫れ。

旱氣方除賀田叟。

旱氣、方に除いて田叟を賀す。

尊收預到三日前。

尊收預め到る三日の前、

淨掃炎氣去如帚。

炎氣を淨掃し去つて帚の如し。

黃昏泥潦歸未得。

黃昏泥潦、歸ること未だ得ず、

呼燭相留臥東牖。

燭を呼んで、相留まつて東牖に臥す。

夜深酒醒起獨行。

夜は深く、酒醒め、起つて獨り行く、

雲散城頭見星斗。

雲は散じて城頭に星斗を見る。

乃知天變只須臾。

乃ち知る、天變只だ須臾、

人在艱難豈云久。

人は艱難に在るも、豈に久しうと云はむや。

【題義】説明に及ばぬ。周南は、列朝詩集中に「字は正道、吳郡の人」とある。そして、この詩は、青邱が在京中に作つたのである。

【詩意】周南は、我が同郷の友であるが、亂後、偶然この地に逢ふと、その老けて容貌の醜くなつた

のに驚くばかり、隨分、苦勞をしたことと思はれる。周南は、ある時、日斜なる頃、われを招いて、往年の游跡を話せむとし、名だたる金陵白門の酒を振舞はれた。その酒は、一杯飲むと、忽ち總旅の苦を忘れて笑顔を爲し、二杯飲むと、次第に廻つて來て、詩を吟ずる口に粘ぱりつき、三杯飲むと、いつしか陶然として、この身は、遂に無何有の郷に入つて仕舞ふ。兎角する内に、今まで晴れて居た天には、俄に雷が鳴り出し、白浪は江を翻し、怒れる蛟龍は、高く叫び、急雨は、争つて池上の蓮葉を打ち鳴らし、狂風は、既に門前なる柳をへし折つて仕舞つた。しかし、われは、醉中、坐忘の域に入つて居たから、この景に對しても、何とも思はず、又、驚いて匕や箸を取り落すことも無かつた。すると、周氏の家人どもは、喧しく呼ばはつて、街上に水が溢れて、戸口に押し寄せたといひ、ころげ落ちた屋の茅は、地に隨つて走つて居た。牀の上に雨もりがするから、それを避けねばならぬといつて、歎息するに及ばぬ。この風雨の御蔭で、旱の氣分は、どうやら除き去られて、百姓どもは、大に喜んで居る。雨後は、極めて涼しく、立秋の前三日といふのに、尊收の神は、遅早く、御出になり、炎熱の氣を掃つて、さながら箒で塵埃を拂ひ去る様である。やがて、黃昏になつても、污水が街路に満ち、とても歸れぬ處から、燈火を呼んで、東の窓の下に泊めて貰ふことにした。夜深き頃、酒が醒めた儘、身を起して、ひとりで出かけて見ると、城頭雲散じ、星斗の光は爛然として見える。すると、さしもの天變も、全く須臾の間で、人は艱難に出遇つても、決して長くはないといふことが分

なり、一震の感、乃ち此に至る」とある。【一】題倒屋茅、ころげ落ちて來た屋根の茅、杜甫の茅屋爲秋風所破歌に、八月秋高風怒號、卷我屋上三重茅」とある。【二】牀牀避漏は屋漏、即ち雨もり、前に引いた杜甫の歌の中に牀牀屋漏無乾處、雨脚如麻未斷絕」とある。【三】泥潦は雨後の出水。【四】東牖牖は窓。

かつた。

【餘論】 例の筆法で、かなり細かに敍述してある。篇中、牀牀避漏且莫歎の四句は、稍や新警で面白い。

送張倅之雲間

張倅の雲間に之くを送る

鱸鄉亭前楓葉稀。讀書堆下征雁飛。
孤城迢遞秋色裏。作官自好休思歸。
扁舟晚待潮東去。琴鶴由來是家具。
別意方留江上杯。離心已挂雲間樹。
讀書堆下、征雁飛ぶ。
孤城迢遞、秋色の裏、
官と作るは自ら好し、歸るを思ふを休
扁舟、晩に潮の東に去るを待つ。
琴鶴、由來これ家具。
別意、方に留む江上の杯。
離心、すでに挂る雲間の樹。

「めよ。

【字解】 〔一〕 鱸鄉亭・姑蘇志に
「亭は吳江に在り、宋の熙寧中、林
奉建つ。蓋し、陳璫、秋風斜日鱸魚鄉
の句に取る」とある。〔二〕 讀書堆
松江府志に「亭林寶雲寺の後に在り、
即ち顧野王の奥地志を整する處」と
ある。〔三〕 琴鶴・宋史趙抃傳に、
「抃彈劾して、權幸を避けず、京師、
鐵面御史と號す。蜀に帥たり、一琴
一鶴を以て自ら隨ふ。その再任する
や、琴鶴を屏去し、止だ一若頭執事の

如此風流一使君

かくの如きの風流、一使君、
文章政事更何云。文章政事、更に何をか云はむ。

絕憐退食兼榮養

絶えて憐む、退食の榮養を兼ねるを、
不向山頭望白雲。山頭に向つて白雲を望ます。

「井州法曹參軍を授けらる。親、河陽に在り。仁傑、太行山に登り、反顧して白雲の孤飛するを見、左右に謂つて曰く、わが親、そ

の下に舍すと。瞻悵、これに久しうす。霽移り、乃ち去るを得たり」とある。

【題義】

張倅の倅は、說文に「副なり。今、郡倅、半刺と稱するは、猶ほ半刺史の職のごときなり」とあつて、太守の副、今ていへば、縣の事務官の様なものであらう。雲間は華亭附近。この詩は、張

某が州倅として、松江に赴任するのを送つたのである。

〔詩意〕 君の往かれる松江には、鱸鄉亭があつて、頃しも秋の末、亭前の紅葉も、残り少なになり、
讀書堆の邊には、征雁が北から飛んで来る。孤城は、遙に秋色の中に入見え、その景色、得もいはれずして、むかし、張翰が忘れ兼ねた故郷たるに負かす。君にして、この地方に赴任するのは、まことに結構な事で、ここを去つて、歸りたいと思ふこともあるまい。君は、扁舟を用意し、晩の潮の東に向ふを待つて、漕ぎ出さうとして居られるが、そこに積み載せたのは、唯だ琴と鶴とだけで、これが即ち

君の家具である。別れの愁は、江上の杯に残れども、ここを離れ行く旅の心は、名にしおふ雲間の樹に挂つて、早く其地に往きたいと思つて居られる。君は、かくの如き風流漢であつて、文章政事の向向は、今更いふまでもない。それから、親御達も同行せられて、退食家居、十分に孝養を盡すことの出来るのは、まことに結構なことで、かの狄仁傑の如く、山頭に立つて、白雲を望まなくとも宜しいであらう。

【餘論】この詩は、大體素直に出来て居て、名作では無いが、先づ穩當といふべく、狄仁傑の故事を翻用した處も、流石に、巧慧の手段である。

送王孝廉游京歸錢塘

江南草長蝴蝶飛。玉缸碧酒流春輝。
相逢上客同買醉。白馬新自燕山歸。
燕山歸來不堪說。王孝廉の京に遊びて錢塘に歸るを送る

【字解】
 〔一〕玉缸 立派な酒瓶。
 〔二〕上客 貴成名門に賓客たる人、王孝廉を指す。
 〔三〕燕山 一統志に「順天府、宋に燕山といふ」とある、今の北平。
 〔四〕薊門 薄州の入口。
 〔五〕朝邸 宮宅。
 〔六〕不留東閣觀奇士 帝闈宮門。
 〔七〕不留東閣觀奇士

易水寒風蘆門雪

易水の寒風、蘆門の雪。

朝邸空隨使者車。帝闈不受書生謁。
笳聲杳渺歌苦辛。短衣笑拂京華塵。
不留東閣觀奇士。還覓西湖別故人。
荒臺遺址今已平。此行莫嘆知音寡。
曾到黃金舊臺下。更有何人致賢者。

漢書朱雲傳に「薛宣、丞相となる、雪、往いて之を見、因つて留宿す。謂つて曰く、田野無事、しばらく我が東閣に留まって、以て四方の奇士を観るべし。雪曰く、小生、迺ち相吏を欲するか、と。宣、復た敢て言はず」とある。〔八〕覓西湖 西湖を尋ねる。〔九〕故人 青邱が自ら稱したのであらう。〔一〇〕黃金舊臺 燕の昭王が、郭隗に聽き、千金を置いて賢者を招延した事。

【題註】王孝廉の姓字閱歷は不詳、この人は、元末に上京したが、意を得ず、南に旋つて、蘇州に滞留し、これから、西湖を経て錢塘に歸るといふに就いて、青邱が賦して、その行を送つたのである。

【詩意】 江南は、芳草長じて蝴蝶亂れ飛ぶ二月の頃、玉缸に満へたる碧酒は、さながら、春光を流すが如くである。この時、諸侯の上客たる王孝廉に逢ひ、ともに酔を買つたが、聞けば、君は白馬に乘じ、つい近頃、燕山の都から歸つたといふことである。折角燕山から歸つて來たが、今度の旅行は、全く御話にも成らぬ事ばかりだといふので、易水の寒風、薊門の積雪、第一時候も悪かつたが、むなし、使者の車に隨つて上京せし後、官邸に投宿し、天子は、直直に書生の拜謁を受けられぬ故に、志はあるながら、これを陳べることが出来ない。胡笳の聲の杳渺たるに和して、おのが歌も、あくまで辛苦し、とても慰め難き程であつたが、愈よ思ひ詠め、短衣に點じたる都の塵を拂つて、歸途に就かれた。されば、東閣に留まつて、四方の奇士を觀るに及ばず、これから、西湖の好景を尋ねむが爲に、予に別れて杭州に赴かれる。この行、知音の者に碌碌遇はなかつたといつて嘆息せずもあれ、むかしの黄金臺に往つて見たのは、せめてもの心遣りである。しかし、その黄金臺の遺址は、荒れはてて、すつかり平になつて仕舞ひ、昭王一たび去りし後、更に誰が賢者を招致するか。末俗の今日、才藝の士の容れられぬのは、必然の事で、どうにも仕方がない。

【餘論】 通篇、骯髒不平の氣を以て満たされ、王孝廉の爲に憤慨するのは、取りも直さず、我が不遇を嘆嗟したので、謂はゆる他人の酒杯を借りて、自己の磊塊に澆いだのである。

賦錢散人江村二題 錢散人の江村二題を賦す

釣雪灘

釣雪灘

江流欲漸魚不起。江流漸せむと欲して、魚起たず。

蓑猶釣寒蘆裏。一蓑猶ほ釣る寒蘆の裏。

漁村茫茫煙火微。漁村茫茫として煙火微なり。

雪滿晚篷人獨歸。雪は晚蓬に満ちて、人、ひとり歸る。

【字解】 一 欲漸漸は水の流れること。

【題義】 錢散人の名字等は不詳。この人は、江村に住まつて居たので、青邱に依囑して、この二題を賦して貰つたのであらう。姑蘇志に「吳江縣の臘菴は、淞江の濱に在り、宋の王份、これを營んで、以て居り、江湖を環らして以て園に入れ、柳塘花燠、景物秀野、中に釣雪灘あり。份、字は文儒、特恩を以て官に補せられて、大治の令となり、歸老す」とある。もし、この釣雪灘が、錢氏江村園中に在るとすれば、或は、錢氏が臘菴の跡を修めて、そこに隠棲して居たのであらう。

【詩意】 大江は、水を流さむとし、水も極めて冷たい處から、魚は皆水底に匿れて、少しも出て來ず、もとより、獲物はないけれども、一蓑を披いて、寒蘆の中に釣を垂れて居るのは、何人であるか。兎角する内に、漁村茫茫として暮れかかり、夕げの煙、かすかに立ちのぼり、雪が舟の蓬に満ちたから、

はじめて、釣を收めて歸つて仕舞つた。

望月臺

望月臺

臺前夜半鳥啼時。臺前夜半鳥啼くの時、
起望明月彈商絲。起つて明月を望んで商絲を弾す。

月來照見臺上影。

月明照らし見る臺上の影、

松桂滿山風露冷。松桂滿山風露冷かなり。

【題義】望月臺の由來は、不明であるが、もとより、錢氏江村園中的一名勝であらう。

【詩意】夜半、あまり明るい爲に、鳥が浮かれ出して、臺前に啼いた。その時しも、君は起つて明月を望みつつ、琴を搔き拂うて、哀しき調べを奏せられた。さやけき月は、隈もなくて、臺上の影、ありありと見え、松だの、桂樹だのが四山に満ちて、風露の氣、冷かに身に浸むを覺えた。

【餘論】二首ともに二句で換韻し、六朝時代に行はれた短曲の形式を取つたのである。いづれも落想清澈、讀者をして魂を水壺に灌ふを覺えしめるが、就中、前首の後半は殊に秀絶である。

【字解】〔一〕匡山。一統志に、商は清商、即ち真しい音調。真絃といふに同じ。

愛竹軒爲陳惟寅賦

愛竹軒、陳惟寅の爲に賦す

匡山老客何清真。

匡山の老客、何ぞ清真、

自繞園屋栽蒼筠。

自ら園屋を繞つて蒼筠を栽う。

年來無肉雖苦瘦。

年來肉なく、瘦に苦むと雖も、

家有萬玉誰言貧。

家に萬玉あり、誰か貧と言はむ。

一竿護惜不忍剪。

一竿護惜して剪るに忍びず、

何以持釣橫江鱗。

何を以て持して釣らむ、横江の鱗。

僅來掃葉自可喜。

僅來つて葉を掃ふは、自ら喜ぶべきも、

客至踏筍長遭嗔。

客至つて筍を踏まば、長しへに嗔に遭ふ。

鈎輞啼罷結遠夢。

鈎輞、啼き罷んで遠夢を結び、

碧雲忽墮湘南春。

碧雲、忽ち墮つ湘南の春。

落翠冉冉沾衣巾。

落翠冉冉として衣巾を沾す。

詩成時向節下寫。詩成つて時に節下に向つて寫せば、
醉墨點破煙痕新。醉墨點破して煙痕新なり。
風來清嘯與相答。風來つて清嘯、與に相答ふ。
若聽金奏怡我神。金奏を聞くが若く、我が神を怡ばしむ。
知無顏色媚兒女。知る顏色の兒女に媚ぶるなきを、
自古相愛惟幽人。古しより、相愛するは惟だ幽人。
洛陽陌上花易過。洛陽陌上、花過ぎ易く、
歌鐘競賞勞車輪。歌鐘競ひ賞して、車輪を勞す。
何如此君最耐久。何ぞ如かむ、此君の最も久しきに耐ふ。
歲晚結託同情親。歲晚結託、同情親む。
亂聲朝送簾外雨。亂聲、朝に送る簾外の雨、
疏影夜拂窓前塵。疏影、夜は拂ふ窓前の塵。
我嘗種此欲免俗。われ嘗て此を種ゑて、俗を免れむと欲す。

亂後伐盡惟荆榛。亂後伐り盡して、惟だ荆榛。
故園咫尺未能去。故園咫尺、未だ去る能はず、
移家幸得爲子鄰。家を移して幸に子の鄰を爲すを得む。
往來倘許如二仲。往來、もし二仲の如きを許さば、
敲門借看莫嫌頻。門を敲いて借看するも、頻を嫌ふ莫れ。

【題義】 愛竹軒は、陳惟寅の齋號であつて、青邱は、その依頼に依つて、この詩を作つたのである。
陳惟寅の略傳は、前に卷八、謝三陳山人惟寅贈其故弟長司惟允所「畫山水」の題下に、列朝詩集を引いて置いたから、重ねて、ここに贅するにも及ぶまい。

【詩意】 廬山の老客たる陳君は、その天性、清遠にして真摯、園庭を繞つて、綠竹を満栽された。陳君は、年來、肉をも食はず、その體の瘦せたのに苦んで居るが、家に萬條の碧玉たる此竹があれば、どうして貧窮といはうか。君は、その竹を愛惜すること甚しく、ただの一本でも剪るに忍びず、江中に横はる様な大魚を釣るには、何を釣竿とするか。家僮が時來て、その葉をすかすは、自然喜ぶべきも、客が来て筈を踏み碎くと、いつまでも、怒つて居る位。鈎輪の聲を爲す鷺鵠が啼き罷んだ時、春の日永の夢は、遠く馳せて、名だたる竹の碧雲と見まがふ湘江の邊に落ちるであらう。庭上なる竹の

草に「鶴鵠は江南に生ず、形、母雞に似たり、鳴くとき、鶴鵠格礙といふ」とある。【一〇】湘南春。湘水の南、博物志に「舜、南巡して返らず、洞庭の山に至り、涙を以て竹を揮へば竹靈く斑、故に湘妃竹といふ」とある。【一一】惜惜。塵俗を離れたる貌。【一二】落翠。地に低く聚合せる翠葉。【一三】冉冉。吹き亂れる貌。【一四】節下。竹の節の下。【一五】金奏。周禮に「鑑師は金奏を掌る」とあつて、その注に「金を擊ち、以て奏樂の節と爲す」とある。【一六】歌鐘競賞。樂を奏して興を添へ競うて花を賞する。【一七】此君。王徽之は竹を愛して「一日も此君なかるべからず」といひ、そこで、此君は竹の異名となつて居る。【一八】

涼しい影は、翛翛として琴硯を潤し、濃翠冉冉として衣巾を沾し、瀟洒の致を添ふるは、まことに嬉しく、やがて詩が出来ると、竹の節の間に書きつけむとし、醉墨を潑すれば、煙痕を點破して、その跡が、鮮かに見える。風が来れば、萬葉自ら響を爲して、君の清嘯と相和するが如く、君は竹聲を鐘聲に聞きまがふ様だといつて、ひどく喜んで居られる。元來竹には、兒女輩に媚ぶる様な嬌冶の姿態は、絶無であつて、古しへより、幽人が相愛するのみである。洛陽の市中では、花時が短いといふので、歌鐘興を添へ、競うて春を賞せむとし、わざわざ車に乗つて出かけるが、一時の盛りに過ぎぬ仇めかしき花よりも、この竹の能く久しきに耐へる方が、はるかに宜しく、そこで、終始渝らざる交を結び、互に同じ情思を以て親んで居られる。朝に竹が摺れ合ふ音は、簾外の雨を送るかと怪まれ、夕に疏らなる葉の影は、心ありげに窓前の塵を拂ひ、絶えず愛すべき風情がある。予も、嘗て竹を植ゑて、塵俗を免れやうと思つたが、亂後には、残りなく伐り去られて、その跡は、荆榛満地、故園は咫尺の處に在れども、いろいろの都合で、往くことも出来ず、近ごろ、家を移して、君の鄰近に住まふことの出來たのは、まことに、思ひがけぬ幸であった。もし、わが往来して、丁度、かの二仲の蔣詡に於けるが如きを許されたならば、日夕、門を蔽いて、君の家の竹を拜見したいと思ふが、その頻繁を嫌はれざらむことを切望する次第である。

【餘論】この詩は、大分面白く出来て居るが、鈎軸啼罷の二句は、さばかり緊密なる關係もなく、む

しろ、刪り去つた方が宜しくはあるまい。涼陰翛翛の二句、風來清嘯の四句、亂聲朝送の二句等は、極めて新婉巧警であるし、結末も相當に振つて居る。

幻住精舍尋梅

幻住精舍に梅を尋ぬ

郭西雪後尋僧院。郭西雪後に僧院を尋ぬ。
短竹穿沙水如練。短竹、沙を穿つて、水、練の如し。
梅花有待我來催。梅花、わが來り催すを待つあり、
十日春寒未開遍。十日春寒、未だ開き遍ねからず。
忽思前日渡江水。忽ち思ふ、前日、江水を渡り、
偶逢一樹在官廬。偶ま逢ふ、一樹の官廬に在るに、
爲寫新詩冰滿硯。爲に新詩を寫せば、冰、硯に満つ。
關山夢別今五年。關山夢に別るる今五年、

【字解】〔一〕郭西 幻住精舍は

閨門の外に在るが故に云ふ。

〔二〕短竹穿沙 椅が岸沙の上に出

て居る。

〔三〕來催　来て催促する。

〔四〕前日渡江水　これは、吳越紀遊

の事らしく、至正十八年より二十年

に至る間であらう。

〔五〕解征帆　舟の帆を卸す。

〔六〕官廬　村役場の如きものを云ふ。

〔七〕夢別　夢中で別れる。

縞袂誰家月中見。縞袂、誰が家か月中に見る。
自慚喪亂尙飄泊。自ら慚づ、喪亂、尙ほ飄泊、

淚眼如看故人面。涙眼、看るが如し故人の面。

黃昏酒醒逐寒影。黃昏、酒醒めて寒影を逐ひ、
繞樹千廻意無倦。樹を繞つて千廻、意、倦むなし。

南枝北枝亂如雪。南枝北枝、亂れて雪の如し、
未許東風吹一片。未だ許さず、東風の一片を吹くを。

名園桃李盡荆榛。名園の桃李、盡く荆榛、
空谷獨開君莫怨。空谷、ひとり開く、君、怨む莫れ。

重來省視兩何如。重來省視、兩つながら何如、
惆悵歸時有餘戀。惆悵として歸る時、餘戀あり。

【題義】幻住精舎は、前に卷六、宿幻住棲雲堂とあつたその幻住であつて、閑門の外なる雁蕩村に在ることも、その題下に注して置いた。

【乙】吹一片 花びらを一つ吹き落す。云ふ。東坡の梅花の詩に、月黒林間迷縞袂とある。

【丙】省視 寂れて来て熟視する。

【詩意】雪後、閑門より出でて、蘇州城西の僧院を尋ねむとして、ほつぱつ歩いて往つた。その路すがら、小篷は、岸沙を抜いて生じ、水色は澄みて練の如くである。唯だ梅花は、予が特に來つて催促するを待つものの如く、加ふるに、餘寒が十日も續いて甚しかつた爲に、碌碌咲き揃はない。おもへば、かつて、江水を渡つて、南方に旅を爲し、夜、舟の帆を卸し、上陸して山縣に投宿したことがあつたが、ゆくりなくも、村役場の前に一株の梅花を認め、吟興勃發、忽ち新詩を作り、それを寫さうとした處が、寒氣殊に甚しく、硯の水が凍つて、おもふ様に筆が動かなかつた。夢中の思で、その地の關山に別れてより、今に至つて、五年になるが、縞袂の女に比すべき梅花は、月中、誰が家に於て逢はうか、久しく邂逅の縁なきを嘆き侘びて居た。何は兎もあれ、喪亂に遭うて、一身飄泊、まことに慚づべきの至。ここに梅花に對すれば、涙にうるむ目で舊知の顔を見た様な感じがする。黃昏酒醒めて後、梅花の寒影を逐ひまはし、千廻樹を繞つても、まだ倦むことを知らない。こここの梅のみは、南枝北枝、ともに咲き亂れて、さながら雪の如く、そして、東風をして其一片を吹き落さしむるを許さず、今しも、丁度、真盛りの見ごろである。顧みれば、名園の桃李は、盡く荆榛と化して仕舞つたのに、君のみは、空谷の中に獨り開いて居るから、決して、その所を得ざるを怨んではならぬ。他年、重ねて來り、君を省して篇と視たならば、君と我と、果して如何であらう。とても、今日の様ではなくて、ともに、衰老を免れぬに相違ない。そこで、歸らむとしても、名残が惜まれて、惆悵の想を禁

することが出来なかつた。

【餘論】青邱の梅花の詩は、多く七律を以て出したが、この一首は、七言短古で、一寸珍らしい。篇中、江水を渡つて、山縣に梅花を見たことを追憶した一段は、波瀾を添へて、平板を避け、極めて巧慧なる妙手段である。次に南枝北枝亂如雪の四句は、精警超妙、まさしく佳句である。

北郭秋夜喜徐幼文遠來兼送南游

北郭の秋夜、徐幼文の遠くより来るを喜び、兼ねて南游を送る

東海徐君我同里。
日共周旋接冠履。
斯人自是眞可人。
不見心憂見之喜。
豈容遠別問山嶽。
兩歲僅收書一紙。
頗聞微祿不自養。

東海の徐君は、我が同里、
日共に周旋して冠履を接す。
斯人自ら是れ眞に可人、
見ざれば心に憂へ、これを見れば喜ぶ。
豈に容さむや、遠別、山嶽を問つを、
兩歲、わづかに收む書一紙。
頗る聞く、微祿、自ら養はず、

【字解】〔一〕東海徐君。陳史に「徐陵、字は孝穆、東海刻の人」とあつて、ここでは、當りて徐幼文に擬したのである。〔二〕周旋。取り持つ、世話をする。〔三〕接冠履。冠や履に接する、ともに追隨する。

〔四〕可人。司空圖の二十四詩品に可人如玉とある、よき人といふ義。〔五〕問山嶽。山嶽を隔つ。〔六〕瓊枝。玉の枝、徐幼文の風姿に比す。

霧雨南方疫時起。
誰能忽送千里來。
應有飛鴻度江水。
蟲聲今夜空館涼。
秉燭相看疑夢裏。
客路風塵亦勞矣。
我今不解出門行。
病眼流眵肉生髀。
與奪得喪未足較。
惟有一貧聊復爾。
暫來卽去何使然。
撫琴東西覓知己。

霧雨南方、疫時に起ると。
誰か能く忽ち千里に送つて来る、
應に有るべし、飛鴻の江水を度る。
蟲聲、今夜、空館涼しく、
燭を秉つて相見て、夢裏を疑ふ。
客路風塵、亦た勞せり。
われ、今、門を出でて行くことを解せず、
病眼、流眵、肉生髀。
與奪得喪、未だ較ぶるに足らず、
惟一貧聊復爾。惟だ一貧あり、聊か復た爾り。
暫く來つて即ち去る、何かららしむ。
琴を撫して、東西に知己を覓む。

當時結交豈不多。當時交を結ぶ、豈に多からざらむや、
下車相揖今無幾。車を下つて相揖す、今幾ばくもなし。
願君窮達存此心。願はくは、君、窮達、この心を存し、
勿使千年笑餘耳。千年、餘耳を笑はしむる勿れ。

【題義】説明に及ばぬ。北郭は蘇州城北。徐幼文は即ち徐貢で、前にも數ば見え、北郭十才子の一として青邱の熟友である。

【詩意】東海の徐陵に比すべき君は、わが同里の舊友であつて、毎日ともに周旋し、冠履相接して、頻りに追隨して居た。君は、眞に善き人で、逢はねば心に憂へ、逢へば嬉しく思ふ位。されば、遠く相別れて、山嶺に隔てられるを許すべきか、相思の情は、日夕相慕るばかりだが、何分戰亂の世であるに因り、二年の間、唯だ手紙を一本受取つただけであつた。聞けば、君は、俸祿なほ少く、到底、自ら給養するに足らず、おまけに、南方は霧雨深く、惡疫が時時流行するといふ話で、早く歸つて来れば善いがと思つて居た。然るに、誰が君を千里の彼方から送り歸したか、雁が江水を度つて、前以て音づれの有るべき筈であつた。今夜、蟲聲繁くして、空館方に涼しきに當り、先觸れも何もなくて、君は突然來訪せられ、燭秉つて相見れば、さながら、夢中の見參では無いかと疑ふばかり。瓊枝に

比すべき君の姿容は、どうして、昔日の艶かさを失つたのか、それにつけても、客路の風塵を涉つて、定めて御苦勞の事であつたらう。予は、今日、門を出て行くことが出来ないので、病める眼からは目にが流れ、股の邊には贅肉を生じ、まことに、意氣地なき有様。世上の與奪得失などは、御話にも成り兼ねる位。唯だ一貧のみは、現在見る通り。友人についても、一寸来て、すぐ立ち去つて、落ち付いて長く居て呉れぬのは、如何にせしものか、琴を撫しつつ、東西に知己を求める心の苦しさ。むかし、交を結んだ人は、決して少くはなかつたが、立身しても、車を下つて挨拶するといふ様な人は、幾ばくもなく、それにつけても、君の來訪されたのは、まことに喜ばしい。願はくは、君よ、窮達の如何に拘はらず、常に此心を存して、予を見棄てられず、千年後の人をして、陳餘・張耳は仲達をした、始あつて終なきものだ、丁度、それに似て居るといつて、笑はしめるとの無い様に致したいものである。

【餘論】徐貢に向つて、貧交の長しに渝らざることを囁望したので、通篇、悲哽の音に満ちて居る。我今不解出門行の二句を見ると、青邱、中年窮苦の實況は、まさしく、それと知られる。要するに、かういふ詩は、語真にして情摯、以て足れりと爲すべく、區區として、文字の巧拙を論するにも及ぶまいと思ふ。

が爲に下らむ」とある。【〇】餘耳。陳餘・張耳。はじめ劍賊の史を結んだが、後には全く仲違ひをして仕舞つた。その詳は、前に皋蘭兩義出歌の中に注して置いた。

次韻答朱冠軍游城西之作

次韻、朱冠軍の城西に游ぶの作に答ふ

前年城西作冶游。前年、城西冶游を爲す。
 柳條拂蓋花迷舟。柳條、蓋を拂ひ、花、舟を迷はしむ。
 笑看明月問狂客。笑うて明月を見て、狂客を問ふ。
 我舉大白君當浮。われ大白を舉ぐ、君、當に浮ぶべし。
 去年城西復偶住。去年、城西復た偶ま住まる。
 酒伴家家邀卽去。酒伴、家家、邀へて卽ち去る。
 東鄰寺裏花正開。東鄰寺裏、花、正に開き。
 半醉半醒游幾度。半醉半醒、游ぶこと幾度。
 今年有花愁獨尋。今年、花あるも、獨り尋ねるを愁ふ。
 閉門三日臥春陰。門を閉づること三日、春陰に臥す。
 將軍小隊游何處。將軍小隊、何の處に游ぶ。
 日暮空聽車馬音。日暮、空しく聽く車馬の音。

【字解】
 〔一〕治游 晉の子夜春
 歌に、治游歩春露とある、ここで
 は風流なる遊。
 〔二〕拂蓋 蓋は
 浮は杯を差しつけて飲ませること。
 車蓋、車の上に懸つて居る天蓋。
 〔三〕舉大白 前に次韻楊孟戲早春
 見寄の詩中に注して置いた、酒の満
 ちた杯を擧げて飲む。
 〔四〕當浮
 浮は杯を差しつけて飲ませること。
 【五】將軍小隊 將軍は朱冠軍、小隊
 は其部下。杜甫の詩に元戎小隊出
 郡城間柳尋花到野亭」とある。
 【六】阜橋泰娘 前に卷八、憶昨行に
 阜橋泰娘雙翠娥、喚來草前爲我歌と
 あつて、その處に、詳しく注して置
 いたが、阜橋は、閨門内に在る橋の
 名。泰娘は、劉禹錫に泰娘歌といふ
 のがあつて、唐時の美人であるのに
 比擬したのである。青邱の相識れる

阜橋泰娘殊窈窕。阜橋の泰娘、殊に窈窕、
 爲我喚來歌水調。わが爲に喚び來つて水調を歌はしむ。
 客愁草草不易除。客愁草草、除き易からず、
 世事茫茫本難料。世事茫茫、本と料り難し。
 玉壺一雙秋露傾。玉壺一雙、秋露傾く、
 唯此可以忘吾情。唯だ、此、以て吾が情を忘るべし。
 醉歸共射草中石。醉歸、共に射る草中の石、
 笑擊弓弦霹靂鳴。笑つて、弓弦を擊けば霹靂鳴る。

前に卷八、憶昨行の群星麗、手鳴三雕弓、及び此卷、晚步西郊見鶯鶯飛の箭聲脱弦鳴三鶯鳴の句下に注して置いた。

【題義】

説明に及ばぬ。但し、朱冠軍の名字閱歷等は分からぬ。
 【詩意】前年、城西に於て風流の春游を爲したことがあつて、柳の枝は車蓋を拂ひ、花の雲は行舟を
 迷はしむるばかり、笑うて明月を仰ぎつつ、相手たるべき狂客を呼ばはり、われは、杯を満引し、
 君も強ひられたのを飲み乾された。去年、再び城西に出かけて、偶ま少憩して居ると、飲み仲間が
 家家に居て相迎へたるに因り、辭退も成らずして、その處に立ち寄つた。時しも、東鄰なる寺の中に

は、花が丁度咲き満ちて、見ごろであつた處から、半醉半醒の有様で、幾度も、そこに游んだ。次に、今年は、相變らず花は咲いたが、ひとりで尋ねる氣にも成らず、門を閉めて、三日、春陰の中に臥して居た。將軍は、小隊を引き具して、どこへ御出かけに成つたか、予は、日暮に、車馬の群り過ぐる聲を聞いて居た。皇橋の秦娘は、窈窕たる佳人であるが、わが爲に喚んで来て、水調を歌つて聞かせて呉れぬか。客愁は、草草として容易に除くことが出来ず、世事は、茫茫として、本と豫測し難いもので、一雙の玉壺に盛れる秋露の美酒を傾くれば、はじめて、吾が情を忘れ、陶然として、愉快になるであらう。どうか、君と共に會して、おもふ存分、痛飲したいものである。醉うて歸る途すがら、草中の石を見れば、ともに之を射るも面白かるべく、笑つて、弓の弦を放つと、さながら、霹靂の様な響を發するであらう。

【餘論】前年・去年・今年と次第に分説し、刻下窮苦の境に居ることを訴へ、秦娘の歌を聞かせて呉れ、秋露の酒を飲ませて呉れといつて、朱冠軍に依嘱したのである。

贈歩鍊師禱雨

歩鍊師に贈りて、雨を禱る

白頭道士騎一鶴。白頭の道士、一鶴に騎し、

【字解】〔一〕青蓮、寶劍を云ふ、

手把青蓮下寥廓。手に青蓮を把つて、寥廓より下る。
 人間又見海田枯。人間又見る、海田の枯るるを、
 十丈黃塵沒城郭。十丈の黃塵、城郭を没す。
 昔年服事茅長君。昔年服事す茅長君。
 能役鬼神呼風雲。能く鬼神を役して風雲を呼ぶ。
 下爲羣生掃旱沴。下、羣生の爲に旱沴を掃ひ、
 雨工驅起如羊羣。雨工驅起して、羊羣の如し。
 陰雷填填天欲怒。陰雷填填、天、怒らむと欲し、
 靈廳吹旗紫壇暮。靈廳、旗を吹いて、紫壇暮る。
 書入重關虎豹開。書は重關に入つて虎豹開き、
 璧沈古井蛟龍護。璧は古井に沈んで蛟龍護す。
 須臾甘澍何滂沱。須臾にして、甘澍何ぞ滂沱、
 十日不雨應無禾。十日雨ふらず、應に禾なかるべし。

李白の時に起舞「蓮花劍」とあり、漢書晉灼注に「劍首、玉を以て井底盧形を作り、上に水を割して山形を作し、蓮花、初めて生じて、未だ數かざる時の如し」とある。〔二〕茅長、君、即ち茅君、仙人の名、前に卷七、登三句容僧伽塔望茅山の詩中に注して置いた。〔三〕旱沴、沴は邪氣。〔四〕雨工、異聞錄に「柳毅下第、榜に湘濱に迷らむとして、涇陽に往いて告別す。至ること六七里、鳥飛び、馬驚く。又六七里にして止まる。婦人の羊を道傍に牧するを見て之を詰る。女曰く、妾は洞庭龍君の小女なりと。問ふ、羊を牧するは何の用ぞ。女曰く、羊に非ざるなり、雨工なり。問ふ、何をか雨工と爲す。曰く、雷聲の類なり、と。數ば之を顧視すれば、皆鷄頭駄歩して、飲龍王だ異

祠官空爲大雪舞。

祠官、空しく大雪の舞を爲し、

覗女羞作迎神歌。

覗女、迎神の歌を作すを羞づ。

明朝師歸定何許。

明朝、師歸る、定めて何許、

雲裏懸珠赤如黍。

雲裏、珠を懸けて、赤きこと黍の如し。

更煩夜起把天瓢。

更に煩はす、夜、起つて天瓢を把り、

翻作東南洗兵雨。

翻つて作す、東南兵を洗ふの雨。

かすべからず」とあり、太平廣記に「唐の明皇、東都に在り、一女子を夢む、高髻廣裳、拜して言うて曰く、妾は清波池中の龍なり、久しく寶花を護す、陛下、音を知る、乞ふ、一曲を賜へ、と。帝覺めて、爲に凌波の曲を爲つて池上に奏すれば、神、波間に出づ」とある。【八】甘潤。潤は雨の注ぐこと、甘潤に同じ。東坡の時に、沛然倒賜三尺雨、甘潤不レ爲三龍所攝とある。【九】十日不雨。東

坡の喜雨亭記に「十日雨ふらざれば、禾なし」とある。【一〇】大雪舞。雪は雨乞ひ、玉篇に「雪は雨を請ふ祭なり」とあり、爾雅釋名の注に「雪の祭、舞者吁嗟して雨を求む」とある。【一一】覗女。巫女に同じ。覗も巫と同義で、唯だ男女を分つたのである。【一二】天瓢。中から雨を落す瓢たんで、前に、題三童元臘沙龍圖の詩中に見えて居た。【一二】洗兵雨。說苑に「武王、紂を伐つ。風鬪れて乗するに大雨を以てす。散宜生、諫めて曰く、これ妖に非ざるか。王曰く、非なり、天、兵を洗ふなり」とあり、梁の簡文帝の詩に洗兵達瓢雨とある。

【題義】鍊師は、丹を鍊る人、即ち道士の稱。その人、姓は歩、名字は不詳。この詩は、歩鍊師に贈つて、雨を禱ることを勧めたのである。

【詩意】鍊師は、白髮頭の老道士で、一鶴に跨り、手に蓮花の寶劍を攜へて、天上から、しづしづと降りて來た。この世では、旱天が打續いて、滄海も、桑田も、乾枯して仕舞ひ、十丈の黃塵は、城郭を埋没せむばかり。鍊師は、むかし、茅君といふ仙人に師事せられたので、通力異常、鬼神を使役して風雲を呼ぶことが出来る。そこで、今、下界の羣生の爲に、旱厲の邪氣を掃ひ去らうといふので、その形、羊に似たる雨工を驅り立てて、ここまで遣つて來た。やがて、陰雷填填として響き度り、さながら天の怒れるが如く、紫壇の上、日、將に暮れむとして、靈風陣陣、旗を吹き、翻して居る。さきに、天帝に差出した上書は、九重の天門を通過し、そこに見張りをして居る虎豹も避けて路を開き、同時に、璧は古井に沈められて、蛟龍が之を守護して居る。しばらくすると、果然、甘雨は滂沱とし、巫女は、迎神の歌を唱へたが、何にも成らなかつたといつて差ち入るであらう。その翌日、鍊師は、て降つて來たが、この雨が十日降らなければ、穀物は、すべて枯死して仕舞ふ處であつた。鍊師の通力は、大抵、これ程のものなるべく、祠官は、精を出して雨乞ひの舞を遣つたが、何の役にも立たず、何處に歸られるか知らぬが、その衣に懸けた珠は、雲間にきらめいて、丁度、黍の實の様に、粒粒が赤く見える。この上、願はくは、夜、起きて、かの雨を滴らすといふ天瓢を手にし、これを東南の地方に翻して、兵を洗ふの雨となし、殺氣を奇麗に一掃して戴きたいものである。

【餘論】起八句は、鍊師が雨を禱ること、次の八句は、その效驗空しからず、果然雨が降つたといふ

ことで、すべて、未來を想像し、かくの如くあつて欲しいといつて、鍊師に望んだのである。結四句は餘意、更に東南に洗兵の雨を降らして貰ひたいといふに至つては、ひとり、天來の奇想たるのみならず、亦た實に穩健確當を以て稱すべきものである。

題朱澤民荆南舊業圖

朱澤民荆南舊業の圖に題す

睢陽醉磨一斗墨。
夢落荆南寫秋色。
太陰垂雨尙淋漓。
哀壑回風更蕭瑟。
楓林思入煙霧清。
湖水愁翻浪波白。
谿上初逢野老航。
山中遠見先生宅。

睢陽、醉うて磨す一斗の墨。
夢は荆南に落ちて、秋色を寫す。
太陰、雨を垂れて尙ほ淋漓。
哀壑、風を回して更に蕭瑟。
楓林、思は煙霧に入つて清く。
湖水、愁は浪波を翻して白し。
谿上、はじめに逢ふ野老の航、
山中、遠く見る先生の宅。

【字解】

【一】睢陽 即ち荆南の地、朱澤民を指す。元詩傳に「澤民九世の祖貢、睢陽五老の一たり、その後世、江を渡つて吳人となる」とある。なほ杜衍の睢陽五老圖詩注に「杜衍八十歳、王煥九十歳、舉世長九十四、馮平八十七、朱貢八十八」とある。【二】醉磨一斗墨。畫斷に「王羲、酒酣なるの後、先づ墨を以て絹に潑し、脚踏み、手捲し、その形に隨つて山水石を爲り、墨汁の處を見す」とある。【三】太陰。秋の

穀田半頃連芋區。
茅屋三間倚蘿薜。
僧來看竹乘小輿。
客去尋苔借高屐。
任公臺下石可坐。
周侯廟前路曾識。
虎跡時留暮苔紫。
城郭當年別已久。
風塵此日歸不得。
落日書齋半壁明。
畫圖臥對空相憶。

穀田半頃、芋區に連り、
茅屋三間、蘿薜に倚る。
僧來つて、竹を見て小輿に乘じ、
客去つて、苔を尋ねて高屐を借る。
任公臺下、石、坐すべく、
周侯廟前、路、かつて識る。
虎跡、時に暮苔を留めて紫に、
城郭、當年、別るる、すでに久しく、
風塵、この日、歸り得ず。
落日、書齋、半壁明かに、
畫圖臥して對し、空しく相憶ふ。

書けざるはなし」とある。【一】任公臺 名勝志に「臺は、宜興縣荆溪の上に在り、任昉、鄆に守たる時、かつて此に釣る」とあ

る。【二】周侯廟 一統志に「宜興縣治の南に在り、晉の平西將軍周處を祀り、廟を英烈と號す」とある。【三】虎跡 虎の足跡。【題義】姓譜に「朱德潤 字は澤民、崑山の人、幼にして誦讀一過、能く記す。壯にして、詩文を攻む。間ま許道寧の畫を得たり、試に塗抹を加へ、遂に其妙に臻る。延祐の末、京師に游ぶ。趙孟頫、これを薦め、召し見て、命せられて編修となる」とあり、一統志に「荆南山は、宜興縣の西南三里、荆溪の南に在り」と見えて居る。舊業は元の屋敷。この詩は、朱澤民の畫いた荆南山下なる其故宅の圖に題したのである。

【詩意】睢陽の朱澤民は、醉うて一斗の墨を磨り、荆南の故里を夢みたるに因つて、その地の秋色を寫し出した。秋の空は、雨を降らし、その跡、淋漓として溼ひ、深い谷には、風が吹き廻つて、愈よ蕭瑟たる氣配がある。楓林をたどり行けば、思は遙に煙霧に入つて清く、湖水に臨めば、愁は波浪の白きを翻す時に生ずる。船上に於ては、初めて野老の小舟を見るべく、山中に於ては、遠くから先生の故宅が望まれる。半頃の田には、もち栗を種ゑて、それが芋畠に連り、三間の茅葺は、薜蘿に依り添うて、趣ありげである。僧が來ると、竹を看むが爲に、小さな輿に乘じ、客は去らむとして、茯苓を探す爲に、高足駄を借りて行く。その近傍には、任公臺があつて、任昉の釣をした石は、坐するに宜しく、周處廟があつて、その路は、かつて見覺えがある様な氣がする。虎の足跡には、苔が生えて紫になり、蛟龍の氣は、動もすれば、秋雲に化して黒く見える。予は、往年蘇州の城郭に別れて

より、歲月すでに久しう、風塵滿目、今日になつても、まだ歸ることが出来ない。そこで、書齋の半壁に夕日の明かるる時、臥して、その圖に對し、おのが故郷を憶うて、まことに情に堪へられない。【餘論】起二句は畫圖の由來、結四句は斯圖に對する感慨。その中間十四句は、畫中の景色を逐條的に列記したので、つまり、畫の説明である。尤も、かういふ畫題は、特殊的で、汎くは世人に知られざる性質の者であるから、かくの如くしたのも善からう。但し、毎毎の事ながら、通篇、雋句の極めて少しきを遺憾とする。

月支王頭飲器歌

月支王頭飲器の歌

磧中萬騎驕嘶雪。 磧中の萬騎、驕つて雪に嘶き。
頭挂金鞍敵初滅。 頭は金鞍を挂けて、敵、はじめて滅ぶ。
歸來漆作大白杯。 歸り來つて、漆して作る大白の杯。
胡酒寒凝色如血。 胡酒、寒凝つて、色、血の如し。
故國無塋歸夢迷。 故國塋なく、歸夢迷ふ。
朽骨飲恨空如泥。 朽骨恨を飲んで、空しく泥の如し。

【字解】

【一】磧中 萬騎驕嘶雪。 磧中の萬騎、驕つて雪に嘶き。
【二】頭 月支王の首。 【三】大白。 杯 前に大頭楊孟載の詩中にも見えたが、大酒杯の義。 【四】無塋 塋は墳墓。 【五】如泥。 たわいもないことが泥の様だといふ職。又、泥は海鼠の如き動物で、大酔すると、心もとないことが、丁度、海鼠の様に成るといふ說もある。 【六】酥燈 酥

萬歳の壽を祝し、その御機嫌を取つて居た位である。

【餘論】かういふ様な史的題目を好んで詠出したのは、同時の楊鐵崖が第一で、青邱も、或は之にかぶれたのでは無からうかと思はれる。大體に於て、用筆周匝ではあるが、稍や煩碎に類し、その爲に、凄味の足らぬのは大缺點と稱すべく、今少し簡切奇警であつて欲しい處である。

海石爲張記室賦 海石、張記室の爲に賦す

大星墮水聲若吼。大星、水に墮ちて、聲、吼ゆるが若し。
祖龍下叱神羊走。祖龍、下、神羊を叱して走らしむ。
誰將五色補天餘。誰か、五色、天を補ふの餘を將て。
屹障狂瀾歲時久。屹として、狂瀾を障つて、歲時久し。
空憐山頭精衛鳥。空しく憐む山頭精衛の鳥。
身墮風波銜不了。身、風波に墮ちて、銜んで了らず。
媧皇去後幾桑田。媧皇去る後、幾たびか桑田、

鼈背靈峰一拳小。鼈背の靈峰、一拳小なり。

「三」叱神羊 脣茅は石を云ふ。黄

初平が羊を牧して、自分が仙となり、その羊が石に化して居たといふことがあつて、前に巻八、煮石山房の詩中に詳説して置いた。それから、三齊略記に「始皇、石橋を作り、海を渡つて日出の處を觀むと欲す。時に神人あり、龍も石を駆つて海に下す。石去るごと速ならざれば、神、輒ち之を鞭つ。皆血を流し、今に至つて悉く赤し。陽城山の石、皆起立し、巖巖東向、狀、相隨つて行くが若し」とある。【四】五色補天餘、列子に「天も亦た物あり、物足らざるあり、故に、昔者、女媧氏、五色の石を練つて以て天を補ふ」とある。【五】精衛鳥、もと炎帝の女で、東海に溺死した處から、その魂が化して精衛といふ鳥となり、西山の木石を衔んで東海を埋めむとし、常に忘らないといふことがあつて、前に巻八、溫陵節婦行の詩中に詳説して置いた。【六】銜不了、銜は口にくばへる。木石を十分に衔み切れない。【七】媧皇、即ち女媧、上に見ゆ。【八】鼈背靈峰、蓬萊を云ふ、列仙傳に「巨鼈、蓬萊山を負うて渤海の中に掛る」とある。

【題義】この詩は、海中の石を詠じたのである。張記室は、如何なる人か能くは分からぬ。
【詩意】大星が天上から海水の中に墮ち、その聲、吼ゆるが如く物すごく、これが即ち海石である。秦の始皇は、海中に橋を造つて、日出の處を觀むと欲し、その海中の石を叱したので、石は血を流して走つたが、遂に成功しなかつた。むかし、女媧は、五色の石を以て天を補つたといふが、誰が、その時使ひ残した石を海中に並べて、屹然劍立、狂瀾を遮つて、年の久しきを経たのであるか。山頭なる精衛の鳥は、西山の石を口にくはへて、東海を填めむことを企てたが、やがて、その身は、風波の中に墮ちて死んで仕舞つたので、その石は、十分に銜み得ず、盡きぬ恨を遺して居る。おもへば、女

【字解】【一】大星墮水 史記に「秦の始皇三十六年、焚惑、心を守る、墮星あり、東郡に下り、地に至つて石となる」とある。【二】祖龍 秦の始皇。史記始皇本紀に「使者、關東より、夜、華陰平舒の道を過ぐ。人あり、壁を持し、使者を遮つて曰く、吾が爲に滻池君に遣れ、因つて言うて曰く、今年祖龍死せむ」と。使者、その故を問ふ、急ち見えず、

娟、一たび去りし後、世事轉移、海水も幾たびか桑田と變じたけれども、龍背の靈峰たる蓬萊のみは、遠く望めば、小なること挙の如く、今日でも、むかしながらの形をして居る。

【餘論】一寸見ると、石に關する故事を並べ立てたばかりで、主意も不明の様であるが、大體は、祖龍石を叱すれども海中の橋を造り得ず、今海中に在つて狂瀾を障るものは、女媧補天の餘の者である。精衛は東海を填めむとしたが、風波に墮ちて死んで仕舞つたので、矢張功を成さず、そして、東海は幾たびか滄桑の變を經、蓬萊のみは依然として殘つて居るといふので、騷亂の世に際し、さまざまの事を企てた人もあつたが、いづれも功を成さず、唯だ君だけ、依然として生存して居るのは、大に心強いといふ積りらしく、つまり、張記室その人を推稱する爲に作つたものと思はれる。

張中丞廟

張中丞の廟

延秋門上鳥啼霜。
延秋門上鳥霜に啼き、
羯兒曉登天子牀。
羯兒、曉に登る天子の牀。
江頭老臣淚暗滴。
江頭の老臣、涙暗に滴れ、
萬乘西去關山長。
萬乘、西に去つて關山長し。

【字解】〔一〕延秋門 前に雙廟の詩中にも引いて置いたが、通鑑に「天寶十五年六月、哥舒翰、祿山と竇賀の西原に戦つて敗績す。上はじめて屢々、宰相を召して之を謀る。楊國忠、首として蜀に幸するの策を

公卿相率作降虜。
公卿、相率ゐて降虜と作り、
草間拜泣如羣羊。
草間拜泣して羣羊の如し。
當時不識顏平原。
當時識らず顔平原、
豈復知有張睢陽。
豈に復た張睢陽あるを知らむや。
孤城落日百戰後。
孤城落日、百戦の後、
瘦馬食盡人裹瘡。
瘦馬食ひ盡して、人瘡を裏む。
男兒竟爲忠義死。
男兒、竟に忠義の爲に死す、
碧血滿地嗟誰藏。
碧血滿地、嗟、誰か藏せむ。
賀蘭不斬上方劍。
賀蘭斬らず上方の劍、
英雄有恨何時忘。
英雄恨あり、何の時か忘れむ。
千年海上見祠廟。
千年、海上、祠廟を見る、
古苔叢木秋風荒。
古苔叢木、秋風荒る。
摩挲畫壁塵網裏。
摩挲畫壁を塵網の裏、

信ふ。上、これを然りとす。黎明、上、ひとり貴妃姉妹皇子妃主皇子、及び親近の宦官宮人と延秋門を出で、妃主皇子の外に在るものは、皆これを委して去る」とある。〔二〕羯兒安祿山、胡羯の種族なるが故に云ふ。杜甫の真王孫に長安城頭白鳥、飛延秋門上呼とある。〔三〕鳥啼霜春正月、安祿山、僭號して自ら大燕皇帝と稱し、聖武と改元す」とある。〔四〕天子牀 通鑑に「天寶十五載春正月、安祿山、僭號して自ら大燕皇帝と稱し、聖武と改元す」とある。〔五〕江頭老臣 杜甫の袁江頭に少陵野老否聲哭、春日僧行曲江曲、江頭官殿三千門、細柳新蒲爲誰綠とある。〔六〕萬乘西去 玄宗の蜀地に蒙塵せしを云ふ。〔七〕不識顏平原 通鑑に「天寶十四載冬、平原太守顏真卿、兵を起して賊を討ち、平原司兵李平を遣し、問道より之を奏

勇氣燁燁虬鬚張。 勇氣燁燁、虬鬚張る。

巫歌大招客酌酒。 巫は大招を歌ひ、客は酒を酌す、

忠魂或能來故鄉。 忠魂或は能く故郷に來らむ。

曰く、朕、顏真卿の何の狀を作すかを懲らす、乃ち能く此の如し」とある。【八】瘦馬食鹽。通鑑に「尹子奇、久しく睢陽を圍む、城中食盡き、士卒と食を同じうす。茶紙すでに盡き、遂に馬を食ふ。すでに盡く。鼈々に男女老弱を以て出し、殺して以て士に食はしむ。遠、亦た其餌を殺す。然後、城中の婦人を括して之を食ふ。すでに盡く。鼈々に男女老弱を以て臥す、衆心懼る」と。漢、乃ち勃然、創を裹んで起ち、牛を椎し、士を斬り、旦日、齊しく鼓して進む。建の軍、大に潰ゆ」とある。【九】碧血。莊子に「萐弘、蜀に死し、その血を藏する三年、化して碧となる」とある。【一〇】上方劍。漢書朱雲傳に「雪日く、頭はくは、尙方新馬劍を賜はつて、侯臣一人の頭を斬ち、以て其餘を屬まさむと。上、誰かと問ふ。對へて曰く、張禹と。上怒る。御史、雲を將て下る。雲、殿権を擧げ、檢折る。呼んで曰く、龍逢比干に從つて地下に遊ぶを得ば是れり」とある。上方は、宮中の御臺所。斬馬劍は、馬を屠る時に用ふる刀。【一一】摩撫。摩撫である。【一二】座紹。座のかかれる蜘蛛の巣。【一三】烽烽。光明の貌。【一四】巫。巫女。【一五】大招。楚辭の篇名、王逸草句に「大招は、屈原の作るところなり」とある。

【題義】 張中丞は張巡。唐書の本傳に「巡は、南陽の人、博く羣書に通じ、戰陣の法を曉り、志

氣高邁、開元の末、進士の第に擢んでられ、清河の令となる。治績あり、後、真源令に調せらる。祿山反す、巡、兵を起して賊を討ち、許遠と同じく睢陽を守る。大小四百戦、糧盡き、城陥る、賊を罵つて死す。揚州大都督を贈り、郡人廟祀す」とある。前に卷三、謁雙廟の詩があつたが、雙廟は許遠の故里、海寧に在るが故に、遠を主とし、そして、張巡を合祀したのであるが、この張中丞廟は、睢陽に在つて、巡を主とし、そして、許遠を合祀したのである。しかし、青邱は、睢陽に往つたことは無いから、この詩は、唯だ題詠的に作つたのであらう。

【詩意】 延秋門の上には、霜夜の寒きに鳥が啼き叫び、滿目淒涼。安祿山は、曉に天子の牀に登り、憤して帝と稱した。杜甫の如き老臣は、江頭にうろつき、人知れず涙を垂れて、世の騒亂を傷み、玄宗は、萬乘の天子を以て、西、蜀に向ひ、萬里の遠き關山を越えて落ち行かれた。滿廷の公卿輩は、相率ゐて降人となり、泣きながら、草間に拜伏し、さながら羣る羊と一般である。當時、玄宗は、顏真卿を知らず、平原に居て何をして居たかと謂はれたので、その真卿よりも卑い職に居た睢陽の張巡といふものが、世に有らうとも思はなかつた位。張巡は、睢陽を守り、孤城落日、大小百餘戦を経て屈せず、城中糧盡き、瘦せ馬だに食ひ盡した程であつたが、人々は、創を裹んで起ち、その意氣は、決して衰へなかつた。かくて、全く力盡きて救援至らず、あはれ、堂堂たる男兒は、遂に忠義の爲に死し、血痕地を染めて碧色をなし、誰も之を埋藏する人もなかつた。ここに、賀蘭進明は、大兵

を擁しながら、その急を坐視して居たので、上方の劍を乞うて、此奴の首を刎ねなかつたのは、如何にも殘念、張巡は死んでも、なほ之を忘れなかつたことと思はれる。千年後の今日、海邊には、張巡の祠廟が現存して居るが、満地苔古く、あたりには、喬木叢をなし、折から秋風が吹き荒んで居る。ここに来て、塵を帶びた蜘蛛の巣に包まれた壁を撫でて、壁上の畫像を見ると、勇氣は其面に光り輝き、虬の様な鬚は張るが如く、その氣概も、彷彿として想像される。やがて、巫女は大招を歌ひ、客は酒を地に注いで、心ばかりの御祭をしたが、忠魂長しに死せず、ひよつとすると、天上から、故郷なる此地に歸つて來ることもあらうかと思はれるばかりである。

【餘論】 この一首は、青邱七古中の佳作で、完璧を以て稱すべきものである。起首八句は、祿山、亂を爲せし後の形勢を述べ、徐徐として、題に入る處は、綽綽として餘裕がある。孤城落日百戰後の六句は、唯陽城守の苦を敍し、ごたごたと事實を臚列せず、あつさりと簡潔に片付けた處は、殊に手際である。千年海上見三祠廟の六句は、その祠に詣でた時の感慨、結末二句は、殊に振つて居る。なほ、この詩は、平韻到底格であるから、後世、王漁洋がやかましく云つて居る平仄法で押し通し、すこしも出入なく、その爲に、聲調響亮を覺ゆるは、特に注意すべきことである。

靈巖琴臺

靈巖の琴臺

美人玉琴何處游。 美人、玉琴、何の處にか游ぶ、

遺譜寫入風泉秋。 遺譜、寫して入る風泉の秋。

落葉無人登舊榭。 落葉、人の舊榭に登るなし、

滿山明月鳥啼夜。 滿山の明月、鳥啼の夜。

【字解】 ① 遺譜、残されて居る音譜。

② 舊榭、榭は屋根ある臺。又、土で高く築き上げたるを塗といひ、木を用ひたるを榭と稱するといふ説もある。

【詩意】 姑蘇志に「靈巖山巔に琴臺あり、刻字猶は存す」とあるだけで、これに關する傳説などは、すこしも分からぬ。作者も、矢張、おのが想像を以て、この詩を作つたのであらう。

【詩意】 ここを琴臺と稱すからには、いづれ、美人が玉琴を彈じたことなどがあつたのであらう。その美人は、何處に住つたか分からず、その殘した音譜は、秋に響く風泉の聲の中に寫し入れたであらう。今しも、木がらしの風吹きさびて、落葉雨の如きの候、この臺に登つて古しへを弔ふ人だにくく、満山月明かにして、鳥啼く夜半は、愈よさびしい。

【餘論】 例の六朝短歌の遣法で、二句づつで韻を換へて居る。全體に於て、神韻綿繩、殊に後半二句は、人をして、意、自ら遠からしめる。

送劉將軍

劉將軍を送る

七言古詩 灵巖琴臺 送劉將軍

朔風吹沙復吹雪。

【字解】
〔一〕朔風 北風。

笑解吳鉤初欲別。

〔二〕吳鉤 卷一、吳鉤行の條に詳述

酒酣擊筑和悲歌。

〔三〕酒酣 して置いた、吳地より出づる鋭利な

將軍出關車騎多。

短劍。

將軍出づれば、車騎多し。

【題義】

説明に及ばぬ。但し、劉將軍の名字閱歷等は分からぬ。

【詩意】北風颶颶、沙を吹き上げ、又雪を吹き下し、塞外の荒寒は、さこそと思はれる。この時、笑つて吳鉤を解いて相贈り、愈よ御別になつた。やがて、酒酣なる時、悲歌に和して筑を擊ち、その聲中、將軍は、多くの車騎を引き具し、堂堂と闕を出でて行かれるが、願はくは、克く艱苦に耐へて、いかどの功名を立てられたいと、竊に希望する次第である。

【餘論】例の詞意平淺で、格別取り立てて論すべきものでもない。

和杜彥正徐幼文過甫里

〔一〕杜彥正・徐幼文の甫里を過ぐるに和す

桃花紅雨春江狹。

〔二〕桃花の紅雨、春江狭く、

【字解】〔一〕桃花紅雨 桃の花

舟逐飛鷗一艤雙夾。

〔三〕舟は飛鷗を逐ひ、艤は雙夾。

甫里祠前有客過。

〔四〕甫里的祠前、客の過ぐるあり、

竹弓莫射能言鳴。

〔五〕竹弓射る莫れ、能言の鳴。

我今塵夢何時歸。

〔六〕われ今、塵夢、何の時か歸らむ、

水漲夜沒祠前磯。

〔七〕水漲つて、夜没す祠前の磯。

長歌滄浪拍銅斗。

〔八〕長く滄浪を歌つて銅斗を拍つ、

誰醉先生一卮酒。

〔九〕誰か先生に酔せむ、一卮の酒。

【詩意】甫里を過ぎた詩を見せたから、これに和して作つたのである。

著恐る、熱蒙曰く、吾戲るるのみ」とある。〔五〕滄浪、滄浪の歌、孟子・楚辭等に見えて居る、滄浪之水清兮、可ニ以濯吾足。〔六〕銅斗、銅製の酒器、三尺も長い柄があるといふから、丁子の類。〔七〕先生、陸龜蒙を指す。

〔題義〕甫里は、蘇州の郭外で、白蓮寺の附近。杜彥正・徐幼文の二人は、前にも見えた。二人が甫里を過ぎた詩を見せたから、これに和して作つたのである。

が落ちて赤い雨の様だといふ意。李賀の詩に桃花亂落如紅雨」とある。

〔三〕艤雙夾、艤が二挺、舟の兩側につけてある。〔四〕甫里祠、甫里に在つて、陸龜蒙・張翰・范蠡を祀り、これを三高と稱して居る。〔五〕能言鳴、南部新書に「陸龜蒙・閑鳴・一飼、罷使あり、彈を挾んで、その尤なるものを斃す。熱蒙曰く、この鳴、能く人語を作す、蘇州に附して上進するを待つ。使者これを斃すは奈何と。使者これを斃すは奈何と。使者これを斃すは奈何と。使者これを斃すは奈何と。」

文句の種に成るから、忘れても、竹弓を放つてはならぬ。われは、今、風塵中の夢さめやらす、何時故郷に歸るとも分からぬ。今しも、春の水は、次第に漲つて、夜、祠前の斷磯を没する位。この時、銅斗を拍きつつ、滄浪の古曲を歌ひ、そして、陸先生に向つて、一杯を醸するのは、何人であらうか。予が歸らなければ、さういふ人も、外にあるまいと思ふ。

【餘論】產正・幼文、二人の作を誦し、甫里は、おのが故郷である處から、どうか早く其地に歸りたいといふ意を述べたのである。

送董軍咨赴邊

董軍咨の邊に赴くを送る

官亭風高酒旗折。官亭風高くして酒旗折れ。
獨騎山行滿鞍雪。獨騎山行、滿鞍の雪。
此時我友去邊城。この時、わが友、邊城に去る。
不是尋常送人別。これ、尋常の人別の別を送るならず。
誰憐磊落萬夫奇。誰か憐む、磊落萬夫の奇、
豪氣都成篋内詩。豪氣、すべて篋内の詩と成る。

乍見難留十日飲。乍ち見て、留め難し十日の飲、
重來定隔幾年期。重來定めて隔つ幾年の期、
隨身一劍寒江上。隨身の一剣、寒江の上、
遠事西平莫惆悵。遠く西平に事へて、惆悵する莫れ。
汝祖曾遭布被兒。汝の祖、かつて遭ふ布被の兒、
白頭只作江都相。白頭、只だ江都の相となる。

し、徒して西平郡に王たらしむ」と
ある。〔三〕汝祖 董仲舒を指す。
〔四〕布被兒 史記平掌書に「公孫弘、漢相を以て、布被、食、味を重ね
す、天下の先となる」とある。〔五〕江都相 漢書の董仲舒傳に「董仲
舒、江都の相となる」とある。

【字解】〔一〕官亭 官設の驛亭。

〔二〕磊落 小事に拘泥せずして、胸襟の廣きを云ふ。〔三〕十日飲 史記范增列傳に「秦王、平原君に書を遣つて曰く、願はくは、君と十日の飲を爲さむ」とある。〔四〕西平 唐の李晟、軍功を以て平西王に封ぜらる。唐書の本傳に「帝、乃ち晟を鳳翔醴泉節度使行營副元帥に拜

【題義】軍咨は、前に數ば見えたが、今で云へば、參謀といつた様な幕僚である。この詩は、軍咨の職に在る董某が邊境に于役するを送つたので、董の名字閱歷等は、不詳である。
【詩意】北風、勢すさまじく、驛亭の酒旗は、その竿を吹き折られる位。ひとり、馬に跨つて山路をたどり行けば、雪が鞍に満ちる。この時しも、わが友は、遠く邊城に向つて于役するとのことで、普通の送別とは、自然違つた譯である。君は資性磊落、萬人中の奇傑であつて、豪氣堂堂、時に雅懷を文字に寄せて、その作つた詩は、篋中に一ぱいである。ここに、君と偶然逢つたが、君を引き止めて、十日留飲することも出來ず、再び此處に來るのは、幾年を隔つることか、もとより豫測することが出来ない。君は、一剣を身に隨へ、寒江の上を過ぎ、それから、李西平の如き名將の幕賓となるので、

功名手に睡して待つべく、決して惆悵するには及ばない。君の先祖の董仲舒は、かつて布被を著て、緊縮を唱道した公孫弘に遣ひ、その手引で、江都王の相になつたが、君の榮達は、決して此に止まらざるべく、仍つて、其職務に精勵せられることを希望する次第である。

【餘論】 起四句は別時の光景、次の四句は別離の愁思、そして、終の四句は其人の榮達を囁望したので、董仲舒を引合に出したのも、決して虚泛ではない。

夜坐有感

夜坐感あり

一鶴不驚城鼓低。一鶴驚かず、城鼓低し。
窓雨入竹暗淒淒。窓雨竹に入つて、暗くして淒淒。
東鄰夜宴歌尚齊。東鄰は夜宴、歌尚ほ齊しく、
西鄰戰歿正悲啼。西鄰は戰歿、正に悲啼。

此時掩卷誰能問。この時、卷を掩うて誰か能く問はむ、

默坐燈前對瘦妻。

默坐燈前、瘦妻に對す。

【字解】 〔一〕 城鼓低。城中には鼓樓があつて、その上、鼓を鳴らして時刻を報する。その聲が低いといふ意。〔二〕 歌尚齊。歌の調子が前と變はらないふ。〔三〕 瘦妻。杜甫の北征に瘦妻面復光とある。

【語義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 城上の鼓聲は、陰にこもつて低く、宿れる鶴たに驚かず、窓前の雨は、叢竹に吹き入り、夜は淒淒として暗い。東鄰では、夜宴を催し、歌の調子も、前と異ならず、夜もすがら、打興じて居るが、西鄰では、主人が戰死したといふので、妻子眷屬が寄り集まつて、悲しげに泣いて居る。咫尺の地に在つて、悲歡全く異なるは、まことに感慨に堪へられぬ。予は、書卷を掩うて、さまざまの思想に沈んで居るが、誰も来て問ふ人もなく、貧苦の爲に瘦せた山妻に對し、燈前に默坐して居る。

【餘論】 短幅の中、無限の感慨を藏し、そして、平易の文字を以て之を出した處は、頗る白居易に類似して居る。

雪海爲楊孟載題 雪海、楊孟載の爲に題す

江國黃雲閉寒節。江國の黃雲、寒節を閉ぢ、
一鳥橫歸暮將絕。一鳥、横に歸つて、暮、將に絶えむとす。
問君何能海上游。問ふ、君、何ぞ能く海上に游ぶ、
萬頃茫茫看飛雪。萬頃茫茫として、飛雪を見る。

七言古詩 夜坐有感 雪海爲楊孟載題

【字解】 〔一〕 江國。江邊の地。
〔二〕 黃雲。雪けの雲。
〔三〕 寒節。冬の季節。
〔四〕 熱惱。熱せる煩惱。
〔五〕 鯨波。鯨の吹き上げる波。
〔六〕 山陰船。王子猷が山陰に在りし時、雪夜、興動さしに因り、舟に棹して

人間熱惱相煩煎。人間の熱惱、相煩煎。
 清夢遠欲追羣仙。清夢遠く、羣仙を追はむと欲す。
 鯨波無窮只飛渡。鯨波無窮、只だ飛渡す。
 此夜不要山陰船。この夜、要せず山陰の船。
 蓬萊玉妃下相見。蓬萊の玉妃、下に相見る、
 白鳳疏翎吹落遍。白鳳の疏翎、吹き落して遍ねし。
 月薄煙空看不分。月は薄く、煙は空しく、見て分かず、
 拂袖時驚有餘片。袖を拂つて、時に驚く餘片あるを。
 濤頭忽湧千崔嵬。濤頭、忽ち湧く千崔嵬。
 恍疑積處高城堆。恍として疑ふ、積處、高城堆するかと。
 齊州遙望皆一色。齊州、遙に望めば皆一色。
 却笑此水真銀杯。却つて笑ふ、この水、真に銀杯。
 瓊臺苦冷誰能宿。瓊臺、苦た冷かに、誰か能く宿せむ、

戴安道を訪ひしと、前に卷四、次二
 徐山人謂この詩中に詳述して置いた。
 【七】蓬萊玉妃 韓愈の雪の詩に從
 以二萬玉妃」とあり、陳鴻の長恨歌傳
 に道士あり、獨より来る、上皇の心
 に楊妃を念ふを知り、自ら言ふ、李
 少君の術あり、と。旁れく四虛上下
 を求め、東、天海を極め、蓬萊に跨
 り、最高山を見る。山上に樓閣多く、
 西廂の下に洞戸あり、東向して其門
 を闕ら、署して玉妃太眞院といふ
 とある。ここでは、必ずしも、楊貴妃
 を指したのであるまいが、これと
 同じ様な仙女を云つたのであらう。
 【八】千崔嵬 崔嵬たる無數の山。
 【九】高城堆 高城の如く堆くなつ
 て居る。【一〇】齊州 中原の地、李
 賀の詩に遙望齊州九點煙、一泓海水
 杯中瀛とある。【一一】銀杯 韓愈

覺後應愁體生粟。覺後、應に愁ふべし、體に粟を生ずるを、
 路斷那堪問碧桃。路断えて、那ぞ堪へむ、碧桃を問ふに、
 歌殘猶記聽黃竹。歌は残して、猶ほ記す黃竹を聞くを、
 回頭弱水淺復空。頭を回らせば、弱水淺く復た空しく、
 飄花倏滅隨春風。飄花、倏ち滅して春風に隨ふ。
 遷知何者非夢幻。遷ち知る、何者か夢幻に非ざらむ、
 雞鳴旭日初生東。雞鳴いて、旭日、初めて東より生す。

西方の仙境に在る川、十洲記に「鳳麟洲は、西海の中央に在り、洲の四面に弱水あつて、之を繞る、鴻毛も浮ばず、越ゆべからざるなり」とある。
 【題義】楊孟載は即ち楊基、題下の原注に「楊、かつて夢に海を過ぎ、因つて、以て自ら號す」とある。この詩は、楊基の依頼に應じ、雪海てふ雅號に就いて、その由來等を敍述したのである。
 【詩意】江國に低れこめたる雪けの黃雲は、冬の季節を閉ち、一鳥空を横ぎつて歸り、暮には、その跡を絶つて見えなくなりさうである。如何にして、君は、海上に遊び、萬頃の茫茫たる水面に降り注ぐ飛雪を見られたか。人間には熱せる煩惱があつて、その爲に、君も心中煩煎し、反對に夢中遠く羣

仙を追はむとし、やがて海上に来て見ると、鯨の吹き出す波は涯際なれども、そこを一氣に飛び渡つて、格別、山陰の王子猷の如く夜船を棹すにも及ばなかつた。かくて、海を横絶して蓬萊に到着する。玉妃が院から下りて来て遇つたが、雪は、白鳳凰の疏翎が吹き落される様である。その時、月色薄く、煙は晴れかかり、見ても、はつきりとはせず、袖を拂ふと、その餘片がひらひらと落ちる。見わたせば、濤頭には、崔嵬たる千峰を湧き起し、それが積つた處は、高城の堆くなつて居るかと疑ふばかり。はるかに、中原の地を望めば白一色、海水は唯だ銀杯の如く小さく見える。瓊臺は、雪中殊に冷かで、到底留宿することが出来ず、夢が覺めても、なほ皮膚に粟を生じた様な氣がしたであらう。ここに至つて、仙凡路すでに断え、碧桃が如何なつたかと問ふことも出来ず、歌聲すでに罷めども、それが黃竹の曲であつたことだけは覚えて居る。頭を回らせば、西方の弱水と雖も、淺くなつた揚句には、無くなつて仕舞ふし、花の飄る様な雪も、春風に隨つて、見る間に消えるので、如何なる物でも、夢幻に非ざるはなく、その夢幻境の忽然として消えた時分、雞の聲花やかに、瞳瞳たる旭日は、東に上り、この世界は復活し、君は再び塵底の人となつた。

【餘論】雪中の海を飛渡して、仙界に至つたといふは、夢とはいへ、極めて幻妙不可思議である。そこで、この首は、虛無恍惚、務めて游仙の體を爲し、文字の怪詭も、亦た之に稱うて居る。

送王邑長彥強 王邑長彥強を送る

雨昏沙漬兼葭溼。雨は昏くして、沙漬、蒹葭溼ひ。
離人暮逐江鴻集。離人、暮に江鴻の集まるを逐ふ。
田家回首隔村遙。田家、首を回らせば、村を隔てて遙に、
煙路逶迤一帆入。煙路逶迤として一帆入る。
縣齋明日寫秋吟。縣齋、明日、秋吟を寫す、
古城高樹清砧急。古城高樹、清砧急なり。

【字解】〔一〕沙漬。漬は入江。
〔二〕江鴻。江天を飛ぶ雁。
〔三〕逶迤。めぐる。
〔四〕縣齋。縣令の官舎。

【題義】邑長は邑宰、即ち縣令。この詩は、王彥強といふ人が縣令となつて、某地に赴任するを送つたのである。

【詩意】雨は昏く降りそそぎ、入江の沙地に生ふる蒹葭は、盡く溼ひ、風景、慘澹たる折しも、君は、離人となつて、江天を飛ぶ雁の止まれるを逐うて、旅路に登られる。首を回らせば、田家は村を隔てて遙に、煙立ちこむる水路をめぐつて、一帆は過ぎ行くのである。明日、縣令の官舎に落ちけば、古城の高樹、風を帶びて、砧うつ聲、急に聞こえ、君は兀坐して、秋を詠じた詩を寫されるであらう。

【餘論】送られるのも、格別知名の人ではなく、その任地も特記する價値もない位。折角ながら、面白い構想を試むるに由なく、唯だ尋常口頭の挨拶に代へた位の者で、その平淺庸近なるは、もとより免れぬ處である。

范魏公手書伯夷頌爲其裔孫天章題

范魏公の手書、伯夷頌、その裔孫天章の爲に題す

有宋名臣誰第一。有宋の名臣、誰か第一、
公爲國家眞輔翼。公は國家の爲に眞に輔翼。
豐功茂烈何煌煌。豊功茂烈、何ぞ煌煌たる、
信與日月爭輝赫。信に日月と輝赫を争ふ。
力扶風化成唐虞。力めて風化を扶けて唐虞と成し、
苦進忠謨同契稷。苦に忠謨を進めて契稷に同じ。
平生文詞耀金石。平生の文詞、金石に耀き、
乘暇亦嘗躬翰墨。暇に乘じて、亦た嘗て翰墨を躬らす。

【字解】 〔一〕 豐功 大功。〔二〕 茂烈 茂は其多きを云ひ、烈は其高きをいふ。〔三〕 煌煌 光り輝く貌。〔四〕 輝赫 光明。〔五〕 風化 德を以て教化すること。〔六〕 唐虞。堯舜。〔七〕 苦。れんころに。〔八〕 忠謨。君國の爲を思つてする謀畫。〔九〕 契稷。ともに堯舜時代の名臣。稷は士師に官して民に稼穡を教へたので、周の祖。〔一〇〕 丰姿。姿に同じ。〔一一〕 勤直 力づよくし

丰姿勁直儼端人。丰姿勤直、端人儼たり、
氣韻剛方著心畫。氣韻剛方、心畫に著はる。
伯夷況是聖之清。伯夷は、況んや是れ聖の清、
貪夫可廉懦可立。貪夫も廉なるべく、懦も立つべし。
當時書寫豈無謂。當時書寫、豈に謂なからむや、
要示後人爲鑑格。後人に示して鑑格と爲すを要す。
三百年來筆尙新。三百年來、筆、尙ほ新なり、
敬翫如親覩顏色。敬翫、親しく顔色を観るが如し。
世間至寶誠難得。世間の至寶、誠に得難し、
貽爾子孫宜什襲。爾の子孫に貽して、宜しく什襲すべし。

者なり、伊尹は聖の任なる者なり、柳下惠は聖の和なる者なり、孔子は聖の時なる者なり」とある。〔一〕 贪夫可廉懦可立 同じく孟子に「伯夷は、目に惡色を視す、耳に惡聲を聽かす、その君に非ざれば事へず、その民に非ざれば使はず、治まれば進み、亂るれば退く。横政の出づるところ、横民の止まるところ、婦人と處り、朝衣朝冠を以て童炭に坐するが如きを思ふなり。射の時に當りて、北澤の濱に居るは、以て天下の清を待つなり。故に伯夷の風を聞くものは、頑夫も廉、懦夫も志を立つるあり」と見ゆ。〔二〕 無謂。

謂は、いはれ、理由。【一】 錄格 格は正す。【二】 什製 關子に「宋人、燕石を得て、以て寶と爲すや、革匣十重、綴市十挺し
て之を藏す」とある、幾重にも包む。

【題義】 范仲淹を魏公と稱するは、前に卷九、偃松行の詩中に注して置いた通り、紹興の初に追封されたからである。仲淹の閱歷は、宋史の本傳に、「吳縣の人、字は希文、生まれて二歳にして孤、母、更めて長山の朱氏に適く。その姓に從ひ、說と名づく。すでに長じ、感泣、母に辭して去り、感同文に依つて學ぶ。祥符の進士に擧げられ、はじめて、姓に歸り、名を更ふ。晏殊、薦めて祕閣校理となす。感激して、天下の事を論する毎に、奮つて身を顧みず。一時の士大夫、矯厲して氣節を尙ぶは、仲淹より之を倡ふ。仁宗の朝、吏部員外郎に遷り、開封府に權たり、呂夷簡に忤ひ、罷められて饒州に知たり。元昊反す、龍圖閣直學を以て、夏竦に副として陝西を經略し、邊を守ること數年、號令簡明、士卒を愛撫す。羌人、呼んで龍圖老子といひ、夏人亦た相戒めて、敢て其境を犯さず、曰く、小范老子、胸中自ら數萬の甲兵あり、と。旋つて、樞密副使に拜せられ、參知政事に進む、中外そこの功業を想望す。仲淹、俸濫を裁削し、官吏を考覈し、僥倖する者に悅ばれず、出でて河東陝西宣撫使となり、戶部侍郎に遷り、青州に遷る。會ま病んで潁州を請ひ、未だ至らずして卒す、兵部尚書を贈り、文正と謚す。丹陽集及び奏議尺牘あり。仲淹、内剛にして外和、秀才たりし時、天下を以て己の任となす。かつて言ふ、天下の憂に先つて憂へ、天下の樂に後れて樂む、と。尤も善を樂み、施予をして作つたのである。

【詩意】 宋代の名臣中、誰が第一かといふと、即ち范仲淹であつて、公は、國家の爲に、眞正の輔佐羽翼となり、その大功は、多くして且つ盛に、煌煌として耀きたり、天上の日月と光輝を争つて居る。公は、力の限りを盡して風教を扶け、君をして、堯舜たらしめむとし、懸に忠良なる謀畫を進めて、全く契や后稷と同じである。その平生作つた文詞は、金石に刻せられて、後世を照耀して居るが、閒暇なる折ふしは、親ら翰墨に擧はれた。その書は、姿が勁直にして、端人の儼然たるが如く、氣韻は、清剛方正にして、心盡の名に負かず、ありありと見えわたつて居る。まして、この文章は、伯夷の頌といひ、伯夷は孟子から、聖の清なるもの、その風を聞かば、貪夫も化して廉潔となるべく、儒夫も志を立てる所とさへ云はれた位。當時、公が手づから自作の此頌を寫されたのは、決して無意味ではなく、後人に示して、鏡となし、格式と爲さしめたのであらう。公の死後、今日に至るまで、三百年になるが、敬んで、その筆蹟を展示すると、親しく、顔色を見て、御目にかかつた様な氣がする。かういふ至寶は、世間に於て、まことに得がたいものであるから、君は、子孫に傳へ、裁

重にも包んで大切に保存せねばならぬ。

【餘論】起六句は、仲淹の功業を歎し、次の四句は、文詞より其書に及び、次の四句は、伯夷頌に就いて述べ、結四句は、その至寶たるべきことを言うて、珍藏せむことを囁したのである。

送劉冠軍

劉冠軍を送る

朔風吹雪復吹沙。朔風、雪を吹き、復た沙を吹く。
壯士此日行辭家。壯士、この日、行く、家を辭す。
酒酣悲歌和擊筑。酒酣にして、悲歌、擊筑に和す、
四座離人淚相續。四座の離人、涙相續ぐ。
黃鵠一舉其奈何。黃鵠一舉、其れ奈何、
同心遠別今無多。同心の遠別、今多きなし。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】北風は雪を吹き下したり、沙を吹き上げたりして、寒景蕭條。この時しも、君は家を辭して、

【字解】〔一〕壯士・劉冠軍を指す。〔二〕離人・故郷を離れて他に寄寓して居る人。〔三〕黃鵠・一舉類師古の急就篇注に「黃鵠は一舉千里、その鳴聲鶴鶴」とあるし、合壁事類に「鵠は禽の大なるもの、色白し、又黄なるものあり、善く高く翔る、湖海江漢、間ま之あり」と記してある。

遠征の途に上られる。やがて、別筵酒酣に、擊筑の聲に和して、悲歌を唱へ出せば、滿座の人は、もと客子たる身の涙が止め度なく流れる。君は黃鵠の舉がるが如く、千里の遠くに往かれるのは、どうも仕方が無いことで、それに就けても、同心の友の遠別は、他に其例なく、まことに断腸の思に堪へられぬ。

【餘論】この詩は、前に見えた送劉將軍の詩と極めて相類し、朔風吹雪復吹沙は、彼に朔風吹沙復吹雪に作り、酒酣悲歌和擊筑は、彼に酒酣擊筑和悲歌に作つてある。しかし、措辭上から見ると、此は稍や冗長、彼は簡勁、もしかすると、此は初稿で、後に彼の如く改訂したのではあるまい。

奉橘圖

橘を奉る圖

堂前紅橘吹香早。堂前の紅橘、香を吹いて早く、
堂上白頭人欲老。堂上白頭、人、老いむと欲す。
韓家公子勝陸郎。韓家の公子、陸郎に勝る、
摘來長帶秋林霜。摘み來つて、長く帶ぶ秋林の霜。

【字解】〔一〕紅橘・本草綱目に「朱橘は、小にして、色赤きこと火の如し」とある、わが邦でも、べに蜜柑と稱する一種があつて、大方それだらうと思はれる。〔二〕韓家公子・名字等は不詳。〔三〕陸郎・吳志陸

妻江別後親應健。

妻江別後、親、應に健なるべし。
每見畫圖如見面。

畫圖を見る毎に、面を見るが如し。

願君榮顯親平安。

願ふ、君は榮顯、親は平安、

年年薦橘堆金盤。

年年、橘を薦めて金盤に堆きを。

君有阿婆我無母。

君に阿婆あり、我に母なし、

題詩對此歎歎久。

詩を題せむとし、此に對して、歎歎久し。

【通義】奉橘圖は、韓某が親ら橘を其母に進める處を畫かせたので、母は妻江に居り、おのれは南京に居たらしく、作者は舊知の間柄である處から、その孝思を愛でて、この詩を題したものと見える。橘は、普通、たちばなと訓すれども、實際は、かかる木なく、矢張、蜜柑であることは、本草綱目に明かである。

【詩意】堂前の紅蜜柑は、香を吹いて熟すること早けれども、堂上の母は、白髪頭で、大分老いかかつて居る。韓家の公子の孝心深きことは、古しへの陸續にも勝り、秋林の霜を帶びた儘なる其實を摘んで、母に進めたことがあつて、それが現に此に畫にかかれて居る。公子は、妻江なる其母と別れて、ひとり此地に寄寓して居るが、母も相變らず壯健なるべく、そして、その畫を見ると、いつでも母の

顔を見る様な想がするとのことである。願はくは、君は次第に出世をなし、母は何時でも無事であり、そして、年年、金盤に堆きばかりの蜜柑を進める様にして欲しいと思ふ。君には、母があつて、まことに結構であるが、われは、幼時母を喪ひ、孤獨の身は、まことに寂しい。そこで、詩を題せむとし、この畫に對すれば、感慨窮まるず、やや久しく、啜り泣をして居た位である。

【餘論】一應無難に、且つ遺憾なく言ひ終せて居る。結末二句は平淺なれども、當意即妙、作者の心

情が窺はれて、覺えず、讀者をして黯然たらしめる。

續傳に「績、年六歳、九江に於て袁術に見ゆ。術、橘を出す。績、三枚を懷にして去り、拜辭して地に墜す。術、詣つて曰く、歸つて母に遣らむと欲す、と。術、を懷にするか。績、跪いて答へて曰く、歸つて母に遣らむと欲す、と。術、大に之を奇とす」とある。【四】同。

妻老母。【五】歎歎すすり泣き。

309
65

卷之三

終

